

深江地区遺跡群

深江石町遺跡

—福岡県糸島市二丈深江字石町所在遺跡の発掘調査報告書—

糸島市文化財調査報告書

第 30 集

2024

糸 島 市



1-1 深江石町遺跡全体写真（北東から）



1-2 3号土坑木製品出土状況（北西から）



2-1 3号土坑木甲未成品出土状況（北西から）



2-2 3号土坑木甲未成品出土状況（北東から）



3-1 木甲（後胴表）



3-2 木甲（後胴裏）



66-12

4-1 木甲（前胸左表）



66-12

4-2 木甲（前胸左裏）



66-13

4-3 木甲（前胸右表）



66-13

4-4 木甲（前胸右裏）



67-14

4-5 木甲（半裁材）



67-15

4-6 半裁材

序

本書は、令和4年度に、糸島市二丈深江における宅地造成に伴い実施した深江石町遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡が所在する糸島市は、中国の歴史書『魏志倭人伝』に記される「伊都国」に比定される場所で、中国・朝鮮半島との交流を基礎に、弥生時代の政治・外交・経済の中心地として発展し、わが国の歴史を考える上で重要な役割を果たしています。

さて、本書に収められた深江石町遺跡は、「伊都国」の東の玄関口として栄えた拠点集落の一部を発掘調査したものです。特に、この遺跡から出土しました弥生時代の外来系土器や木製短甲は、深江の拠点集落の様相を解き明かす重要な資料といえます。




本書は、このような貴重な成果をまとめ、皆様に公開するものであり、当地の歴史を解明する上での一助となれば幸いです。

なお、末筆となりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました周辺住民の方々ならびに報告書作成にあたり、ご協力いただきました関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和6年3月31日

糸島市長 月形祐二

例言

1. 本書は宅地造成に伴い、令和4年度に糸島市が行った深江石町遺跡の発掘調査の記録である。
2. 深江石町遺跡は、糸島市二丈深江に所在し、約3,352㎡にわたって発掘調査を行った。
3. 遺構の実測にあたっては、江崎靖隆が行い、俣島田組の協力を得た。また、遺構の写真は、空中写真を俣島田組に委託し、その他は江崎が行った。
5. 遺物復元は、田中阿早緑、藤野さゆり、蔵田和美、内山久世、山崎嵩雄、田尻裕泰が行った。
6. 遺物の実測は、江崎・栗野翔太・永島さくらの他に、田中、藤野、蔵田、内山、山崎、田尻、畑迫優香、川島美穂が行い、その製図は、藤野、内山、田尻が行った。
7. 遺物の写真は、江崎のほか、木器の遺物撮影は、(有)システム・レコに委託した。
8. 本書に掲載する全体図及び遺構図で使用した座標は、世界測地系平面直角座標系第Ⅱ系に準拠した。また、図中に使用する方位は国土座標の座標北で、真北から0° 19' 西偏している。
9. 出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下のとおり
丹塗り  スス・コゲ  二次焼成痕 
10. 出土木製品の樹種同定は、一般社団法人 文化財科学研究所センター、土器付着赤色顔料の化学分析は、福岡市埋蔵文化財センターが行い、その報告もあわせて依頼した。
11. 深江遺跡群における木器の様相については、鶴来航介（福岡市埋蔵文化財課文化財主事）に玉稿を賜った。
12. 本調査に伴う出土資料および記録類は、糸島市に収蔵保管し、利用に供する予定である。
13. 本書の各執筆者は、江崎、栗野、永島が行い、目次に記載し、その編集は、江崎が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
I. 調査に至る経緯	1
II. 調査の組織	1
第2章 位置と環境	2
I. 地理的環境	2
II. 歴史的環境	2
第3章 調査の記録	8
I. 深江石町遺跡の調査概要	8
II. 基本層序	8
III. 遺構と遺物	9
1. 谷部包含層	9
(1) 概要	9
(2) 出土遺物	9
2. 遺構と遺物	23
(1) 掘立柱建物	23
(2) 溝	35
(3) 土坑	45
(4) 小穴・柱穴・その他土坑	87
IV. まとめ	112
第4章 各論	118
I. 深江石町遺跡における自然科学分析 (一般社団法人 文化財科学研究センター)	118
II. 土器片・木製品に付着する赤色顔料の材質分析 (福岡市埋蔵文化財センター 清金良太・藤崎彩乃)	138
III. 木材運用の考古学的検討 (福岡市埋蔵文化財課 鶴来航介)	141

挿図目次

第1図	糸島市の所在地	2	第42図	3号溝断面実測図(1/40)	43
第2図	糸島市内主要遺跡分布図(1/150,000)	3	第43図	3号溝出土遺物実測図(1/4)	43
第3図	周辺主要遺跡分布図(1/10,000)	4	第44図	4号溝断面実測図(1/40)	44
第4図	深江石町遺跡全体図①(1/500) 弥生～現代	5	第45図	4号溝出土遺物実測図(1/4)	44
第5図	深江石町遺跡全体図②(1/500) 弥生	6	第46図	1号土坑土層断面実測図(1/30)	45
第6図	深江石町遺跡全体図③(1/500) 現代	7	第47図	1号土坑断面実測図(1/30)	48
第7図	土層柱状図(1/30)	8	第48図	1号土坑出土遺物実測図①(1/4)	49
第8図	谷部包含層出土遺物実測図① (1/4、●は1/8)	10	第49図	1号土坑出土遺物実測図②(1/4)	50
第9図	谷部包含層出土遺物実測図②(1/4)	12	第50図	1号土坑出土遺物実測図③(1/4、●は1/3)	51
第10図	谷部包含層出土遺物実測図③(1/4)	14	第51図	1号土坑出土遺物実測図④(1/3)	52
第11図	谷部包含層出土遺物実測図④(1/4)	16	第52図	1号土坑出土遺物実測図⑤(1/4)	53
第12図	谷部包含層出土遺物実測図⑤(1/4)	18	第53図	1号土坑出土遺物実測図⑥(1/4)	54
第13図	谷部包含層出土遺物実測図⑥(1/4)	20	第54図	1号土坑出土遺物実測図⑦(1/4)	55
第14図	谷部包含層出土遺物実測図⑦(1/3)	21	第55図	1号土坑出土遺物実測図⑧(1/4)	56
第15図	谷部包含層出土遺物実測図⑧(1/3)	22	第56図	1号土坑出土遺物実測図⑨(1/4)	57
第16図	1号掘立柱建物断面実測図(1/40)	23	第57図	2号土坑断面実測図(1/40)	58
第17図	1号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)	24	第58図	2号土坑出土遺物実測図①(1/4)	59
第18図	2号掘立柱建物断面実測図(1/40)	24	第59図	2号土坑出土遺物実測図②(1/4、●は1/3)	60
第19図	2号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)	24	第60図	2号土坑出土遺物実測図③(1/4)	61
第20図	3号掘立柱建物断面実測図(1/40)	25	第61図	2号土坑出土遺物実測図④(1/4)	62
第21図	3号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)	25	第62図	2号土坑出土遺物実測図⑤(1/4)	63
第22図	4号掘立柱建物断面実測図(1/40)	26	第63図	3号土坑断面実測図(1/40)	65
第23図	5号掘立柱建物断面実測図(1/40)	28	第64図	3号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)	66
第24図	5号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)	29	第65図	3号土坑出土遺物実測図②(1/5)	67
第25図	6号掘立柱建物断面実測図(1/40)	29	第66図	3号土坑出土遺物実測図③(1/6)	68
第26図	6号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)	29	第67図	3号土坑出土遺物実測図④(1/6)	69
第27図	7号掘立柱建物断面実測図(1/40)	30	第68図	3号土坑出土遺物実測図⑤(1/4)	71
第28図	7号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)	30	第69図	3号土坑出土遺物実測図⑥(1/4)	72
第29図	8号掘立柱建物断面実測図(1/40)	32	第70図	4号土坑断面実測図(1/40)	73
第30図	8号掘立柱建物出土遺物実測図①(1/4)	32	第71図	4号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)	75
第31図	8号掘立柱建物出土遺物実測図② (1/4、●は1/6)	33	第72図	4号土坑出土遺物実測図②(1/4)	76
第32図	8号掘立柱建物出土遺物実測図③ (1/4、●は1/6)	34	第73図	5号土坑断面実測図(1/30)	77
第33図	区画溝平面図(1/250)	35	第74図	5号土坑出土遺物実測図(1/4、●は1/3)	78
第34図	1号溝東西土層断面実測図(1/30)	36	第75図	6号土坑断面実測図(1/30)	79
第35図	1号溝断面実測図(1/40)	37	第76図	6号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)	80
第36図	1号溝内糞棺出土状況断面実測図 (1/20)	38	第77図	6号土坑出土遺物実測図②(1/4)	81
第37図	2号溝出土糞棺実測図(1/8)	38	第78図	7号土坑断面実測図(1/30)	81
第38図	1号溝出土遺物実測図(1/4、●は1/3)	39	第79図	7号土坑出土遺物実測図(1/4)	82
第39図	2号溝断面実測図(1/40)	40	第80図	8号土坑断面実測図(1/30)	82
第40図	2号溝出土遺物実測図①(1/4)	42	第81図	8号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)	83
第41図	2号溝出土遺物実測図②(1/4、●は1/3)	43	第82図	8号土坑出土遺物実測図②(1/4)	84
			第83図	8号土坑出土遺物実測図③(1/4)	85
			第84図	9号土坑断面実測図(1/30)	86

第85図	9号土坑出土遺物実測図 (1/4) ……………86	第93図	P-134、138、142、144、145、147、150、152、153断面実測図 (1/20) ……………106
第86図	P-7、9、10、12、14、15、16、18、21、23断面実測図 (1/20) ……………99	第94図	P-151、154、155、156、157、159、162、163断面実測図 (1/20) ……………107
第87図	P-25、26、27、29、32、34、35、37断面実測図 (1/20) ……………100	第95図	P-7～81出土遺物実測図 (1/4) ……………108
第88図	P-40、43、44、45、47、53、54、56断面実測図 (1/20) ……………101	第96図	P-82～114出土遺物実測図 (1/4、●は1/3) ……………109
第89図	P-60、66、69断面実測図 (1/20) ……102	第97図	P-115～155出土遺物実測図 (1/4) ……110
第90図	P-70、77、78、80、81、82、86、91、92、93、94断面実測図 (1/20) ……………103	第98図	P-151、156～163出土遺物実測図 (1/4) ……………111
第91図	P-95、97、99、100、101、103、105、106、109断面実測図 (1/20) ……………104	第99図	深江石町遺跡遺構変遷図 (1/700) ……………113
第92図	P-110、111、112、113、114、115、116、117、119、133断面実測図 (1/20) ……………105	第100図	P-112出土絵画土器実測図 (1/4) ……………114

図版目次

巻頭図版

1-1	深江石町遺跡全体写真 (北東から)	4-4	4号土坑遺物出土状況 (北から)
1-2	3号土坑木製品出土状況 (北西から)	4-5	5号土坑遺物出土状況 (南から)
2-1	3号土坑木甲未成品出土状況 (北西から)	5-1	6号土坑遺物出土状況 (西から)
2-2	3号土坑木甲未成品出土状況 (北東から)	5-2	6号土坑遺物出土状況 (西から)
3-1	木甲 (後胴裏)	5-3	7号土坑遺物出土状況 (南から)
3-2	木甲 (後胴裏)	5-4	8号土坑遺物出土状況 (東から)
4-1	木甲 (前胴左表)	5-5	P-151 遺物出土状況 (南西から)
4-2	木甲 (前胴左裏)	6	深江石町遺跡出土遺物①
4-3	木甲 (前胴右表)	7	深江石町遺跡出土遺物②
4-4	木甲 (前胴右裏)	8	深江石町遺跡出土遺物③
4-5	木甲 (半裁材)	9	深江石町遺跡出土遺物④
4-6	半裁材	10	深江石町遺跡出土遺物⑤
図版 1-1	深江石町遺跡全体写真 (東から)	11	深江石町遺跡出土遺物⑥
1-2	1号溝完掘状況 (南から)	12	深江石町遺跡出土遺物⑦
2-1	1号溝出土土器検出状況 (南から)	13	深江石町遺跡出土遺物⑧
2-2	1号溝東西土層断面状況 (北から)	14	深江石町遺跡出土遺物⑨
2-3	1号溝甕棺出土状況 (東から)	15	深江石町遺跡出土遺物⑩
2-4	1号溝甕棺出土状況近景 (東から)	16	深江石町遺跡出土遺物⑪
2-5	2号溝完掘状況 (東から)	17	深江石町遺跡出土遺物⑫
3-1	1号土坑遺物出土状況 (南から)	18	深江石町遺跡出土遺物⑬
3-2	1号土坑木器出土状況 (北から)	19	深江石町遺跡出土遺物⑭
3-3	1号土坑土器出土状況 (西から)	20	深江石町遺跡出土遺物⑮
3-4	2号土坑遺物出土状況 (南から)	21	深江石町遺跡出土遺物⑯
4-1	3号土坑遺物出土状況 (北から)	22	深江石町遺跡出土遺物⑰
4-2	3号土坑遺物出土状況 (南東から)	23	深江石町遺跡出土遺物⑱
4-3	3号土坑遺物出土状況 (南東から)		

第1章 はじめに

I. 調査に至る経緯

令和4年2月16日付で、株式会社C & Cから糸島市二丈深江1809番地の宅地造成工事約12,121㎡に関して、埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第94条第1項）が、糸島市文化課に提出された。

対象地周辺は、深江井牟田遺跡や深江城崎遺跡など深江遺跡群を構成する重要な遺跡があり、楽浪系土器や木器群が出土する地域であることから、事業対象区の試掘調査が必要な旨を回答した。地権者承諾の元に、試掘調査を行い、その結果、開発全体の東半分を中心に、砂丘と谷部が存在し、砂丘上に柱穴群や溝、谷部には、弥生時代の土器堆積が確認され、遺構や遺物が濃く分布することから、遺跡が破壊される箇所および道路のような永久構造物に対して、発掘調査の必要性を認めた。

文化課は、試掘成果に基づき、開発側と協議を行い、住宅部分については、基礎が造成盛土に収まる建築とすることで発掘調査対象から除外し、永久構造物である道路部分を対象とすることで合意し、発掘調査対象面積は3,352㎡となった。発掘調査は令和4年7月25日に着手し、令和5年3月31日に終了した。

II. 調査の組織

発掘調査および報告書作成に係る組織は、以下のとおりである。

調査主体者 糸島市

調査地点 糸島市深江石町遺跡（糸島市二丈深江1809番地ほか）

調査年度 令和5年度

総括	地域振興部長	波多江 修士
	文化課長	村上 敦
	文化課長補佐兼文化財係長	河合 修
調査担当	同 文化財係 主幹	江崎 靖隆

報告書作成 令和6年度

総括	地域振興部長	波多江 修士
	文化課長	村上 敦
	文化課長補佐兼文化財係長	河合 修
報告書担当	同 文化財係 主幹	江崎 靖隆
	同 文化財係 主事	粟野 翔太
	同 文化財係 主事	永島 さくら

第2章 位置と環境

I. 地理的環境

糸島市は、平成22年1月1日に、前原市、二丈町、志摩町が合併して誕生し、東は福岡市、西は佐賀県唐津市、南は佐賀県佐賀市に隣接する。

地理的環境としては、南に井原山から雷山、羽金山、女嶽、浮嶽に至る脊振山系の山々と北から西に玄界灘が広がる。主な平野は怡土平野、一貴山・深江平野・糸島低地帯の三か所で、本書に掲載する深江石町遺跡は、一貴山・深江平野の北部域にあたる。

同地は、一貴山川、羅漢川、柳川によって形成された沖積平野で、海浜部には砂丘が形成される。砂丘は南側から

第1砂丘～第3砂丘まであり、第3砂丘（新砂丘）が現在の海岸線によって形成され、第1、2砂丘（古砂丘）が縄文海進時の海岸線に沿って形成される砂丘である。本遺跡や深江井牟田遺跡は、この第1砂丘上の遺跡である。

このように、深江地域に広がる遺跡は、古砂丘の影響のもとに展開していると考えられ、調査では、古砂丘の様相を知ることは重要である。



第1図 糸島市の所在地

II. 歴史的環境

深江石町遺跡が所在する深江地区遺跡群は、平成2年度に発掘調査が行われた深江井牟田遺跡（第3図3）を嚆矢として、遺跡の重要性が認識された。この遺跡では、祭祀土坑や谷部の調査により、中国式銅剣や楽浪系土器が出土し、「伊都国」西部における港湾拠点集落との指摘がなされている。

令和3年度に調査された深江城崎遺跡（第3図2）は、拠点集落の縁辺部の調査であり、谷部には2層の堆積があり、弥生時代後期後半～終末期の包含層から、楽浪系土器や外来系土器、内面朱付着土器、木製品、弥生時代中期末～後期初頭の包含層からは、外来系土器、「鯨」を描いた絵画土器、木製品など深江遺跡群の性格を知るうえで重要な遺物が出土している。

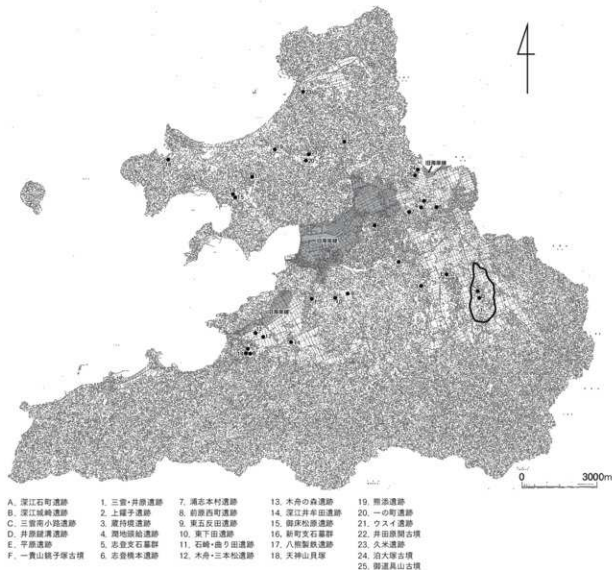
また、二丈中学校校内遺跡（第3図45）で、竪穴式住居、甕棺墓（弥生時代中期）と大溝（弥生時代後期）、深江辻遺跡（第3図4）で甕棺墓（弥生時代後期）が検出されている。大溝は弥生時代後期前半～古墳時代初頭の土器を内包し、環濠もしくは集落北限の区画溝と考えられているが、集落外縁部に甕棺墓域があることから居住域と墓域を区画する溝の可能性が高いと考えられる。この大溝は、深江井牟田遺跡の方向へと延びているが、両者の関連については、調査地点が少なく、大溝の断面形状も特異であるため、慎重に判断すべきであろう。これらの遺跡が分布す

る古砂丘は、10haの規模であるが、その集落構造については、不明な点が多く、今後の調査に期待するところである。

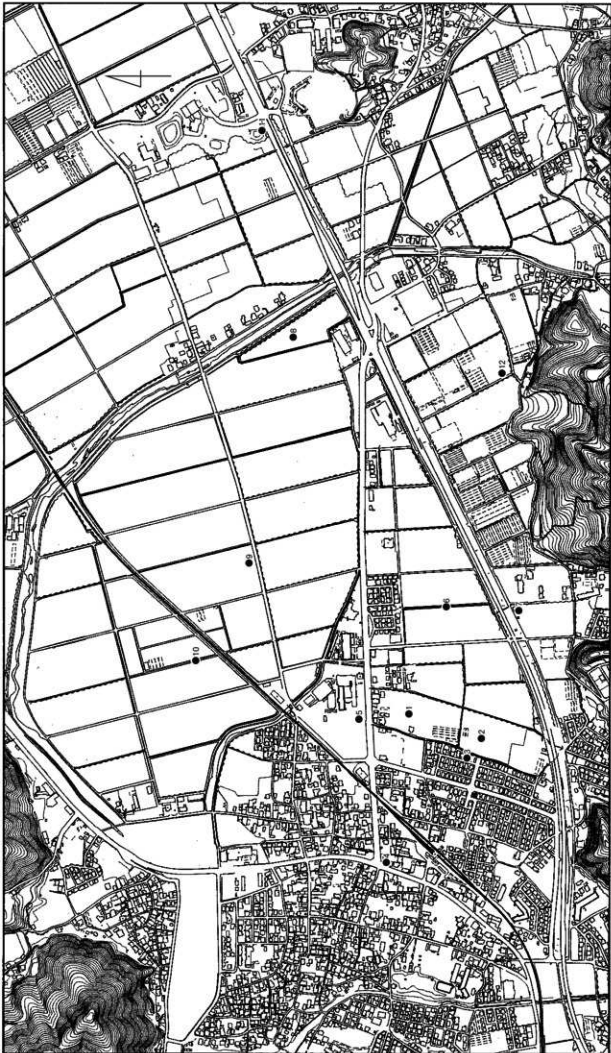
さて、東側に目を転じると、砂丘と湿地帯が交互に連なる地形を呈していることが、これまでのほ場整備事業（平成3～7年度）に伴う発掘調査によって明らかとなっている。その砂丘上にある木舟・三本松遺跡（第3図9）では、1～3次調査で、69基の甕棺墓群（弥生中期）が調査され、管玉や硬玉製勾玉、磨製石剣をもつ甕棺墓が確認されており、弥生時代中期の集落があったものと考えられる。また、深江・中道遺跡1次調査（第3図6）では、自然流路（縄文時代晩期～弥生時代早期）と竪穴式住居（古墳時代前期）、深江・中道遺跡2次調査（第3図7）で、旧河川（縄文時代晩期～弥生時代後期）と取水施設、杭列、矢板列が確認されている。縄文時代晩期から長きにわたる営みが考えられるが、調査箇所が少なく、不明な点も少なくない。

これまでの調査を勘案すると、深江平野は、弥生時代前期までに陸化が進み、その過程で砂丘と湿地帯が形成されている。木舟の森遺跡（第3図10）では、平安時代後期～鎌倉時代の居館跡が確認されており、陸化がさらに進んでいる。曲り田遺跡や塚田南遺跡も含めた総体としてとらえる必要があり、古代、中世においても注目される地域である。

このように、この地域の人々は、こうした環境の変化に適応した生活の営みがあったことが、想定され、新たな調査によって、次第に深江地域の歴史的特質が明らかとなっている。

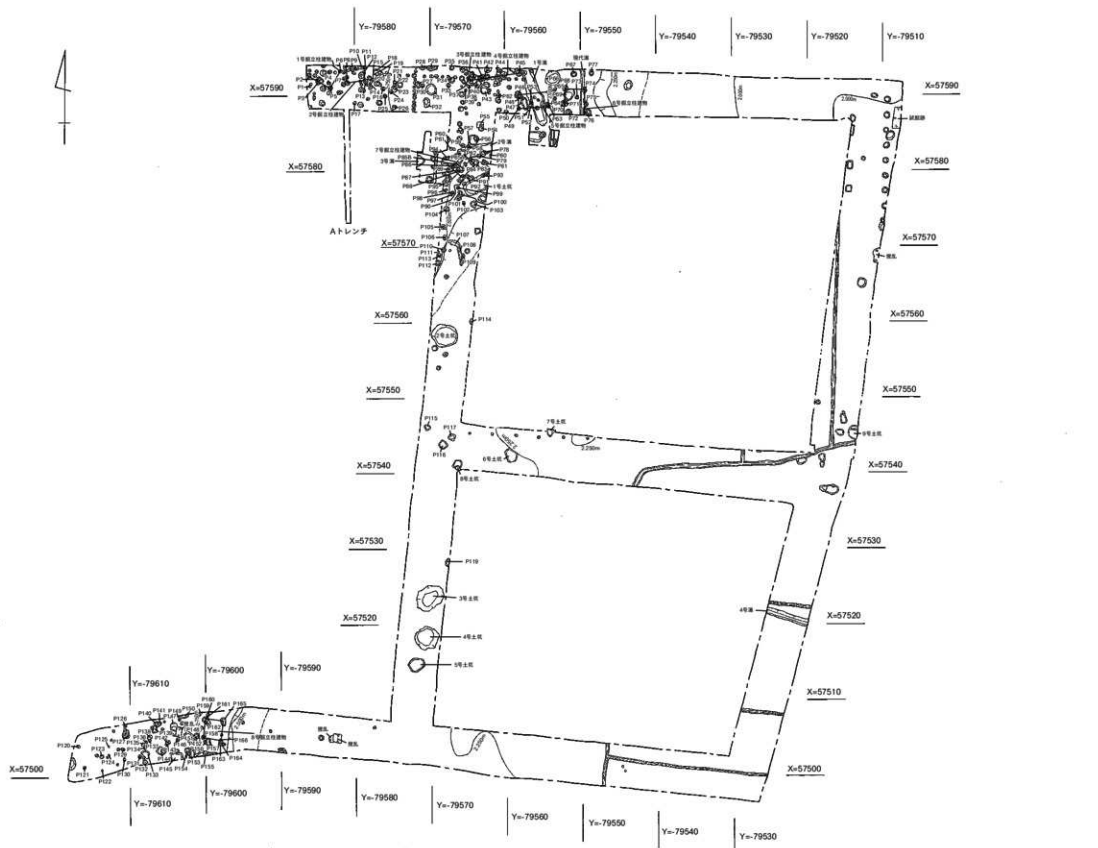


第2図 糸島市内主要遺跡分布図(1/150,000)

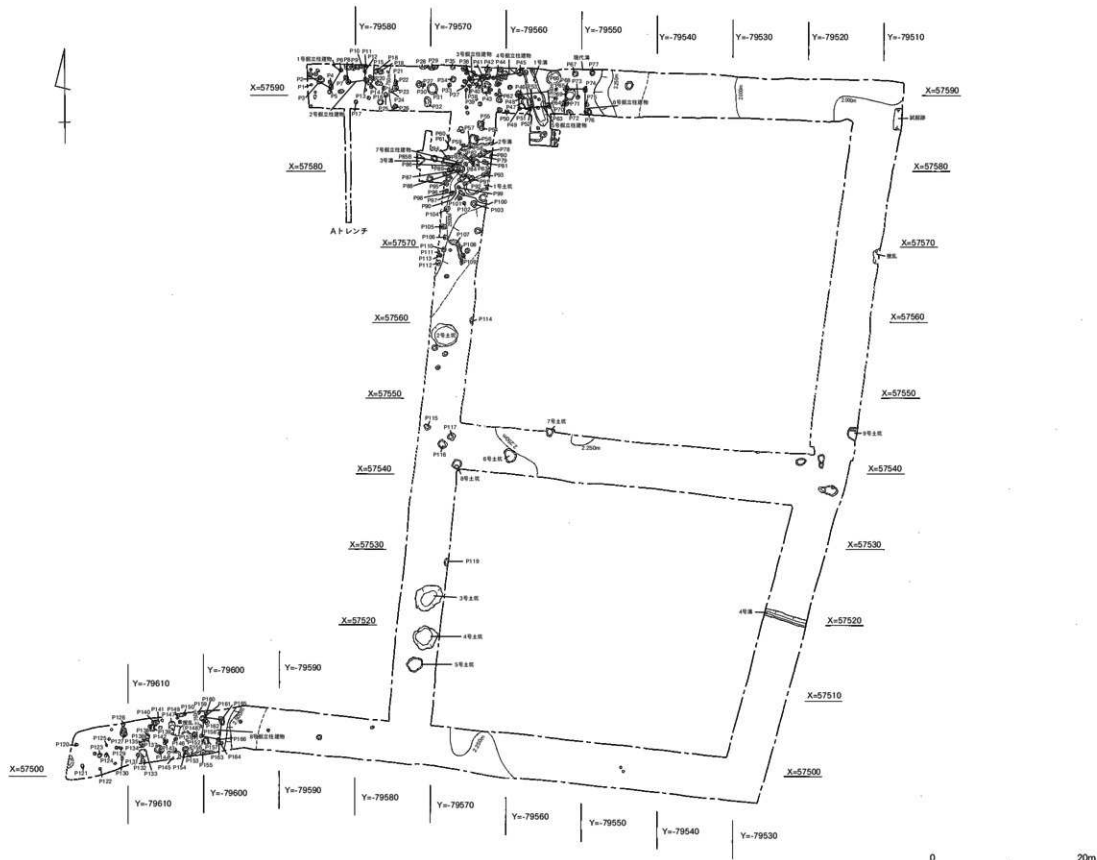


第3圖 周辺主要道路分布圖(1/10,000)

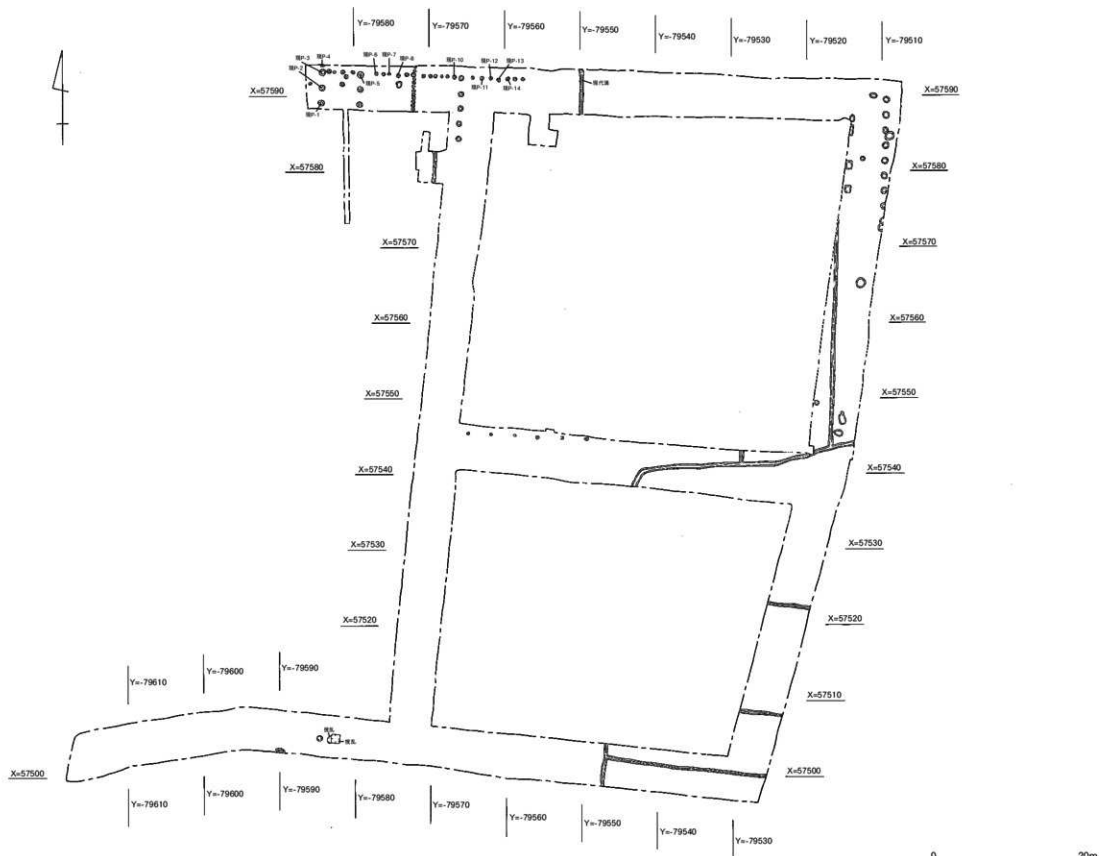
1. 龍江村道線 2. 龍江鎮道線 3. 龍江鎮中田道線 4. 龍江鎮道線 5. 二七中學校的道線
6. 龍江中道線 7. 龍江中道線改裝 8. 鎮道線 9. 本街三米道線 10. 本街的道線
11. 鎮中道線 12. 上龍江小橋道線



第4図 深江石町遺跡全体図① (1/500)弥生~現代



第5図 深江石町遺跡全体図② (1/500)跡生



第6圖 深江石町遺跡全体圖③ (1/500)現代

第3章 調査の記録

I. 深江石町遺跡の調査概要

深江石町遺跡は、糸島市二丈深江字石町1809番地ほかに所在する遺跡である。

当遺跡は、令和3年度に発掘調査を行った深江城崎遺跡の北側に位置する水田であり、深江城崎遺跡と一連の宅地造成計画である。住宅部分は盛り土により遺跡破壊が免れる計画であったことから、永久構造物である道路部分のみが調査対象となり、調査面積は3,352㎡である。

深江地区は古砂丘と湿地帯が交互に織りなす複雑な地形で、谷部は、砂丘間にある湿地帯である。本遺跡は、深江城崎遺跡と同じく、調査区西側の砂丘と調査区東側の谷部で構成される。主な遺構としては、掘立柱建物8棟、土坑9基、溝状遺構4条を検出した。土器は弥生時代後期初頭～終末期まで含むが、主体は弥生時代後期前半である。

掘立柱建物をはじめとする集落は砂丘上にあり、谷部では、集落からの廃棄である土器の堆積が確認された。建物が立地する古砂丘は、軟弱地盤であり、礎板をもつ柱穴を確認しているが、調査区の都合上、全体が分かる建物は少ない。谷部に含まれている土器は、弥生時代後期前半～終末期であり、在地系土器を中心に楽浪系土器や石包丁や石鏝など生業に関する遺物が含まれている。

谷部包含層の下からは、木器が出土する土坑群を検出している。土坑を主体とする時期は弥生時代後期前半であり、同時期の掘立柱建物や区画溝も存在している。出土木製品は、短甲をはじめとして、横杓子、木器未成品や板材、端材が出土しており、木器生産の工房があったものと考えられる。

II. 基本層序

対象地の調査前は、水田である。調査区は、西側1/3が低砂丘、東側2/3が谷部となるが、前者は、現在の水田耕作土層（第①層）と水田床土（第②層）の直下の明褐色砂層（砂丘面）が遺構面である。この低砂丘上は、掘立柱建物や溝など弥生時代の集落が展開しているが、水田床土（第②層）による削平が著しく、柱穴でも比較的浅いものが多い。



第7図 土層柱状図(1/30)

一方、谷部では、水田床土（第②層）の直下に黒褐色砂質土層（第③層）の包含層が遺存しており、弥生時代後期前半～古墳時代初頭の土器を包含する。令和3年度に調査された深江城崎遺跡では、谷部の下層に洪水堆積層と植物遺存体を多く含む暗色帯を確認したが、今回の調査では、このような洪水堆積層が見られず、比較的落ち着いた環境下で形成された包含層と考えられる。

この包含層は、深江城崎遺跡から続くもので、深江遺跡群の南西から北東方向に砂丘が延びており、その集落縁辺の谷部に形成されている。当遺跡を含む深江遺跡群周辺は、古砂丘と湿地帯が、複雑に織りなす地形であるが、この旧地形の復元によって、深江遺跡群の集落範囲が想定できることを示しており、小規模調査でも精度の高い丁寧な調査が求められる。

III. 遺構と遺物

1. 谷部包含層

(1) 概要

本遺跡は、北東から南西方向に形成された古砂丘と谷部で構成される。谷部では、土器を包含する堆積が認められるが、その土器量は、古砂丘に近いほど多く、西側古砂丘上にある集落からの廃棄されていることを示唆し、深江城崎遺跡と同様の傾向である。

出土土器は、弥生時代後期初頭～終末期の土器が出土しているが、層位は間層を挟まないため、土器群を明確に分離することが難しく、時代を前後する土器が混じる。また、木器は出土しなかったものの楽浪系土器や石器が出土しており、西側古砂丘に展開する拠点集落の性格を知る上で、重要な遺物が出土している。

(2) 出土遺物

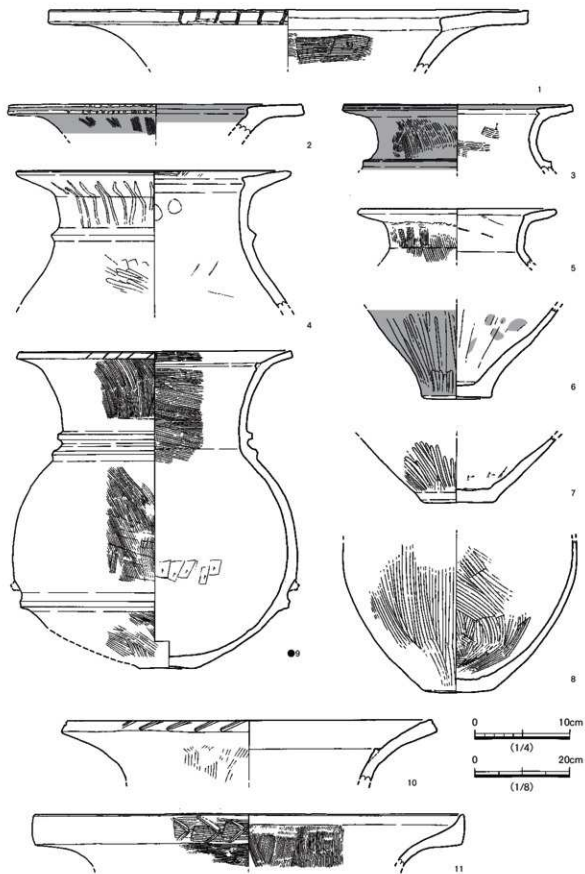
【土器】(第8図～第13図)

壺(1～25)

1は大型壺の口縁部片である。わずかに内傾する鋤先口縁の端部に刻み目を施す。外面はナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整である。弥生時代後期前半。2は鋤先口縁壺の口縁部片で、口縁端部に刻み目を施した後に中央部を強くナデる。頸部外面には暗文状のミガキを施し、内面はナデ調整を施す。内外面ともに丹塗りが施されている。弥生時代後期前半。3は鋤先口縁壺である。口縁部～頸部が残存している。外面は斜め方向の刷毛目調整の後に横ナデ、内面は横方向の刷毛目調整と板状工具痕が残る。また、内面には摩滅がみられる。外面に丹塗りを施す。4は鋤先口縁壺で、口縁部～胴上部が残存する。口縁部はわずかに内傾する。口縁部内面と頸部外面には暗文状のミガキを施す。胴部外面は横方向のヘラナデ調整の後、一部ミガキを施す。頸部には三角突帯が付く。報告書執筆後P-112出土壺(第96図73)と接合することが判明した。弥生時代後期前半。5は鋤先口縁壺である。口縁部～頸部が残存している。外面には縦方向の刷毛目を施し、口縁部外面はその後横ナデを施している。

6・7は壺の底部である。6は平底の底部を持ち、外面全体に丹塗りが施され、内面にも一部付着している。外面は縦方向のミガキを底部まで施し、内面は板ナデを施す。7の底部形態も平底である。外面には縦方向のミガキを施し、内面は板ナデ調整が施される。8も壺で、底部～胴下部まで残存している。外面は縦方向の粗い刷毛目、内面は不定方向の刷毛目が施されている。外面には黒斑が残る。

9は大型壺である。胴部最大径が下位に位置する。頸部と胴部下位にそれぞれ二条の台形状突帯がみられ、胴部の突帯は最大径よりも下位に位置している。口縁端部はナデ調整の後撫つきが施される。外面には頸部～底部にかけて縦方向の粗い刷毛目が施され、内面は口縁内部～頸部に横方向の刷毛目調整、胴下部内面は縦方向の板ナデ調整が施される。弥生時代終末期のものと考えられる。10・11は大型壺の口縁部片である。10の口縁部は内傾し、横ナデの後刻み目を施す。頸部外面は縦方向の粗い刷毛目調整の後横ナデ、内面は横ナデ調整を施す。弥生時代終末期。11は口縁端部に横方向の刷毛目を施した後、羽状文を施す。頸部外面は横方向の細かい刷毛目調整、内面は縦方向の細かい刷毛目調整が施される。



第8図 谷部包含層出土遺物実測図① (1/4、●は1/8)

12～19は袋状口縁壺である。12は胴下部～底部を欠損する。頸部と胴部に台形状の突帯を一条ずつ貼り付けている。外面は刷毛目調整を施すが、頸部～胴部上位は横方向の刷毛目調整の後にナデ調整を行っており、刷毛目は明瞭ではない。胴下部は縦方向の細かい刷毛目調整が施されている。頸部内面は板ナデ調整が施される。胴部の突帯より上位には丹塗りが施され、頸部内面にも一部付着している。弥生時代後期前半。13は頸部外面に縦方向のミガキ、肩部に横方向のミガキを施し、胴部に斜め方向の刷毛目調整を施す。底部付近は外側から穿孔されている。頸部内面にはしぼり痕が残り、胴部内面はナデ調整が施される。外面は口縁部～胴部上位に丹塗りが施され、頸部内面にも一部認められる。口縁部は打ち欠いている可能性がある。弥生時代後期前半。14は口縁部～頸部が残存する。外面は丹塗りが施され、内面にも付着する。頸部外面は縦方向の粗い刷毛目調整が施され、内面はナデ調整である。弥生時代後期前半。15は口縁部が残存する。外面は縦方向のナデ調整、内面は口縁屈曲部に横方向の刷毛目を施すほかはナデ調整である。弥生時代後期前半。16は口縁部～頸部が残存する。頸部外面には縦方向の細かい刷毛目調整、頸部内面には横方向の細かい刷毛目調整が施され、口縁内部には指頭圧痕が残る。内面・外面ともに丹塗りが施される。17も口縁部～頸部が残存する。頸部外面は縦方向の刷毛目、頸部内面は横方向の刷毛目が施されるほかはナデ調整である。外面全体に丹塗りが施され、口縁屈曲部の一部に黒斑が残る。18は口縁部が残存する。頸部外面には縦方向の粗い刷毛目調整の後、横ナデ調整を施す。内面は口縁部から頸部にかけて横方向の刷毛目調整が施される。19は口縁部が残存する。内外面ともにナデ調整を施す。

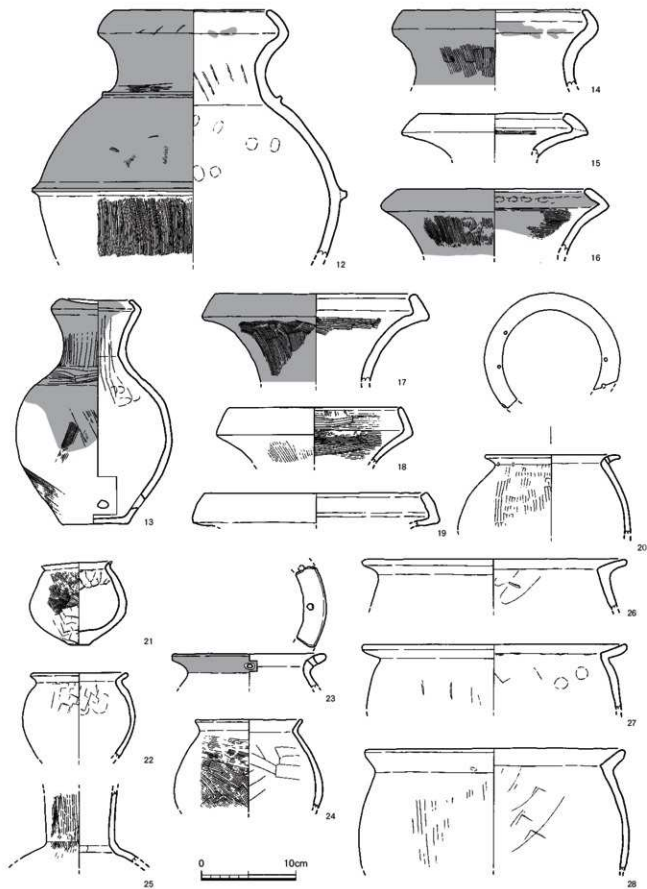
20は短頸壺である。胴部外面には縦方向の粗い刷毛目調整、内面にはナデ調整が施される。口縁部は4か所穿孔されている。21は小壺である。口縁部は短く外反する。胴部上位は外面に斜め方向の細かい刷毛目調整が施され、胴下部は板ナデが施される。内面はナデ調整が施され、底部内側に不定方向の工具痕が残る。頸部内面には粘土接合痕が認められる。22は短頸壺である。内面・外面ともに胴部上位に板ナデ調整を施す。23も短頸壺である。口縁部が残存する。外面に丹塗りを施す。口縁部に穿孔がみられる。内面・外面ともにナデ調整である。24は短頸壺である。外面は横方向の刷毛目を施し、一部に黒斑がみられる。内面は板ナデ調整が施される。

25は長頸壺である。頸部が残存する。外面には縦方向のミガキ、内面はナデ調整が施される。
甕 (26～48)

26～29は甕である。26・27は口縁部が残存する。26は外面・内面ともにナデ調整を施し、内面にはわずかに工具痕が残る。弥生時代後期前半。27は外面・内面ともに板ナデの後ナデ調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。弥生時代後期前半。28は口縁部～胴部が残存する。外面は縦方向の粗い刷毛目調整を施した後、ナデ調整を行っている。内面は板ナデを施す。弥生時代後期前半。29は口縁部が残存する。頸部外面に三角形の突帯が付く。外面は横ナデ調整、内面は板ナデ調整を施す。弥生時代後期前半。

30・31は金海式甕棺の口縁部片である。口縁上面に貼り付けられた粘土帯が平坦面を形成する。口縁端部の上下に刻み目を施した後、中央に横ナデ調整を施す。30の頸部は内外ともに横方向のミガキを施す。31は内外ともにナデ調整が施される。

32は底部を欠損する。外面全体にススが付着する。内面には板ナデ調整が施される。33は口縁部が残存する。外面には縦方形の刷毛目調整を施し、内面にはナデ調整が施される。34は底



第9图 谷部包含層出土遺物実測図② (1/4)

部を欠損する。外面は縦方向の粗い刷毛目調整を施し、頸部にはその後強い横方向のナデ調整を施す。内面はナデ調整で、一部粘土接合痕が残る。口縁部外面から胴部にススが薄く付着する。弥生時代後期前半。35も底部を欠く。外面は縦方向の細かい刷毛目調整が施され、全体にススが付着する。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。弥生時代後期前半。

36は口縁部～頸部が残存する。外面は縦方向の細かい刷毛目調整を施すが、一部横方向のものがみられる。口縁部内面は横方向の刷毛目調整の後にナデ調整を施し、胴部内面には棒状工具によるナデ調整を施す。外面には一部ススが付着する。弥生時代後期前半。37は底部を欠損する。外面には縦方向の粗い刷毛目調整が施され、全体にススが付着する。内面は横方向の板ナデ調整を施す。弥生時代後期前半。38は口縁部～胴部上位が残存する。外面には縦方向の細かい刷毛目調整を施す。口縁部内面は横方向の刷毛目調整の後にナデ調整、胴部内面は板ナデが施される。外面の一部にスス、内面の一部にコゲが付着する。弥生時代後期前半。39は底部を欠損する。外面は胴部上位に縦方向の細かい刷毛目調整を施すが、下部は風化により調整が不明である。内面はナデ調整が施される。弥生時代後期前半。40も底部を欠く。外面は縦方向の粗い刷毛目調整を施し、口縁部から全体にススが付着する。内面は口縁部に横方向の粗い刷毛目調整を施し、胴部は縦方向の刷毛目調整の後ナデ消している。弥生時代後期前半。

41は底部を欠く。胴部外面と口縁部内面に横方向のミガキを施す。外面全体は丹塗りが施されている。頸部に三角形の突帯が付く。42は口縁部～頸部が残存する。頸部には三角形の突帯が付く。外面と口縁部内面に斜め方向の刷毛目調整を施す。胴部内面はナデ調整が施される。口縁部内面には全体的にコゲが付着する。43は口縁部～胴部中位までが残存する。外面は斜め方向の刷毛目調整を施す。内面はナデ調整が施される。頸部には三角形の突帯が付き、外面全体にススが付着する。弥生時代後期前半。44は甕もしくは鉢である。外面には縦方向の刷毛目調整が施されるが、不明瞭である。内面は斜め方向の刷毛目調整の後ナデ消している。頸部には三角形の突帯が付く。

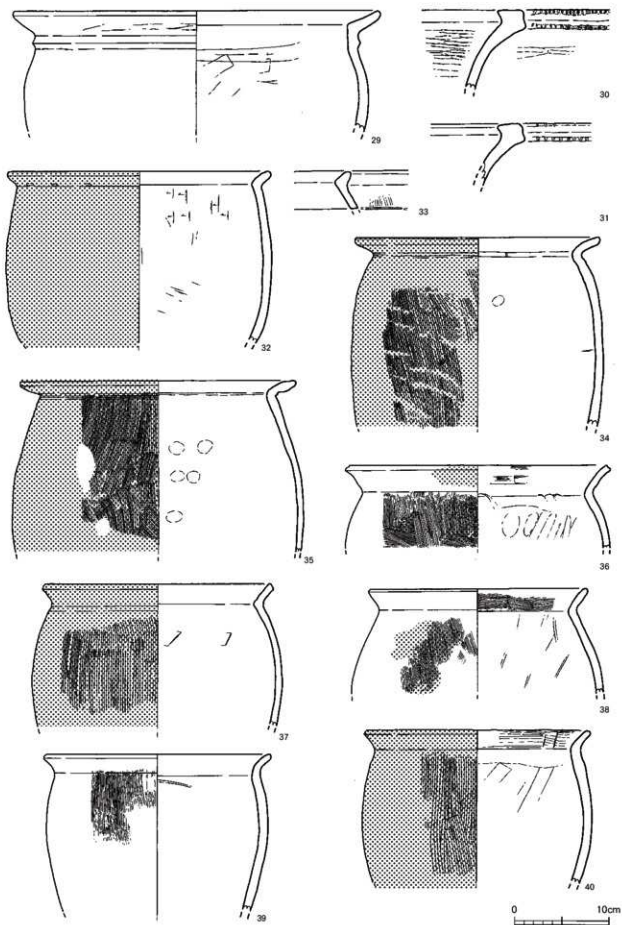
45は甕である。外面は縦方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面は横方向の刷毛目調整の後ナデ調整、胴部内面はナデ調整が施される。外面の一部にススが付着する。頸部を強くナデしており、稜線が入る。

46～48は甕の底部で、いずれも平底である。46は外面に縦方向の粗い刷毛目調整を施す。内面はナデ調整が施される。弥生時代後期前半。47は外面・内面ともにナデ調整が施され、板状工具の痕が残る。底面は穿孔されている。48は外面に縦方向の粗い刷毛目調整を施す。内面は板ナデ調整が施される。底面には板状工具痕や刷毛目が残り、内外から穿孔されている。

鉢 (49～61)

49～61は鉢である。49は口縁部が外反し、外面に粗い縦方向の刷毛目調整を施す。内面は板ナデ調整が施される。弥生時代後期前半。50は口縁部が直線的に立ち上がる。内面・外面ともにナデ調整が施され、底部外面に黒斑がみられる。

51は底部からわずかに内湾しながら立ち上がる。内面・外面ともに板ナデ調整を施す。52は内面・外面ともにナデ調整である。底部内面に指頭圧痕が残る。53・54は底部から直線的に立ち上がる。53は内面・外面ともに板ナデ調整を施す。54は外面に粗い縦方向の刷毛目調整を施す。内面はナデ調整で、棒状工具痕が残る。55は底部を欠く。外面に縦方向のミガキを施す。内面



第10图 谷部包含層出土遺物実測図③ (1/4)

はナデ調整の後、縦方向のミガキが施される。56は外面に斜め方向の刷毛目調整を施す。内面はナデ調整が施される。57は外面に不定方向の刷毛目調整を施す。内面はケズリが施される。58は底部からやや丸みを帯びて立ち上がる。外面は縦方向の粗い刷毛目調整を施し、内面はナデ調整が施される。内面には朱が付着している。59は底部が残存する。外面は縦方向の粗い刷毛目調整を施し、底部に黒斑がみられる。60は内面・外面ともにナデ調整である。胴部は丸みを帯びている。61は外面に横方向の刷毛目調整の後ナデ消している。内面は横方向の板ナデ調整を施す。底部に稜線が入る。

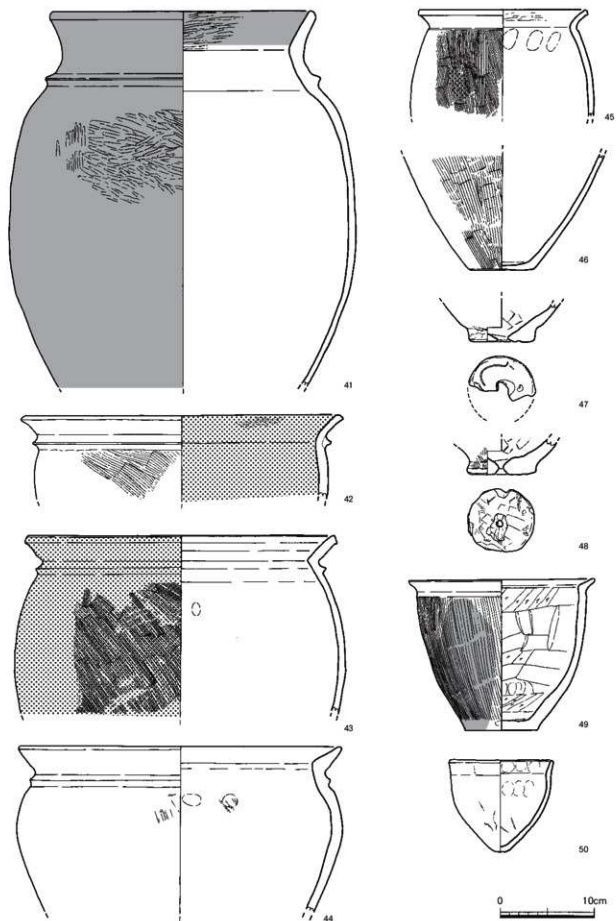
蓋 (62～64)

62～64は蓋である。62は短頸壺と組み合うものと考えられる。外側から内側に向けて穿孔されている。63は62と類似した形の蓋である。焼成前に穿孔している。64は頂部が強く凹む。内面・外面ともに縦方向の刷毛目調整を施す。

高坏 (65～79)

65～79は高坏である。65は上面が平坦な鋤先口縁である。外面は斜め方向の刷毛目調整を施し、内面にナデ調整を施す。全面に丹塗りが施されている。66も鋤先口縁である。わずかに口縁が立ち上がる。外面はナデ調整、内面には横方向のミガキが施される。全面丹塗りである。67は鋤先口縁であるが短く、内側に突出しない。外面は不定方向の粗い刷毛目調整を施し、内面はナデ調整である。内面に丹塗りが施される。

68は口縁部が外反する。外面には縦方向の粗い刷毛目調整を施す。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整を施し、胴部はナデ調整を施す。69は口縁部が直立し、先端が短く外反する。内面にはナデ調整を施し、外面と口縁部内面に黒斑がみられる。弥生時代後期中頃～後半。70は口縁部が直立し、口縁端部に平坦面を持つ。外面は縦方向の刷毛目調整の後に横方向の刷毛目調整を施し、内面はナデ調整が施される。弥生時代後期中頃。71は口縁部がわずかに外反し、口縁端部に平坦面を持つ。口縁部外面にはナデ調整を施し、坏部外面は斜め方向の刷毛目調整の後に横方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面は横方向のミガキ、坏部内面は縦方向のミガキを施す。弥生時代後期後半。72は口縁部がわずかに外反し、口縁端部に平坦面を持つ。内面には横方向のミガキを施す。弥生時代後期後半。73も口縁部がわずかに外反し、口縁端部に平坦面を持つ。外面はナデ調整を施し、口縁部内面は横方向のミガキ、坏部内面は縦方向のミガキを施す。弥生時代後期後半。74は口縁部が強く湾曲して外反する。坏部外面は縦方向のミガキを施す。口縁部内面は横方向のミガキの後に縦方向のミガキを施し、坏部内面は縦方向のミガキを施す。口縁部外面に丹が付着する。弥生時代終末期。75は口縁部がわずかに湾曲して外反する。口縁端部は丸みを帯びている。口縁部外面はナデ調整、坏部外面は斜め方向の刷毛目調整を施す。坏部内面には横方向の刷毛目調整を施す。76は口縁部がわずかに湾曲して外反し、口縁端部に平坦面を持つ。坏部外面に縦方向のミガキを施し、口縁部外面と内面にナデ調整を施す。坏部内面は縦方向の粗い刷毛目調整を施し、口縁部内面と坏部内面の境に粘土接合痕が残る。弥生時代終末期。77は口縁部が湾曲しながら外反し、口縁端部に平坦面を持つ。坏部外面は縦方向のミガキを施し、口縁部外面と内面にナデ調整を施す。坏部内面には斜め方向の刷毛目調整が施される。口縁部内面には黒斑がみられる。弥生時代終末期。78は高坏の脚部である。外面は端部にまで縦方向のミガキが施され、底部付近が穿孔される。内面にははしぼり痕が残る。79は高坏の脚部である。



第11圖 谷部包含層出土遺物実測圖④ (1/4)

短脚でゆがみがみられる。外面は縦方向の刷毛目調整の後ナデ消している。内面はナデ調整で工具痕が残る。

匙 (80)

80は匙である。取手の部分が残存する。刷毛目調整とナデ調整を施す。

器台・支脚 (81～92)

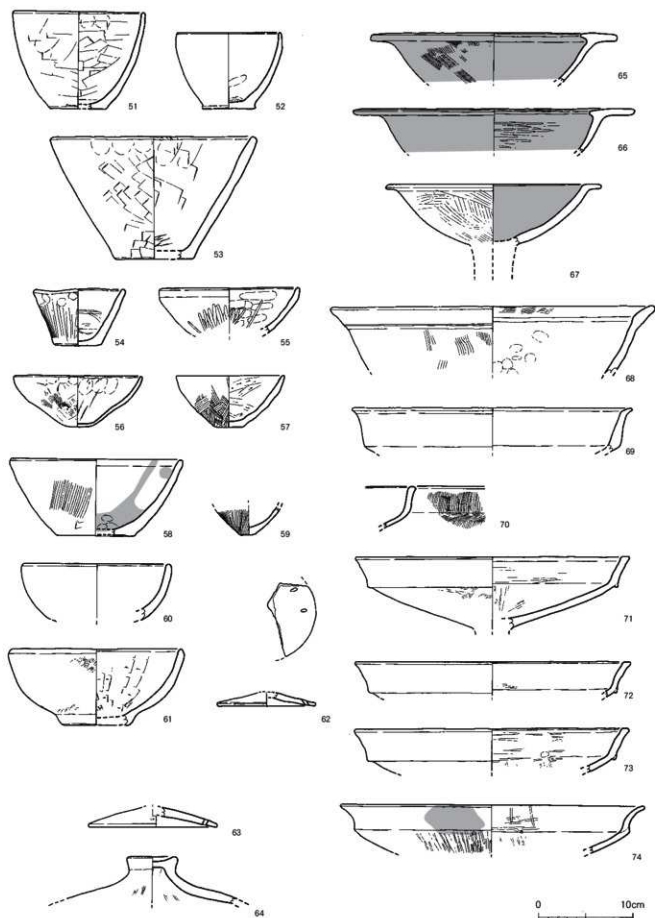
81は大型器台である。口縁部が残存する。口縁端部には横方向の刷毛目調整を施した後、羽状文を施す。口縁部外面は斜め方向の細かい刷毛目調整を施し、内面は縦方向の粗い刷毛目調整を施す。82は外面に縦方向の刷毛目調整の後、板ナデ調整を施す。内面は口縁部に横方向の刷毛目が施されるほか、口縁部以下にはしぼり痕が残る。83は小型器台である。器壁が非常に厚い。外面に板ナデ調整を施すほか、指頭圧痕が残る。内面にはしぼり痕が残る。84は底部を欠く。口縁端部は面取りをしている。外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。口縁部内面は斜め方向の粗い刷毛目調整を施し、口縁部以下にはしぼり痕が残る。底部にむかうにつれて器壁が厚くなる。

85は小型器台である。口縁部のゆがみが激しい。外面はナデ調整を施し、内面はしぼり痕が残る。86は胴部下半部を欠く。口縁部はわずかにゆがみ、口縁端部は面取りをしている。外面は細かい縦方向の粗い刷毛目調整を施す。内面は板ナデ調整を施し、一部にしぼり痕が残る。87は器壁が薄い。口縁端部は面取りをしている。外面は縦方向の刷毛目調整を施す。内面は口縁部と底部に横方向の刷毛目調整を施し、胴部は横方向の板ナデ調整を施す。口縁部内面の一部に黒斑がみられる。88・89は杓形器台である。88の外面は上部に横方向のタタキ、下部に縦方向の粗い刷毛目を施す。底部内面は横方向の刷毛目調整を施し、胴部内面はしぼり痕が残る。89は胴部外面に縦方向の刷毛目調整を施す。口縁部はナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。内面は板ナデ調整を施し、下部にしぼり痕が残る。

90～92は支脚である。90は外面にナデ調整を施し、全体に指頭圧痕がみられる。片側にのみ被熱痕がみられ、この面を内側に向けて使用したと考えられる。91は胴部下半から底部を欠く。外面は縦方向の刷毛目調整の後ナデ調整を施し、口縁部内面は強い横ナデ調整を施す。胴部内面にはしぼり痕が残る。92は胴部下半～底部が残存する。器壁が非常に厚く、底面は平坦である。内面・外面ともにナデ調整を施し、底部外面には指頭圧痕が残る。

手づくね土器 (93～102)

93は底部がレンズ型の手づくね土器である。口縁部内外と底面は板ナデ調整を施す。底部内面はヘラケズリを施す。94は平底で、口縁部を指で押さえて波うつように成形している。外面は不定方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面にわずかに刷毛目がみられ、胴部内面には板ナデ調整が施される。内面は全体が黒色化しているが外面に被熱痕はみられず、黒色化の原因は不明である。95は底部がレンズ型である。器壁は非常に厚い。内面・外面ともにナデ調整が施されており、指頭圧痕が残る。96は底部のみ残る。外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。内面には不定方向の刷毛目調整が施される。底部はわずかに内湾しながら立ち上がる。97は平底である。器壁の凹凸が激しい。外面は板ナデを施し、工具痕がはっきりと残る。内面はナデ調整を施し、全面に指頭圧痕が残る。98も平底である。口縁部のゆがみが大きい。外面は横方向の刷毛目調整とナデ調整を施し、底部外面を強く指で押さえている。内面はナデ調整を施す。99は尖底の



第12図 谷部包含層出土遺物実測図⑤ (1/4)

手づくね土器である。外面は縦方向の刷毛目調整を施し、内面にはしぼり痕と指頭圧痕が残る。100はレンズ型の底部を持つ。内面・外面ともにナデ調整を施す。101は平底である。内面・外面ともにナデ調整を施す。102は口縁部を指で押さえて波状の口縁を作り出している。内面・外面ともにナデ調整を施す。

須恵器 (103)

103は坏身である。口縁部と受け部の形態から6世紀前半のものと思われる。

内面丹塗土器 (104)

104は壺の底部で、内面丹塗りである。外面には粗い縦方向の刷毛目調整を施す。

楽浪系土器 (105・106)

105は鉢の底部である。胎土は泥質で底面には縄蓆文が残る。106は鉢の底部である。風化が著しく、断面が摩耗している。

【石器】(第14・15図)

石包丁・石包丁未成品 (107~110)

107は立岩系石包丁である。従前は小豆色の所謂立岩産石包丁の石材は、輝緑凝灰岩とされていたが、立岩系石包丁の生産・流通についてまとめられた森貴教氏は、赤紫色泥岩としている(森2018)。平面形態は曲線直刃に当たり、全長9.52cm、幅4.21cm、厚さ0.64cm、重さ37.37gで、刃部は使用により、下端中央部が刃こぼれとすり減りにより凹む。108は蛇紋岩製とみられる石材の石包丁で、半分が折損する。平面形態は外湾刃半月形で、長さ4.5cm、残存幅5.91cm、厚さ0.58cm、重さ19.69gで、刃部の一部が刃こぼれにより凹む。109は片岩製の石包丁未成品で、半分が折損する。下部には二次加工が施され、表裏両面に節理面が残る。長さ5.07cm、残存幅7.56cm、厚さ0.59cm、重さ45.75gを測る。110は立岩系石包丁の未成品である。裏面の自然面から水磨が進む河原石の転石素材を用いていることがわかる。上下両端縁辺部が二次加工されたあと左側面が折損しており、素材剥片の状態で遺跡内に持ち込まれ、粗割途中で廃棄されたと推測できる。長さ6.90cm、残存幅8.86cm、厚さ1.74cm、重さ116.03gを測る。

剥片 (111)

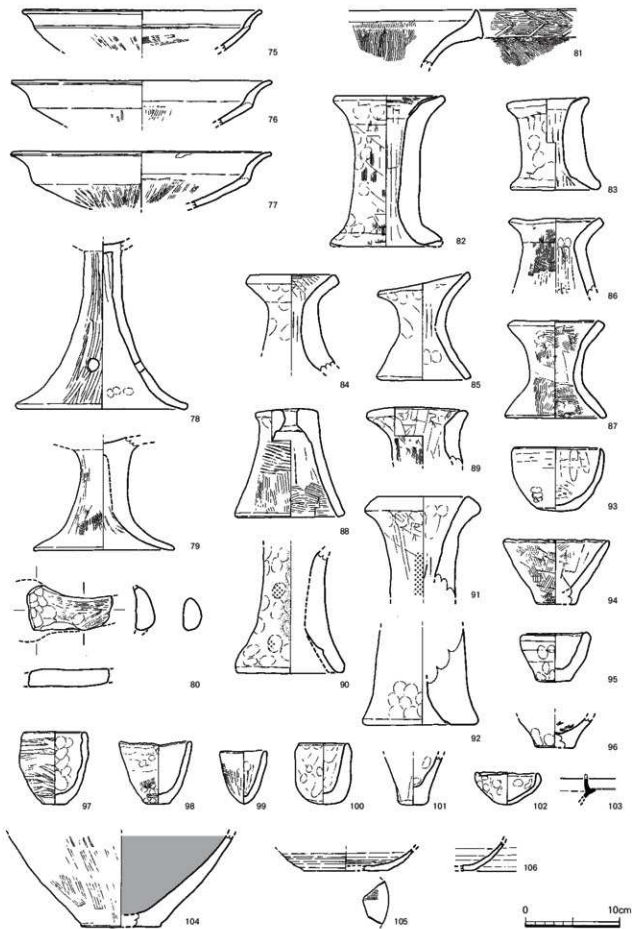
111は片岩製の剥片で、表裏両面が主要剥離面のいわゆるボジボジ剥片に該当する。石材と形状から石包丁の素材剥片作出時に、全長になる幅部分がやや短く剥離されたため、廃棄されたものと考えられる。長さ6.91cm、幅9.14cm、厚さ1.40cm、重さ100.69gを測る。

紡錘車・紡錘車未成品 (112・113)

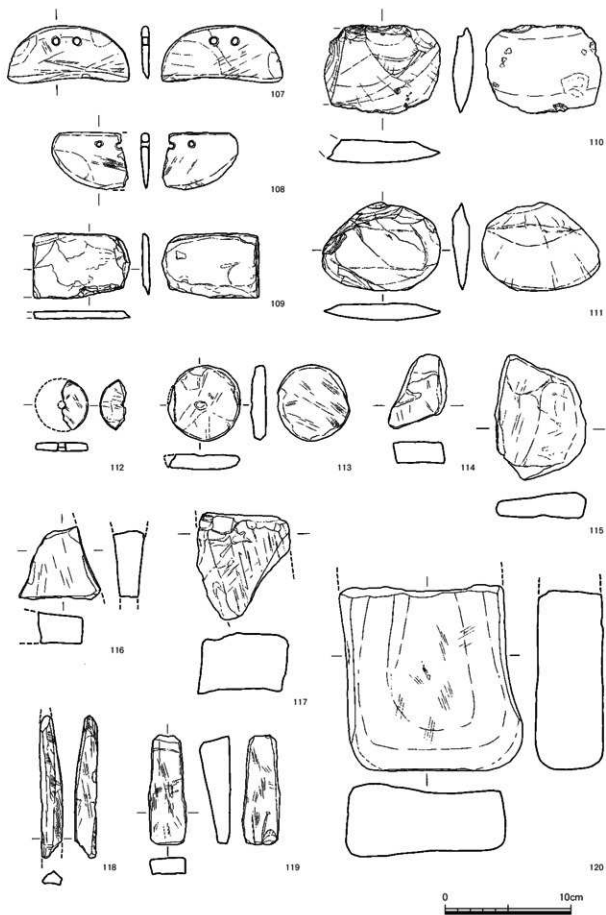
112は滑石製の紡錘車である。表裏両面は研磨により平滑し、側面は横研磨を施す。残存状況から穿孔時もしくは使用時に欠損していると推測される。復元直径は4.1cm、厚さ0.67cm、重さ7.09gを測り、II a類(平尾2008)である。113は紡錘車未成品である。滑石製とみられるが、緑色で片理構造が確認できることから緑色片岩製の可能性もある。表裏両面と側面は粗い研磨によりやや平滑にされる。表面の中央部に敲打による穿孔途中の痕跡が残り、左側面は欠損する。II c類(平尾2008)で直径は5.60~5.88cmとやや楕円状を呈し、厚さ1.18cm、重さ63.13gを測る。

砥石 (114~120)

114は砂岩製の砥石である。砥面は表面1面で裏面は自然面を残す。115は砂岩製の砥石である。砥面は表面1面でやや扁平の形状を呈するが、表面以外は欠損している。116は砂岩製の砥



第13圖 谷部包含層出土遺物実測圖⑥ (1/4)

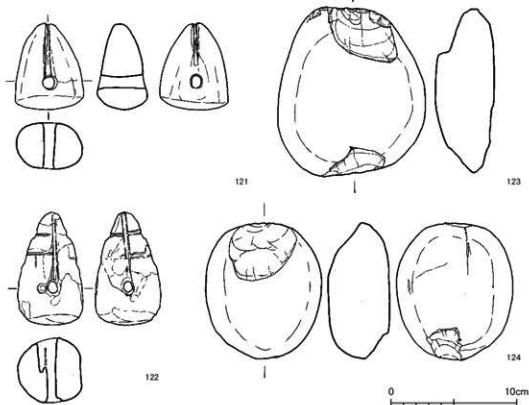


第14圖 谷部包含層出土遺物実測圖⑦(1/3)

石で、砥面は表・裏・右側面の3面である。上・下・左側面が欠損しているが本来は平面形状が撥状をなす仕上げ砥石と考えられる。117は砂岩製の砥石である。砥面は表・左側面の2面で、下側面が欠損する。118は泥岩製の砥石で、平面形状は棒状を呈する。上下両端が欠損する。残存長11.25cm、幅1.16cm、厚さ1.05cm、重さ27.29gを測る。119は泥岩製の砥石である。砥面は表・裏・左側面の3面で、仕上げ砥石と考えられる。長さ8.55cm、幅2.85cm、厚さ2.40cm、重さ91.97gを測る。120は硬質砂岩製の砥石である。砥面は表・裏・左・右側面の4面で、左・右側面は磨滅が著しく仕上げ面と考えられる。上部が欠損しているが、長さ14.6cm、幅14.4cm、厚さ5.73cm、重さ2,169.78gを測る。

石錘 (121~124)

121は砂岩製の九州型石錘である。下部はやや丸みをもたせるように仕上げられ、表・裏面の穿孔部周辺は平坦面である特徴で、博多湾型の大形A I型（下條1984）、I A類（大庭2023）と考える。縄擦れ痕が認められ、下部周辺が被熱によりヒビが入る。長さ6.71cm、幅5.52cm、厚さ3.93cm、重さ147.16gを測る。122は砂岩製とみられる石材の九州型石錘である。先端部がやや尖り、間延びした釣鐘状の形状で下部は丸みがあるため、博多湾型の大形A I型（下條1984）、I A類（大庭2023）と考える。穿孔部は一度穿孔を途中までしたあと、ずらして穿孔し直しており表面には穿孔部が2つ重なる。全体が使用により磨滅と欠損が著しく、縄擦れ痕も認められる。上半の短軸方向に2条の溝が、長軸方向には1条の溝がそれぞれ残る。長さ8.83cm、幅5.14cm、厚さ5.05cm、重さ215.54gを測る。123は花崗岩製の打欠石錘で、楕円状でやや扁平な河原石素材である。表・裏両面の両端が打欠され、縦断面が凸レンズに近い形状に整形している。両端の縁辺部はやや潰れ、縄擦れ痕は確認できない。長さ13.25cm、幅11.60cm、厚さ4.58cm、重さ1,007.91gを



第15図 谷部包含層出土遺物実測図⑧ (1/3)

測る。124は花崗岩製の打欠石錘で、123と同様に、河原石の長軸方向の両端に打欠があり、縁辺が使用により潰れるものの、表面が上部に裏面が下部に打欠による剥離痕が互い違いある状態である。縄擦れ痕跡は認められない。長さ10.60cm、幅9.04cm、厚さ4.81cm、重さ677.40gを測る。

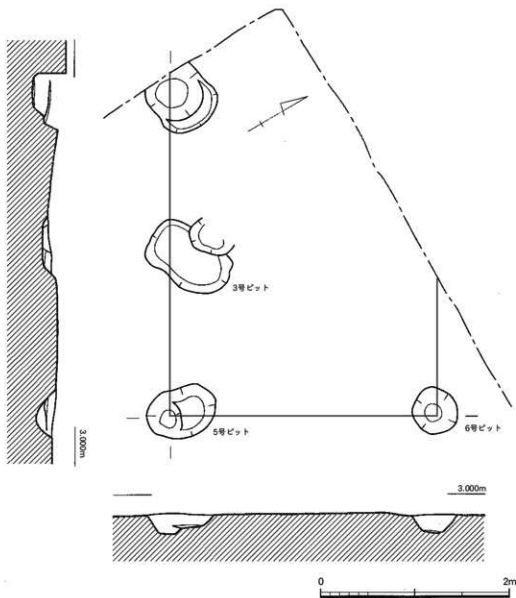
2. 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

本調査で検出された掘立柱建物は8軒確認されているが、道路部分のみの狭い調査区の影響で、全体を確認した掘立柱建物は少ない。このため、未調査部分が調査された際には、改めて検証する必要がある。

1号掘立柱建物（第16図）

1号掘立柱建物は調査区北西端に位置する $1 \times 2 + \alpha$ 間の建物で、調査区外に続く可能性がある。現状で桁行き $3.64 + \alpha$ m、梁行き 2.78 mを測る。主軸方向 $N-60^{\circ}-W$ で、遺物はP-5、6から出土しており、弥生時代後期に属する。



第16図 1号掘立柱建物平断面実測図(1/40)

出土遺物（第17図）

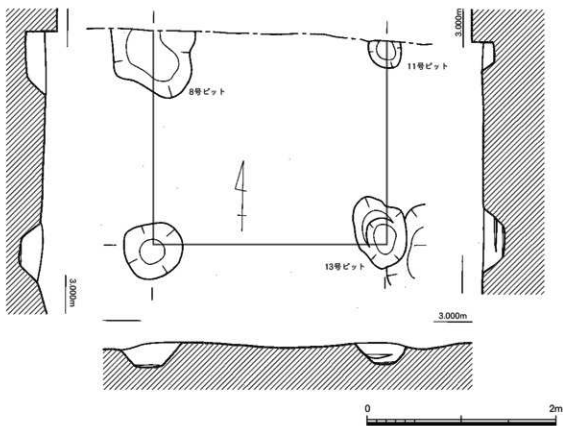
1はP-5から出土した器台片で、脚裾に向かう胴部片である。外面は粗い刷毛目調整、内面は風化により器面が剥離しており、調整は不明である。2はP-6から出土した甕の胴部片で、外面は刷毛目調整。



第17図 1号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)

2号掘立柱建物（第18図）

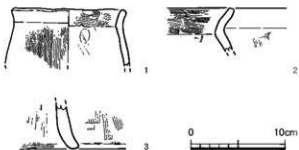
2号掘立柱建物は調査区北側に位置する1×1+α間の建物で、調査区外に続く可能性がある。現状で桁行き2.26+αm、梁行き2.48mを測る。主軸方向S-1°-Wで、遺物はP-8、13から出土しており、弥生時代後期に属する。



第18図 2号掘立柱建物平面実測図(1/40)

出土遺物（第19図）

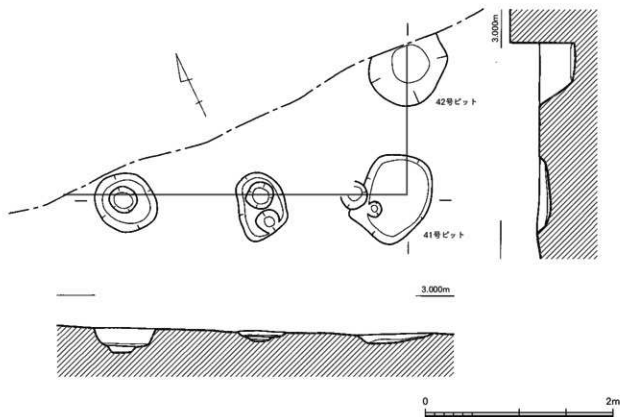
1はP-8から出土した小形甕で、胴外面および口縁内面は粗い刷毛目調整を施す。2もP-8から出土。くの字状口縁をもつ甕で、口縁内面は、横方向の刷毛目調整である。3はP-13から出土した器台の脚裾片で、外面調整は縦方向の粗い刷毛目調整である。土器は、細片が多いもの弥生時代後期に属する。



第19図 2号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)

3号掘立柱建物（第20図）

3号掘立柱建物は、調査区北側に位置し、建物自体は調査区外へと続いており、全容は明らかではない。確認できる $1 \times 2 + \alpha$ 間で、現状で桁行き $3.74 + \alpha$ m、梁行き $1.64 + \alpha$ mを測る。主軸方向 $N-63^\circ-W$ である。遺物はP-41、42から出土している。



第20図 3号掘立柱建物平面実測図(1/40)

出土遺物（第21図）

1はP-41から出土した小形壺の底部片。内外面共にナデ調整。2はP-42から出土で、袋状口縁壺の頸部片か。胴外面および口縁内面は粗い刷毛目調整を施す。外面は、縦方向の刷毛目調整。内面は指ナデである。出土土器は細片であるものの、弥生時代中期末の可能性が高い。

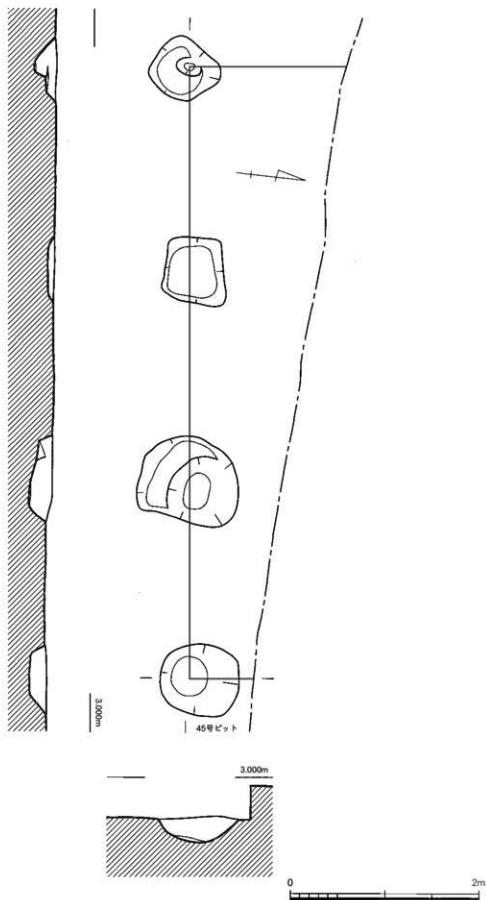


4号掘立柱建物（第22図）

4号掘立柱建物は、調査区北側中央に位置し、現状では 1×3 間まで確認でき、調査区外へと続く。建物法量は、桁行きで $6.45 + \alpha$ mを測り、主軸方向 $S-84^\circ-W$ である。後世の削平により、西側に向かって柱穴が浅くなっており、残存状況は良い方ではない。柱穴の出土遺物はなく、時期は不明である。



第21図 3号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)



第22図 4号掘立柱建物平面実測図(1/40)

5号掘立柱建物（第23図）

5号掘立柱建物は、調査区北側で検出された掘立柱建物で、1号溝と切りあい関係にある。1×3間の掘立柱建物で、桁行き4.08m、梁行き1.94mを測る。主軸方向S-86°-Wである。

調査所見では、5号掘立柱建物は、1号溝に切られており、北側の2つの柱穴は、消滅しているほか、南側柱穴は削平されながらも柱が残存している。土器はP-46及びP-49から出土し、P-46は弥生時代後期末～終末、P-49は弥生時代中期後半である。1号溝の時期を考慮すると、P-49出土土器が示す弥生時代中期後半が掘立柱建物の時期であり、P-46出土土器は、遺構面の上層にあたる谷部包含層からの流れ込みと判断した。全体の分かる数少ない掘立柱建物。

出土遺物（第24図）

1はP-46から出土した短頸壺の胴部片である。底部は丸底に近いレンズ底で、下位に最大径がある。胴部に刷毛目調整がわずか残るが、全体として風化により調整が不明瞭である。弥生時代後期末～終末の範疇と考えられる。2は甕の底部片で、平底を呈する。外面は細かな刷毛目調整が見られ、弥生時代中期後半である。

6号掘立柱建物（第25図）

調査区北側で検出された掘立柱建物で、5号掘立柱建物の東側に位置する。現状では1×1間を確認しているが、調査区南側へと続く可能性がある。P-74、75の柱穴は、現代の排水溝によって破壊を受けているが、P-75では、直径22.5cmの柱が運よく残存している。建物法量は、桁行き1.90+αm、梁行き2.52mを測り、主軸方向N-2°-Wである。時期は弥生時代後期前半～後半の範疇と考えておきたい。

出土遺物（第26図）

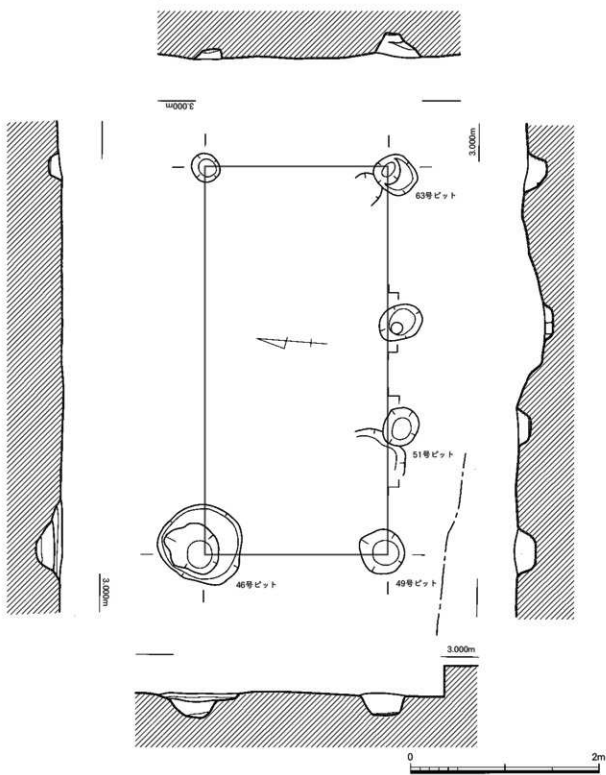
1はP-68から出土した甕の底部片で、平底を呈する。外面は、縦方向の刷毛目調整を施す。2はP-74から出土した壺の胴部片で、三角突帯を1条巡らす。外面の刷毛目調整が明瞭である。3～5はP-75からの出土。3は鉢形土器で、底部を欠損する。口縁端部をへらで平坦にしている。不明瞭ではあるが、外面は縦方向の粗い刷毛目調整がわずかに残る。4は甕の底部片で、平底である。胴部への立ち上がり膨らみ形状であり、外面の粗い刷毛目調整から弥生時代後期前半である。5は甕の底部片で残りが悪い。レンズ底であり、弥生時代後期中頃～後半である。

7号掘立柱建物（第27図）

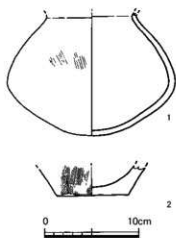
調査区北側に位置し、2号溝と切りあい関係にある1×1間の掘立柱建物である。建物法量は、桁行き2.72m、梁行き2.02mを測り、主軸方向S-37°-Wである。この建物は、木器が出土する1号土坑に隣接しており、谷際に立地している。柱穴の掘方が大きく、北東角の柱穴（P-85）が2号溝を切り込む。P-83、85、89、90から土器が出土している。弥生時代後期前半。

出土遺物（第28図）

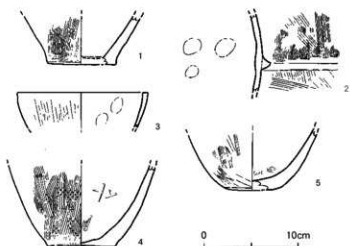
1はP-83から出土した小形甕で、傾斜する逆L字口縁で、外面は、縦方向の刷毛目調整を施す。2はP-85から出土した鉢形土器の底部片で、平底の底部から膨らみ気味に立ち上がる。3は高坏の脚部で、脚裾から弥生時代後期前半に属する。P-85からの出土。4はP-89から出土し、高坏の口縁部片で、逆L字口縁で3と同時期と考えられる。5はP-90から出土した壺の底部片で、平底



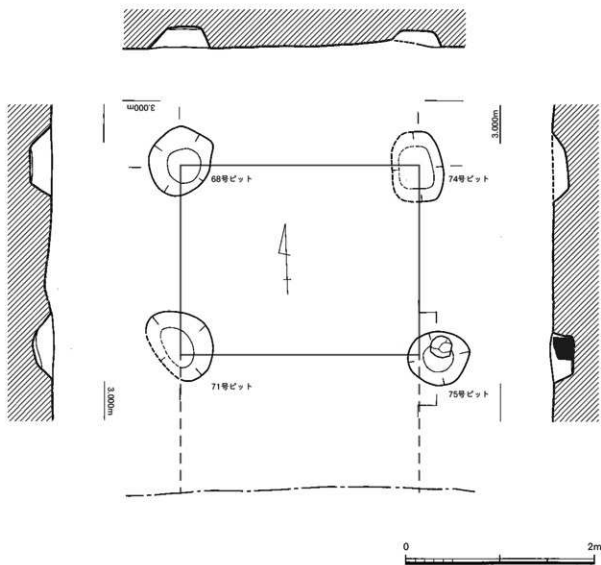
第23図 5号掘立柱建物平面実測図(1/40)



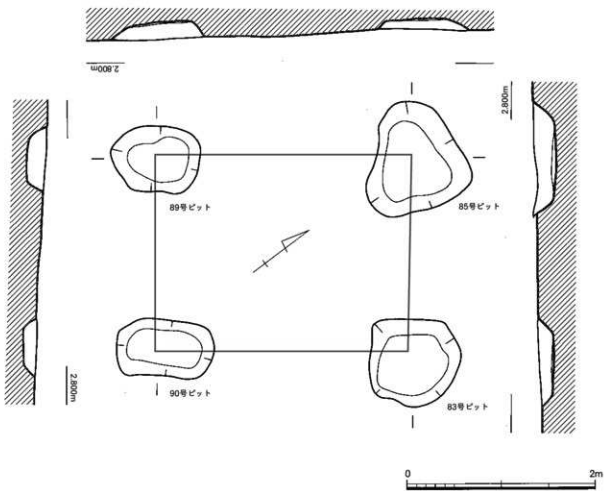
第24図 5号掘立柱建物
出土遺物実測図(1/4)



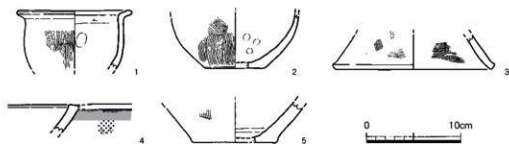
第26図 6号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)



第25図 6号掘立柱建物平断面実測図(1/40)



第27図 7号掘立柱建物平断面実測図(1/40)



第28図 7号掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)

を呈する。

8号掘立柱建物（第29図）

調査区南側の砂丘上に位置する1×1間の掘立柱建物である。建物法量は、桁行き2.44m、梁行き2.34mを測り、主軸方向N-10°-W。P-158、161、165に礎板が、P-166には柱が残存する。P-158、161に比べて、P-165は、複数の材を用いて、高さ調整している。弥生時代後期前半。

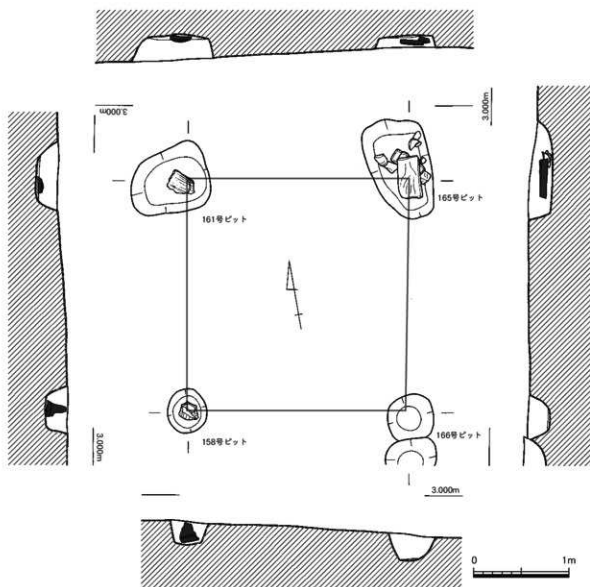
出土遺物

【土器】（第30図）

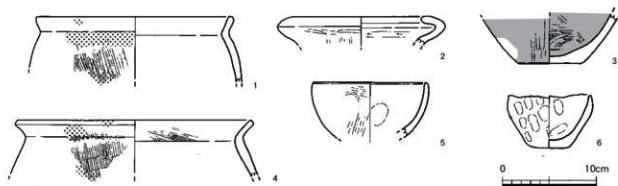
1はP-161から出土。くの字状口縁甕。2～6はP-165からの出土。2は複合口縁壺の口縁部片で、丹塗りではない。全体的に風化により、調整不明瞭ながら、外面の横方向のミガキ調整がわずかに残る。3は鉢の底部片で、内外面共に丹塗り。内外面共にミガキ調整。4は、くの字状口縁甕の口縁部片で、外面にススが附着する。外面および口縁内面は、刷毛目調整である。5は鉢形土器で、底部を欠損する。外面は刷毛目の後ナデ調整、内面はナデ調整である。6は手づくね土器で、鉢形である。強いナデによって成形する。

【木器】（第31、32図）

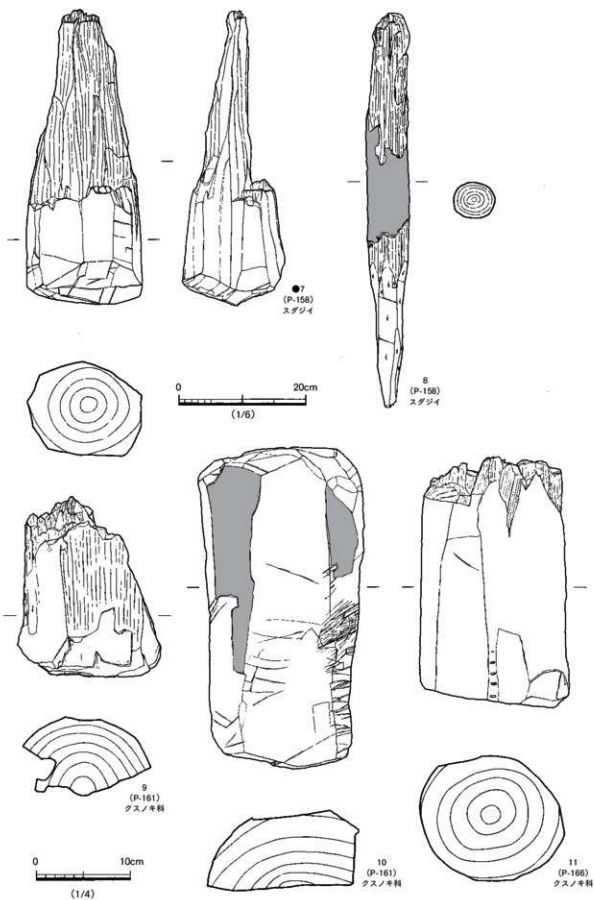
7はP-158から出土した柱で、上方は木が痩せているが、下部は残りがよく、断面八角形に削っている。樹種はスダジイで、長さ46.9cm、直径18.3cmを測る。8は杭で、P-158から出土した。樹枝の先端を削って杭状にしており、長さ41.2cm、直径4.4cmを測る。樹種はスダジイである。9はP-161から出土した半裁材で、上面は樹皮を残し、下面は割れ、下小口面は調整痕、上小口は風化による折れである。樹種はクスノキで、長さ18.6cm、幅15.0cm、厚さ8.0cmを測る。10もP-161から出土した礎板で、上面は頂部を平坦加工し、下面および右側面は割裂面を残す。上面の一部に樹皮を残し、最低限の加工である。樹種はクスノキで、長さ33.8cm、幅17.1cm、厚さ8.0cmを測る。11はP-166から出土した柱で、外皮を残しつつ、最低限のケズリを施す。樹種はクスノキで、長さ25.8cm、幅15.2cm、厚さ15.2cmを測る。12は芯持材を利用して製作された礎板で、一部に樹皮を残す。法量は長さ37.5cm、幅18.7cm、厚さ11.6cmを測る。上小口面は施溝分割、下小口面は平坦調整である。下面は平滑加工、上面も同様であるが、切痕が両端に見られる。P-165から出土。13は板目取りの角材で、上面は平滑に加工し、下面は割裂面を残す。下小口面が調整加工、上小口面が施溝切断である。法量は長さ28.3cm、幅9.4cm、厚さ5.9cmを測る。P-165からの出土。14はP-165から出土した板材で、上面は風化による腐食が激しく、下面は鉄製工具による平滑加工を施す。法量は長さ43.2cm、幅21.2cm、厚さ2.4cmを測る。



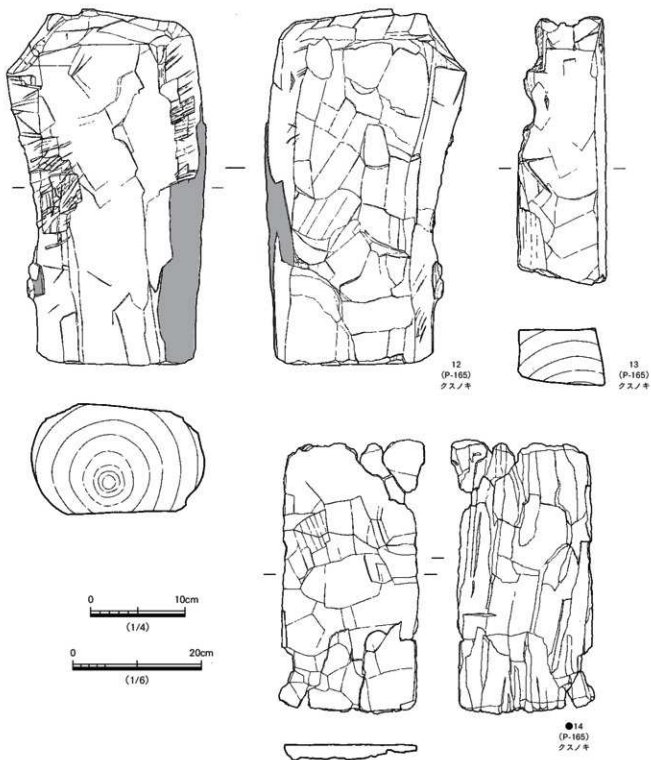
第29図 8号掘立柱建物平断面実測図(1/40)



第30図 8号掘立柱建物出土遺物実測図①(1/4)



第31図 8号掘立柱建物出土遺物実測図② (1/4、●は1/6)



第32図 8号掘立柱建物出土遺物実測図③(1/4、●は1/6)

(2) 溝 (第33図)

調査区北側で検出した平面L字状の溝であるが、谷の落ち際に沿って掘削されている。溝のうち、南北方向の溝を1号溝、東西方向の溝を2号溝とし、両溝の近接が予測される地点については、拡張調査を実施した。その結果、1号溝と2号溝は接合せず、南東角が陸橋状となることが判明した。

一方、2号溝は延長部分を探るために、西側に調査区を拡張し調査を実施した。2号溝は2mほど延長したところで途切れ、2.2mの陸橋状の空間を挟んで、3号溝を検出した。3号溝の延長を探るためにAトレンチを設定し調査したが、3号溝の延長らしき溝状遺構は確認できなかった。3号溝は、1、2号溝と時期が異なるため、単なる土坑となる可能性がある。以上の調査成果から、溝は古砂丘のヘリに沿って、南西側へと曲り、さらに続く可能性が高いが、南側調査区では、この続きの溝を確認できなかったため、この溝の全体的なラインは、後の課題として残す結果となった。

1号溝、2号溝共に、掘削時期は弥生時代中期末、最終埋没は、弥生時代後期前半と考えられる。1号溝に切られる5号掘立柱建物が、弥生時代中期後半、2号溝を切る7号掘立柱建物が弥生時代後期前半であるから、時期的な矛盾はないものとする。

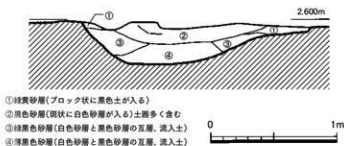
古砂丘のヘリに沿って、1号溝で長さ7.95m、2号溝で長さ6.5mまで検出し、1-2号溝間（南東側）の陸橋部を含めると、長さ22.95mの溝となる。溝の内側では、3号～5号の掘立柱建物のほか、建物として認識できなかった柱穴群があり、集落域を区画する溝である可能性が高い。1号溝は北側の調査区外へと続いているため、今後の調査に期待するところであるが、二文中学校校内遺跡で検出されている大溝は、弥生時代後期後半～終末期であり、現段階では、これとは接続しない別溝と考えておきたい。



第33図 1、2号溝平面図(1/250)

1号溝 (第34～36図)

調査区北側で検出された溝で、長さ約7.9m、幅約1.95m、深さ約0.33m、調査区北側に向かって続く直線的な溝である。5号掘立柱建物と切りあい関係にあり、1号溝が5号掘立柱建物を切っている。溝の断面は、緩やかな逆台形を呈し、溝底の標高は北端2,581m、南端は2,339mで、北に低く傾斜する。

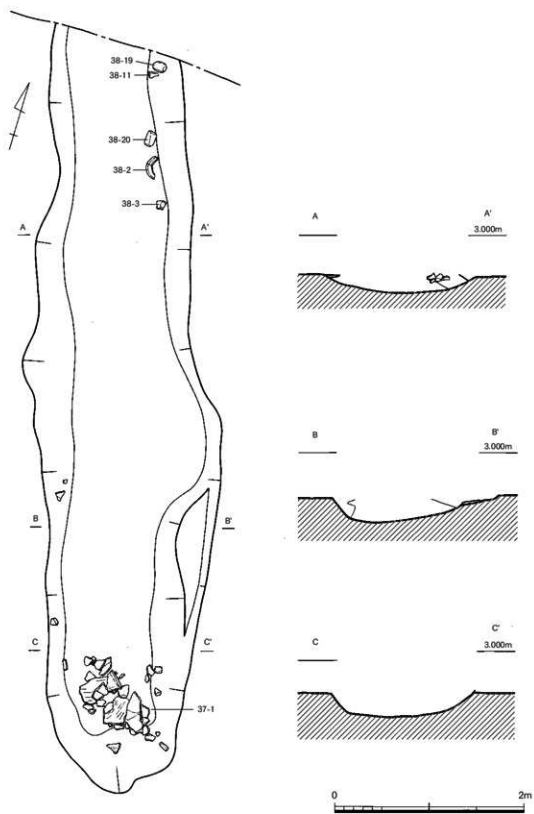


第34図 1号溝東西土層断面実測図(1/30)

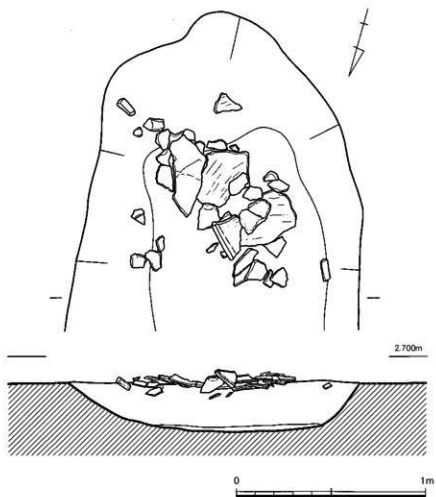
土層観察では、すべて砂層であるが、第3、4層が洪水砂層、第2層が落ち着いた薄黒色砂層で、出土遺物は第2層を中心に土器や石器が出土し、下層ほど遺物が少ない。土器は弥生時代中期末～後期前半に属し、石器は敲石や砥石が出土した。1号溝の南端上層で検出した甕棺の破片がまとまって出土したが、金海式甕棺であり、1号溝の埋没時期と不整合である。おそらく、弥生時代後期前半段階の集落形成時に破壊した金海式甕棺の破片を溝に廃棄したものと考えられる。

出土遺物 (第37～38図)

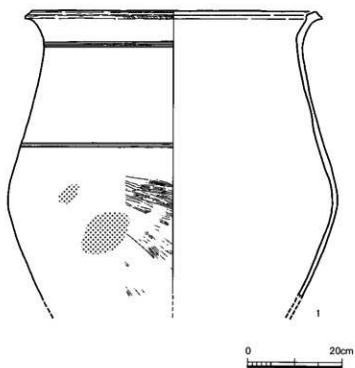
1は金海式甕棺で、底部を欠損する。肥厚した口縁をもち、その端部に刻み目を施し、頸部と胴部の境に2重の沈線を入れている。胴部に斜方向のミガキ調整を施し、胴中位に焼成時の黒斑が残る。大形であるが、器厚は薄く、丁寧に作られた印象である。2は鋤先口縁蓋の口縁部片で、外に向かって傾斜する。口縁上面～外面まで丹塗り磨研であるが、ミガキではなくナデで済ませている。外面頸部に5本1セットで縦暗文を施す。3は壺の底部片で、外面は横ミガキ調整である。4は口縁が複合化した袋状口縁蓋で、外面及び頸部内面上位まで丹塗り磨研である。ミガキ調整は外面と内面口縁下に施す。5は外面丹塗りの壺の胴部片で、外面は縦ミガキを施す。6は壺の底部片で、外面は縦方向の刷毛目調整、内面は板ナデ調整。7は甕の底部片で、平底。8はやや内傾する鋤先口縁をもつ甕で、口縁部のみの残存。9も口縁が内傾する甕の口縁部片で、口縁下に1条の突帯を巡らす。外面は縦方向の刷毛目調整である。10は内傾が強い鋤先口縁の甕で、胴上位の残存である。内外面共に粗い刷毛目調整が残る。11は逆L字状口縁の甕で、胴上位の一部のみ残存。外面調整は粗い刷毛目を施す。12は鋤先口縁が上方に立ち上がる甕で、弥生時代中期末～後期初頭。13は、くの字口縁をもつ甕で、外面は粗い縦方向の刷毛目を施す。14は甕の底部片で、平底を呈する。15は小さな鋤先口縁が上方に傾く甕で、底部を欠損する。外面は刷毛目調整、内面は板ナデである。16は素口縁の鉢で、底部を欠損する。17は鉢形土器の底部片。18は高坏の脚部で、脚部上部の充填部分を欠損する。外面は刷毛目調整が明瞭に残る。また、坏部の下位、脚部に近いところで円形の痕跡があり、当初の脚部接続痕が残っている。19は花崗岩製の敲石で、上端が敲打による凹む。ただ下端の断面が三角形に剥離しているため、石錘に転用された可能性がある。長さ14.2cm、幅10.6cm、厚さ5.6cm、重さ1,265.81gを測る。20は花崗岩製の砥石とみられる。砥面は表・裏・左側面の計3面でいずれも使用頻度は低く、一部ススが薄く付着する。長さ16.15cm、幅8.3cm、厚さ7.1cm、重さ1,766.05gを測る。



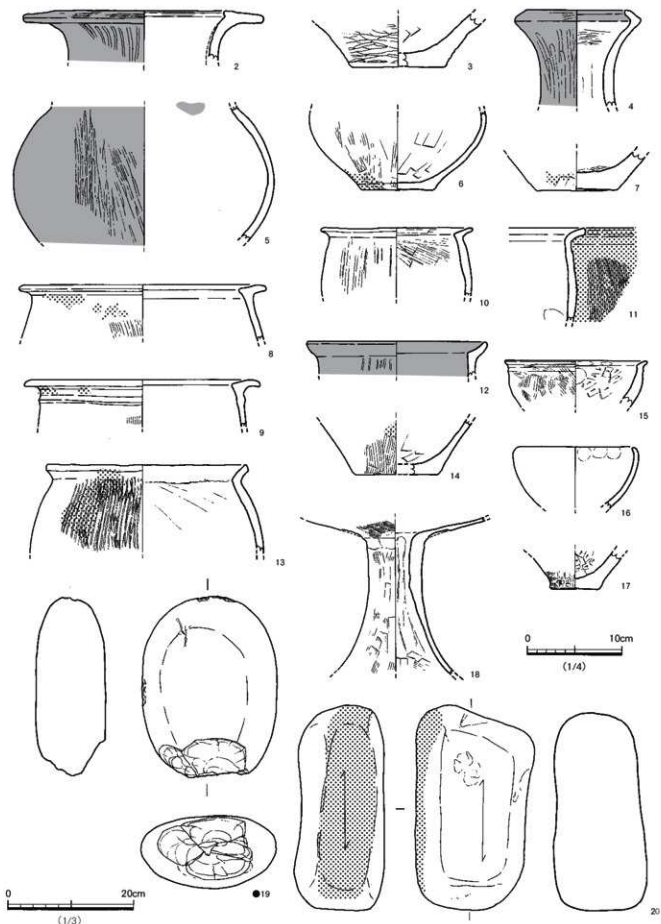
第35图 1号沟断面实测图(1/40)



第36图 1号沟内甕棺出土状况平面图(1/20)



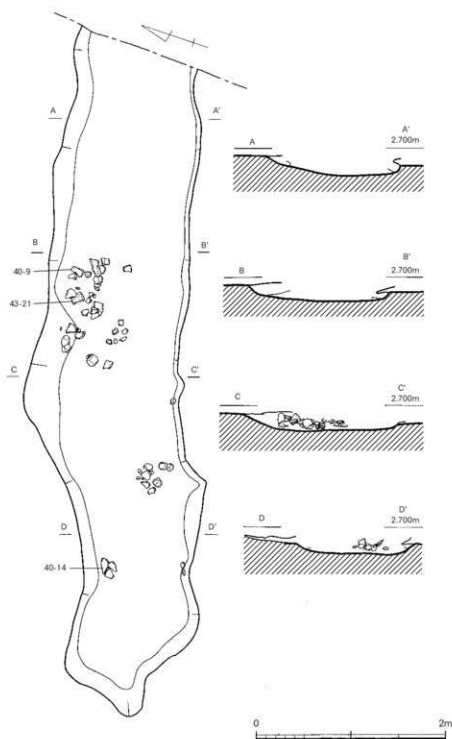
第37图 1号沟出土甕棺实测图(1/8)



第38图 1号清出土遺物実測図(1/4、●は1/3)

2号溝 (第39図)

区画溝の東西方向に続く溝で、長さ約6.5m、幅約1.5m、深さ約0.18m、7号掘立柱建物に切られている。溝自体の残りが悪く、断面が浅い逆台形を呈する。溝底の標高は、西端2.413m、中央2.452m、東端2.430mと西に向かって傾斜する。土器は、1号溝と同じく上層からの出土が多く、甕は外面に黒色炭化するほどの濃いススが付着しており、使用痕が著しいものが多い。



第39図 2号溝平面断面実測図(1/40)

出土遺物（第40、41図）

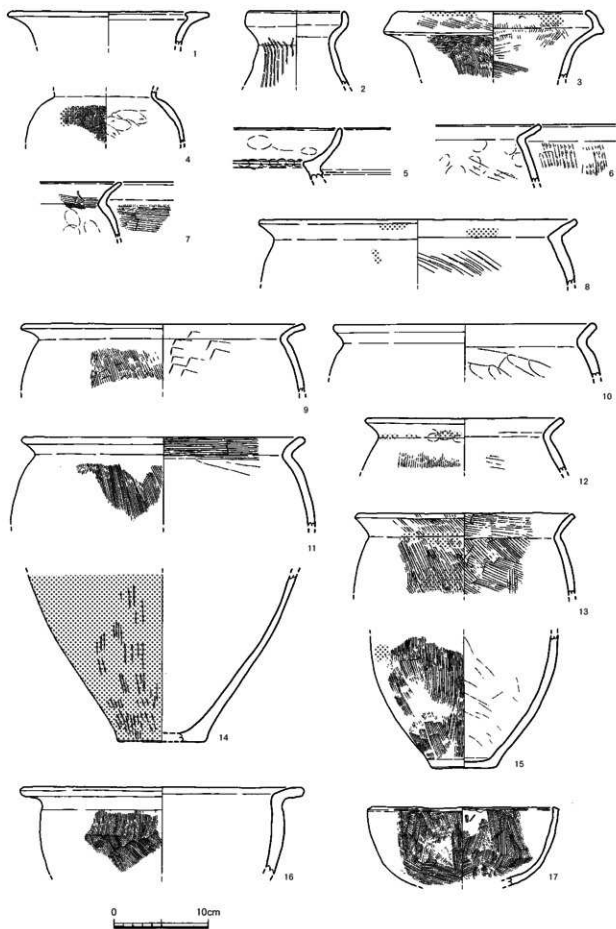
1は、鋤先口縁壺の口縁部片で、風化が著しいため、内外面共に調整不明瞭。2は袋部が上方に開く袋状口縁壺で、縦方向の暗文風ミガキである。頸部以下を欠損する。弥生時代後期前半。3は複合口縁壺の口縁部～頸部の破片である。内外面共に粗い刷毛目調整を施す。4は小壺の胴部片で、細かな刷毛目調整である。弥生時代後期後半。5は鋤先口縁が上方に傾斜する甕の口縁部片である。6は、くの字口縁甕の口縁部片で、外面は粗い刷毛目調整を施す。7は、くの字口縁甕の口縁部片。内外面共に横方向の刷毛目調整が明瞭に残る。8は鋤先口縁が内傾斜する甕で、胴以下を欠損する。9は、くの字口縁をもつ甕で、胴中位以下を欠損する。弥生後期初頭。10もくの字口縁をもつ甕で、頸部都の付け根に指頭圧痕が明瞭に残る。11は、くの字口縁甕で、外面調整は斜方向の刷毛目調整、口縁内面は横方向の刷毛目調整である。12は、くの字口縁甕の口縁部片。13は、くの字口縁をもつ甕で、弥生時代後期後半。内外面共に粗い刷毛目調整が明瞭に残る。14は、甕の胴中位～腰部が残存し、外面は縦方向の刷毛目調整である。外面にススが明瞭に残っており、煮炊きに使用されたことは明らかである。15の甕は、胴中位～底部にかけて残存。弥生時代後期。16は逆L字状口縁をもつ鉢。17は鉢で、内外面共に粗い刷毛目調整。18は高環の口縁部片で、口縁は外反する。不明瞭ではあるが、外面は刷毛目調整である。弥生時代後期後半。19は高環の口縁部片で、弥生時代後期末に属する。口縁外面に波状の暗文ミガキ、環部外面も縦方向のミガキである。内面のミガキも明瞭に残る。20は高環の環部片で、古墳時代初頭。内外面風化が著しく、調整不明瞭。21は器台で、外面半分は二次焼成痕が明瞭に残る。3個1セットと見られるが、同様の器台は確認していない。22は瓦質の火鉢片で、突帯上位にスタンプ文を施す。後世の流入である。23は片岩製の剥片である。背面側が礫面で水磨により表面が平滑で、打面側は同時割れで打点周辺が弾ける。腹面側は打瘤が発達せず下部は階段状剥離により段が付く。24は花崗岩製の敲石で、上下両端に敲打痕が残る。

3号溝（第42図）

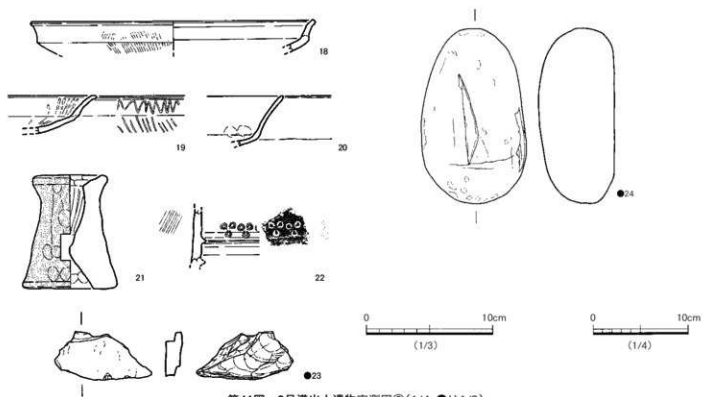
調査区北西側に位置し、区画溝である2号溝の延長を検出するために調査区を拡張した際に、2号溝とは別に確認された溝である。溝とはしているものの、深さ0.15～0.2mの緩やかに立ち上がる断面形状で、延長方向の位置に設定したAトレンチでは、溝らしき遺構は確認できなかったことや溝内からは、2号溝よりも新しい時代の遺物が出土しているため、土坑と認識する方が正しいかもしれないが、延長方向の西側は、削平が著しく、遺構が消滅している可能性もあるため、溝として報告する。出土した遺物は、細片が多いものの、古墳前期後半の土器や同安青磁皿が確認できることから、仮りに溝としても2号溝と同時期ではないと考えられる。

出土遺物（第43図）

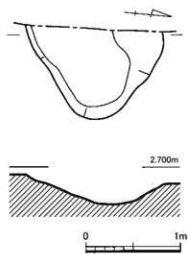
1は、甕の底部片で、平底が若干丸みを帯びる。外面に粗い刷毛目調整が残る。2は高環の環部片で、古墳前期後半。内外面共に刷毛目調整であるが、不明瞭である。3は同安窯青磁皿の破片で、内面に花文と点描文が描かれる。全面施釉後に底部の軸を剥ぎ取る。4は土罐で、孔の一部が欠けている。長さ4.0cm、幅2.2cmを測る。



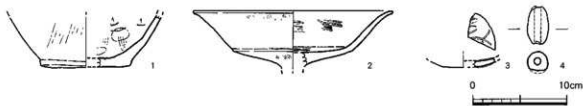
第40图 2号沟出土遗物实测图①(1/4)



第41图 2号清出土遺物実測図②(1/4, ●は1/3)



第42图 3号清平断面実測図(1/40)



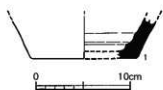
第43图 3号清出土遺物実測図(1/4)

4号溝 (第44図)

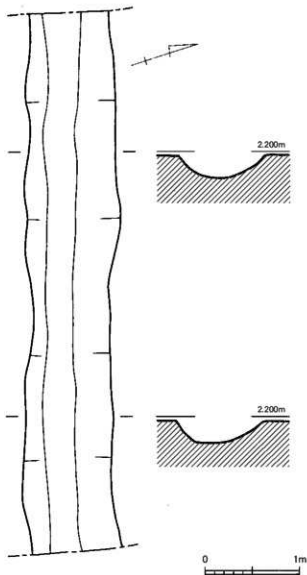
調査区東側に位置する溝で、東西に直線的に延びる。長さ5.8m、幅0.9mを測り、断面形状は逆台形で、深さは0.28m程度である。溝内の遺物が少なく、時期の判断が難しいが、須恵器の壺片が出土しており、古代～中世の溝である。

出土遺物 (第45図)

1は、須恵器の壺で、底部のみの残存。内面共に回転横ナゲ調整によって成形する。



第45図 4号溝出土遺物実測図(1/4)

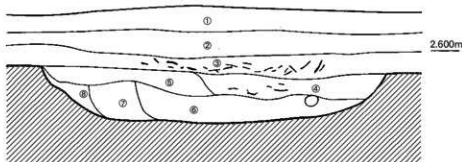


第44図 4号溝平面断面実測図(1/40)

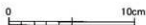
(3) 土坑

1号土坑 (第46、47図)

調査区北側、2号溝の南側に位置する土坑で、長軸は、谷の落ち際の等高線に沿う形で掘削されている。土坑の一部が調査区外へと続くため、全体像が不明であるが、長方形の土坑と推測される。土坑北西側では、長さ60cm程度の板材2枚を土坑の長軸に直交する形で敷き、杭で固定している。坑内からは半裁材、板材のほか土器、石器が出土する。長軸3.64+ α m、短軸1.86m、深さ0.40mで、弥生時代後期前半。出土遺物 (第48~56図)



- ①暗灰色粘質土層(耕作土)
- ②赤灰色砂質土層(床土)
- ③暗褐色砂質土層(弥生後期前半~終末期の包含層,土器を大量に含む)
- ④暗褐色砂質土層(土器を多く含む)
- ⑤暗褐色砂質土層(流れ込み,土器少量)
- ⑥暗灰色粘質土層(時間をかけた堆積,木器を含む)
- ⑦暗褐色砂質土層(流れ込み)
- ⑧暗褐色砂質土層(流れ込み)



第46図 1号土坑土層断面実測図(1/30)

【土器】

1は鋤先口縁壺の口縁部片で、丹塗り磨研土器である。口縁外面には暗文状のミガキが残る。丹塗りの範囲は、外面から口縁内面までである。2も鋤先口縁壺の口縁部片で、鋤先が内傾する。外面に縦方向の刷毛目がわずかに残る。3は壺の頸部片で、丹塗り磨研である。調整は縦ミガキである。4は広口壺で、口縁部と胴下半が欠損する。外面および頸部内面までが丹塗りで、外面はミガキ調整、内面は強い横ナデで成形する。5は袋状もしくは複合口縁壺の胴下半である。内外面共に板ナデ痕跡が残り、丹塗りではない。6は袋状口縁壺の口縁部片で、外面は縦方向ミガキであるが、丹塗りは部分的である。7~10は複合口縁壺の口縁部片で、内外ともに刷毛目調整。弥生時代後期前半。11は長頸壺の頸部片で、内外面共に縦方向の刷毛目調整である。12は、胴部最大径が上位にある長胴の袋状口縁壺であろう。外面底部付近は縦方向のミガキ調整である。13は壺の底部片で、外面は、縦方向の刷毛目調整である。14は中型壺の底部片で、外面胴中位は板ナデ、胴下位は棒状工具によるナデ調整。15、16は、くの字口縁をもつ甕で、外面は縦方向の刷毛目調整。15は外面にススが付着する。17は壺の底部片で、外面の底部付近は縦方向の刷毛目調整がよく残る。18は中型くの字口縁甕で、口縁下に突帯を1条巡らす。外面は縦方向の刷毛目調整で、口縁内面は横方向の刷毛目調整である。弥生時代後期後半。19は、くの字口縁甕で、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。20は、くの字口縁甕で、19と同様に三角突帯を1条巡らす。21は外面にススが著しく付着し、使用痕が著しい甕で、外面は斜方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整である。22は、くの字口縁をもつ甕で、底部を欠損する。胴部外面は縦方向の刷毛目調整、口縁内面は横方向の刷毛目調整である。弥生時代後期前半。23は内傾斜の強いくの字口縁甕で、内外面の刷毛目調整がわずかに残る。24は胴下半を欠損する甕で、外面にはススが付着する。25は、くの字口縁甕で、胴下半を欠損する。外面調整は縦方向の刷毛目調整である。26は、くの字口縁甕で、鋤先口縁の名

残を残す。外面に縦方向の刷毛目調整がわずかに残る。27・28は、くの字口縁をもつ小型甕で、胴下位を欠損する。外面に縦方向の刷毛目を施す。28は外面全体にススが付着し、火にかけられている。29～32は、甕の口縁部片で、口縁内面は横方向の刷毛目調整で、外面は縦方向の刷毛目調整。32の外面は、粗い刷毛目調整で、ススが付着する。33は屈曲の少ないくの字口縁甕で、底部は平底であるが、端部をつまみ出す。胴上位に最大径があり、間隔が幅広の粗い刷毛目調整である。弥生時代後期前半の範疇か。34も口縁の屈曲の弱い甕で、全体的に風化が著しく、調整不明瞭である。35は、胴部の張り出しが弱いくの字口縁甕で、底部を欠損する。34と同様、風化により調整不明瞭。36は、くの字口縁甕で小型、底部は平底を呈する。外面胴部は縦方向の刷毛目調整である。37は甕の底部片で、底部側面を強い指オサエで成形しており、外表面の凸凹が特徴である。38は甕の底部片で、平底の外面は縦方向の刷毛目調整が明瞭に残る。39は甕の底部付近のみの残存。底部から直線的に胴部が延びているが、外面の調整は全体的に不明瞭で、わずかに刷毛目が残る程度である。40は甕の底部片で、外面の調整が刷毛目調整であることから甕としている。内面調整は板ナデである。41は胴中位～底部まで残存する甕で、平底である。外面の刷毛目調整が明瞭に残る。42は胴下位～底部にかけて残存する甕で、縦方向の刷毛目調整が明瞭である。43は胴中位から底部にかけて残存する甕で、平底であるが、厚みのある底部である。外面は幅広の刷毛目工具を用いて調整する。44も胴中位から底部にかけて残存する甕で、胴が窄まる形で底部と接合する。外面は縦方向の刷毛目、内面は板ナデの後、強いナデである。45は鉢で底部を欠損する。外面は粗い刷毛目調整が残り、谷部包含層からの混入品か。46は椀状の鉢で、底部を欠損する。内外面共に刷毛目調整である。47は鉢で、胴下半を欠損する。口縁端部が丸みを帯びているほか、丹塗りがわずかに認められる。48は手づくねの鉢で、刷毛目とナデで仕上げる。底部は欠損する。49は内傾する鋳先口縁をもつ鉢（壺）で、丹塗りは、外面および内面の一部に見られる。弥生時代後期初頭。50は丹塗りの高坏で、鋳先口縁が外方に垂れる。内面のミガキ調整は確認できるが、外面はわずかに丹塗りを確認できる程度で、風化により、調整が不明瞭。弥生時代後期初頭。51は瀬戸内系の影響を受けた高坏の口縁部片で、弥生時代後期中頃。52は弥生時代後期後半の高坏で、脚部を欠損する。外面は刷毛目調整である。53は器台で、内面の器壁が剥離している。外面は粗い刷毛目調整である。54は指オサエで成形する器台で、口縁が脚部よりも大きく開く。厚みのある器台。55も厚みのある器台で、指オサエで成形する。口縁内面は横方向の刷毛目調整。56は脚裾から直線的に立ち上がる器台で、内外面の指オサエが明瞭に残る。

【石器】

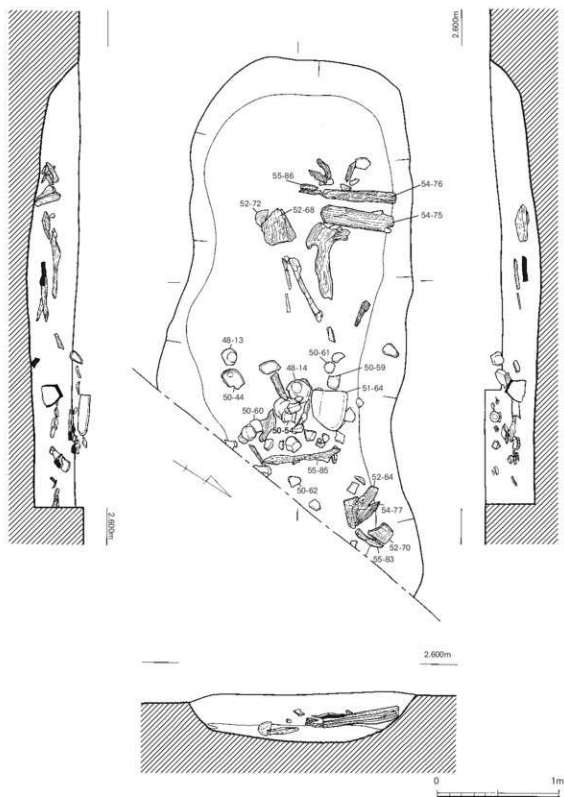
57は砂岩製の砥石である。砥面は表・右側面の計2面で、裏は欠損している。58は砂岩製とみられる砥石で、砥面は表・裏・上側面の計3面である。左右が欠損し全形は分からないが、本来は平面形状が分銅形を呈する製品であったものと考えられる。59は砂岩製の砥石である。砥面は表・右側面の計2面で、表面が平滑で中央部分が使用される。60は花崗岩製の敲石で、上端が敲打により潰れる。61は花崗岩製の磨石である。川原石素材で表面のみ使用痕が残り、一部煤が付着する。62は花崗岩の磨石で、下面のみ使用される。石杵状の形状でやや質の悪い花崗岩を用いられる。63は花崗岩の大形台石とみられる座りが悪く、人頭大の川原石素材で表面のみ使用により凹みが残る。長さ29.5cm、幅17.1cm、厚さ11.0cm、重さ9.64kgを測る。64は花崗

岩の大形台石で、表面が使用により磨滅が顕著である。長さ33.6cm、幅29.75cm、厚さ9.2cm、重さ14.98kg。

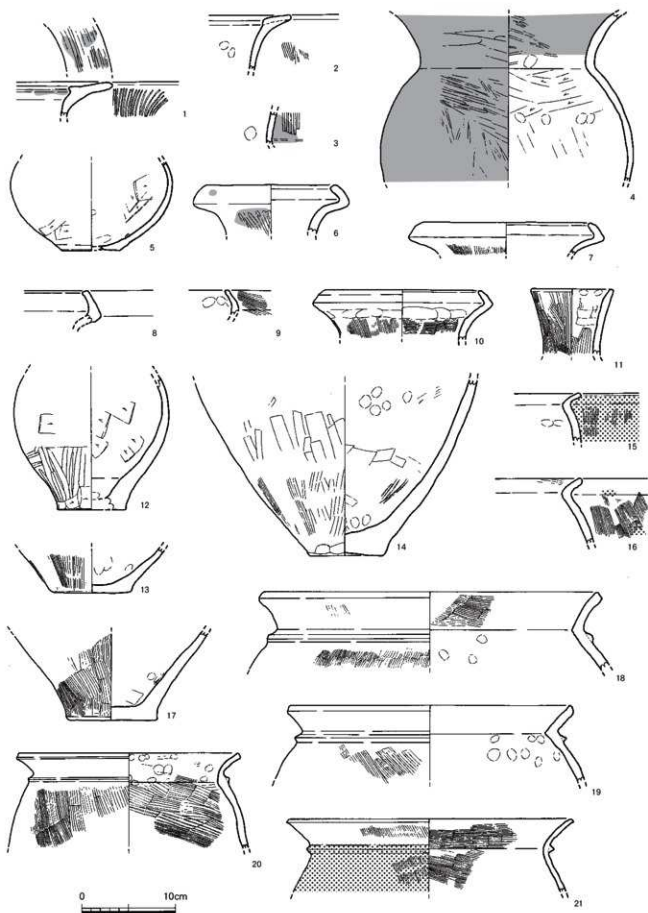
【木器】

65は斧柄で、斧台のみの残存で環基Ⅱa式である（鶴来2023）。枝部を利用した膝柄を利用した一木式で、着装部の法量は、長さ3.9cm、幅3.1cm、厚さ2.0cmを測る。鍛造袋状鉄斧に対応し、縦斧での使用である。66は半裁材で、下小口面は施溝分割、上小口面は、上面を斜めに削り、折り取る。外皮の一部が残り、裏面は割裂面未調整である。長さ20.7cm、幅12.0cm、厚さ5.2cmである。67は外皮を残す半裁材で、下小口面は、斜めに切断加工があり、上小口面にも切断痕跡を残す。法量は長さ29.4cm、幅12.2cm、厚さ5.0cmを測る。68も半裁材であるが、上面の外皮を削っている。小口面に施溝分割や玉切りの痕跡を残す。法量は長さ26.2cm、幅11.2cm、厚さ3.7cmである。69は分割材で、上面の加工痕が不明瞭で、下面は割裂面未調整である。両側面とも平坦に調整しており、その平坦面から5分割している。両小口共に斜めの切断痕跡を残す。法量は長さ24.4cm、幅7.4cm、厚さ3.4cmである。70は半裁材で、上面から分割た2破片が接合する。下小口面は斜めの切断痕跡があり、上面は削っている。長さ23.2cm、幅15.1cm、厚さ4.6cmを測る。71は半裁材で、両側面の凹みは楔痕跡か。上面を削りが明瞭で、下小口部には斜めに切断した加工痕が残り、上小口面は玉切り。長さ27.5cm、幅16.3cm、厚さ6.8cmを測る。72は取上げの際に割れが生じたが、もともと1つの板材である。上面および下面は、一部平滑に加工しているが、大部分が割裂面であり、楔による分割で板目材をとっている。両側面は加工、上小口は施溝分割、下小口は調整する。法量は長さ29.6cm、幅18.0cm、厚さ3.9cmである。73・74は、同一素材である。73の下小口側は施溝分割、上小口面は、平坦に調整後分割する。縄掛部は鉄製工具による深いケズリで、幅2.7cmである。法量は長さ25.5cm、幅15.6cm、厚さ7.9cmを測る。74は分割後の上・下面は割裂面未調整で、側面に縄掛の一部が残る。下小口側は施溝分割の切断痕、上小口面は、平坦に調整する。73と74を接合すると、下小口の施溝分割面に、楔のような長方形の空間がある。法量は長さ23.7cm、幅16.3cm、厚さ7.6cmを測る。75・76は同一部材で、直径13.7cmの原材を施溝分割し、小口面調整後分割する。長さ60cm程度、幅13cm程度の素材を作出している。75は、上面ケズリ、上小口面調整と下小口は、施溝分割が確認できる。法量は、長さ60.3cm、幅13.7cm、厚さ9.5cmを測る。76は樹皮を剥がし、上面ケズリで整え施溝分割、小口面調整を経て分割し、割裂面を残す。法量は、長さ58.7cm、幅11.8cm、厚さ5.0cmを測る。77は柁目材で、向きを変えた切断痕跡がある。右側面、上下面を平坦調整し、左側面を分割する。長さ29.8cm、幅7.9cm、厚さ6.3cmを測る。78は板目材の不要部分を分割した残材で、下小口面を調整し、上小口面が施溝切断である。上面の大部分が風化により木が痩せているが、一部に削りの痕跡が確認できる。長さ10.6cm、幅8.2cm、厚さ2.6cmを測る。79・80はスタジイで、接合しないが同一端材であろう。両側面が割れ面になっているため、分割端材である。81は、杭で、樹枝の先端を尖らせる。基部が焼けており、炭化する。長さ46.8cm、直径3.5cmを測る。82は、長さ50.1cm、直径4.7cm（最大）の杭で、全体に焼けており、炭化する。83の杭は、先端を斜めに削り尖らせ、基部の小口面は、切断時の段がある。また基部はケズリがあるが、炭化する。長さ23.9cm、直径7.2cmである。84は樹皮が残る杭で、基部に切断痕、先端を尖らせる。先端は炭化しており、長さ27.6cm、直径4.5cmである。85の杭は、樹皮を残し、先端を削るが、先端部は折損している。基部は折れである。長さ28.3cm、幅4.1cm、

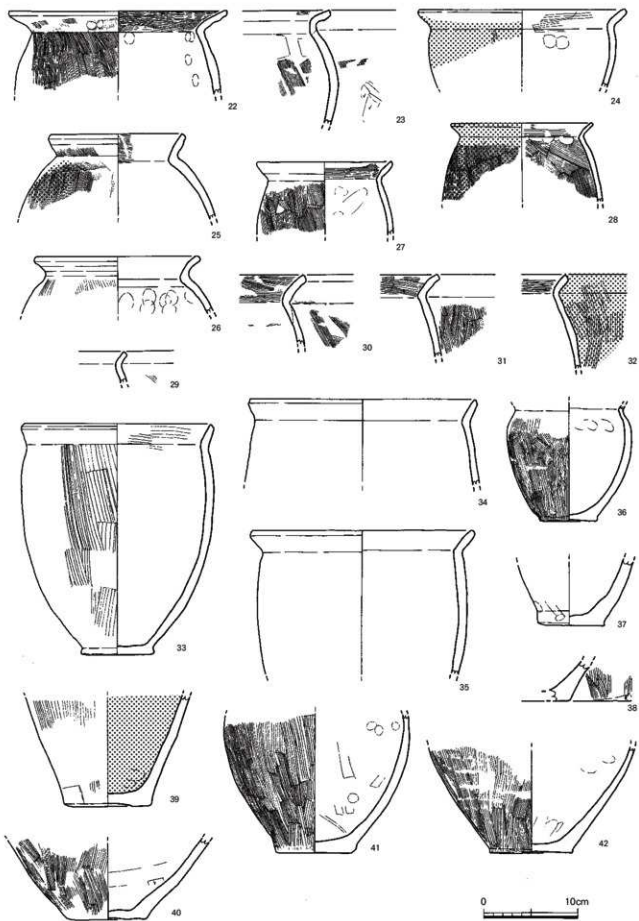
厚さ3.9cmを測る。86は切断面や樹皮が炭化している杭で、左上から斜めに先端部を削り、杭状とする。長さ19.3cm、幅4.5cm、厚さ2.7cmである。87は、樹皮を一部残す杭で、斜めに削り、先



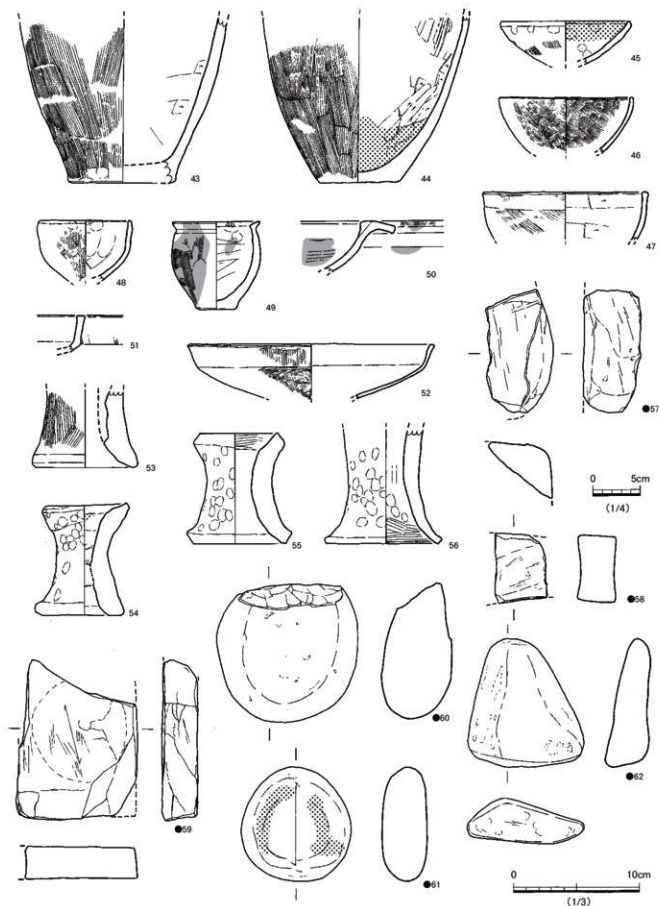
第47図 1号土坑平面実測図(1/30)



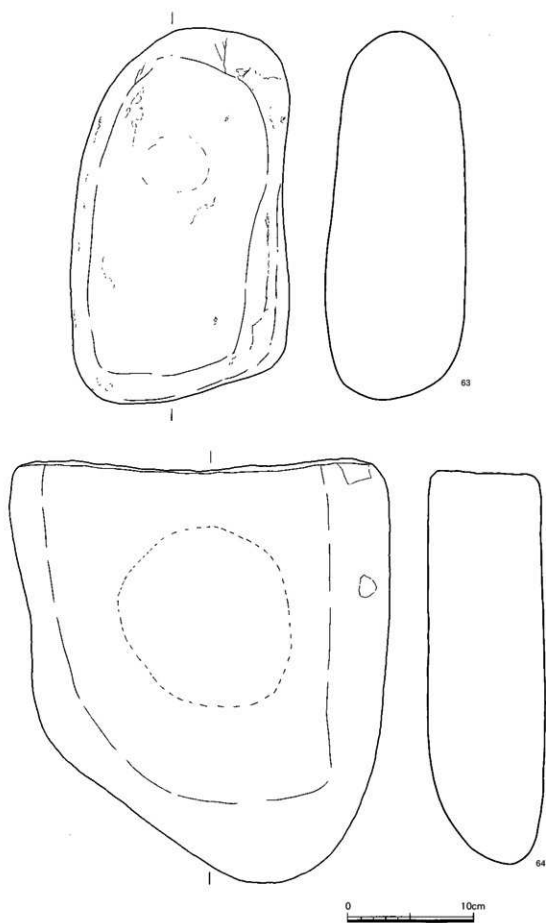
第48图 1号土坑出土文物实测图①(1/4)



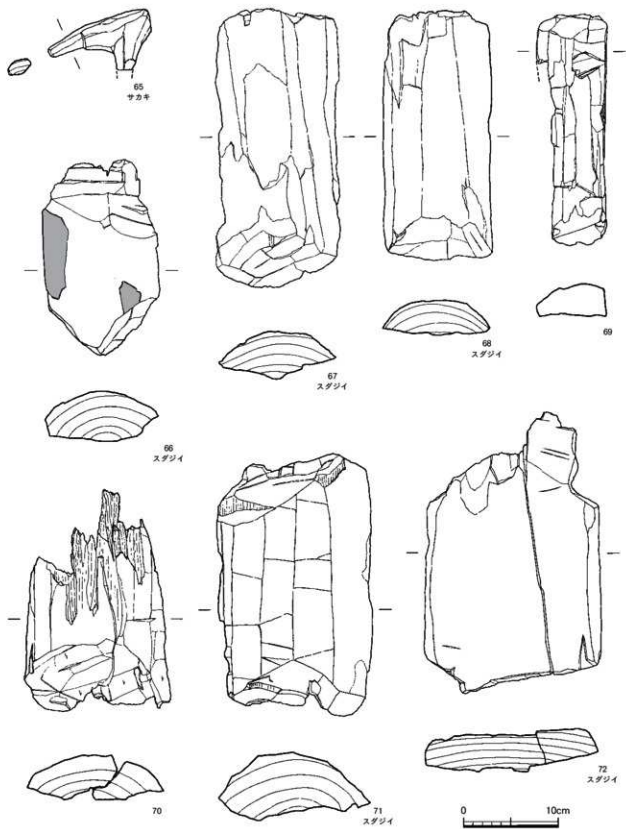
第49图 1号土坑出土遗物实测图②(1/4)



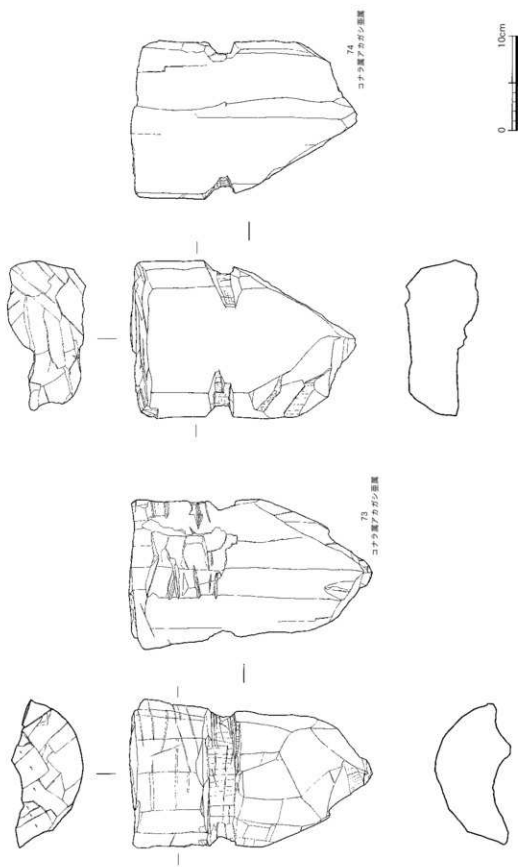
第50图 1号土坑出土文物实测图③(1/4, ●は1/3)



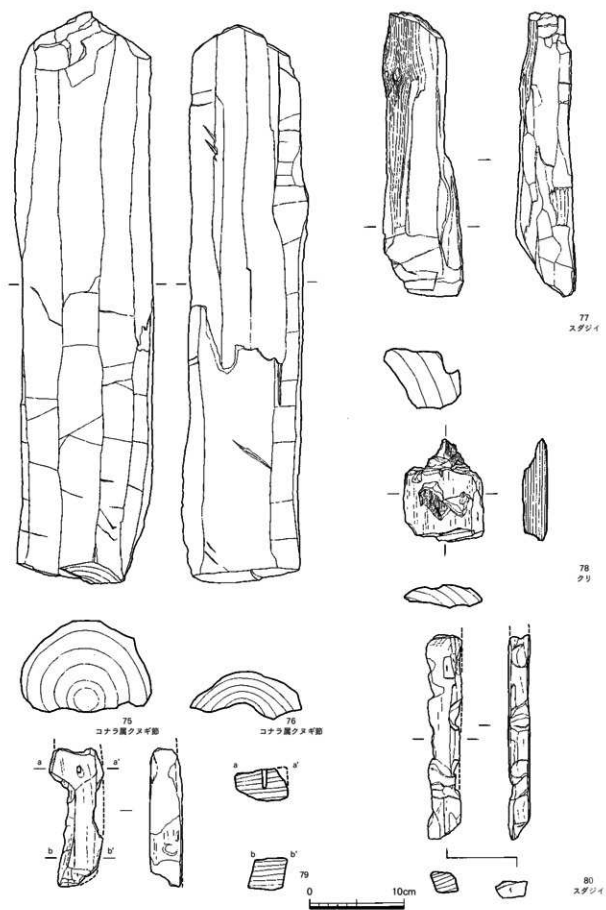
第51图 1号土坑出土文物实测图④(1/3)



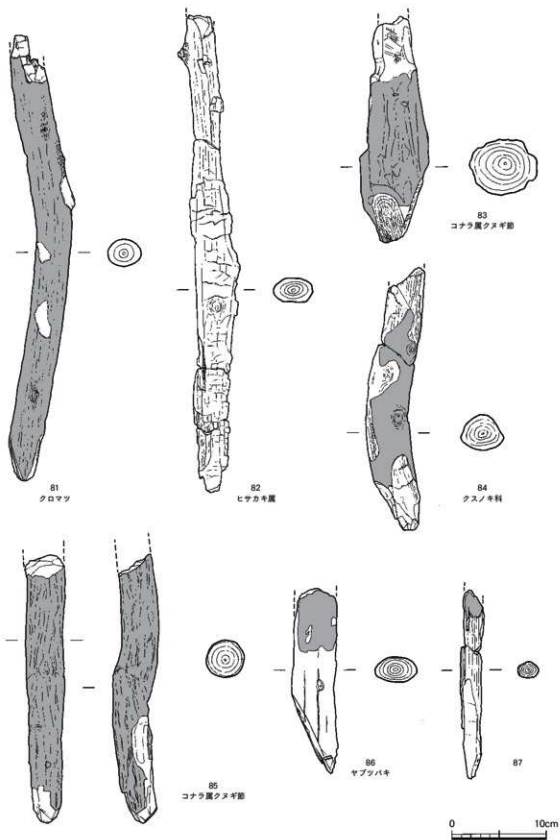
第52図 1号土坑出土遺物実測図⑤(1/4)



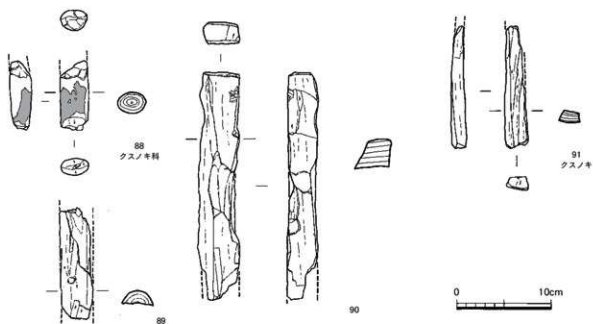
第53図 1号土坑出土遺物実測図⑥(1/4)



第54図 1号土坑出土遺物実測図⑦(1/4)



第55図 1号土坑出土遺物実測図⑧(1/4)



第56図 1号土坑出土遺物実測図⑨(1/4)

端を尖らせる。長さ19.8cm、幅2.1cm、厚さ1.6cmである。88・89は樹枝で、共に下小口に切断痕跡が残る。枝打ち残材。90は上小口面を面取りし、左側面は割れ、残り3面は平坦に加工している。91は割屑である。

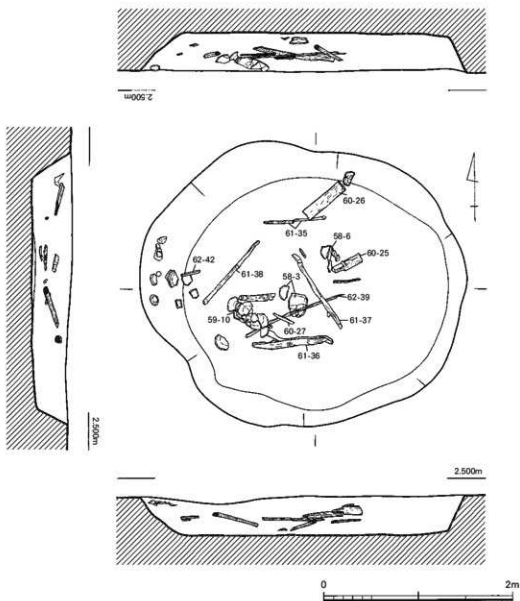
2号土坑（第57図）

調査区中央付近で検出された円形土坑で、長軸3.43m、短軸2.89m、深さ0.43mを測る。土坑内西側の上層土器（第59図1、2、18、19）は、周囲からの流れ込み混入した遺物で、弥生時代後期後半～終末期である。中層は土坑内中央に弥生後期前半（第58図3、5）の土器と共に杭や棒状端材土坑内北東側に容器未成品や板材が出土する。木屑も出土することから木器製作場と考えられ、他の土坑と同じ弥生時代後期前半と考えられる。

出土遺物（第58～62図）

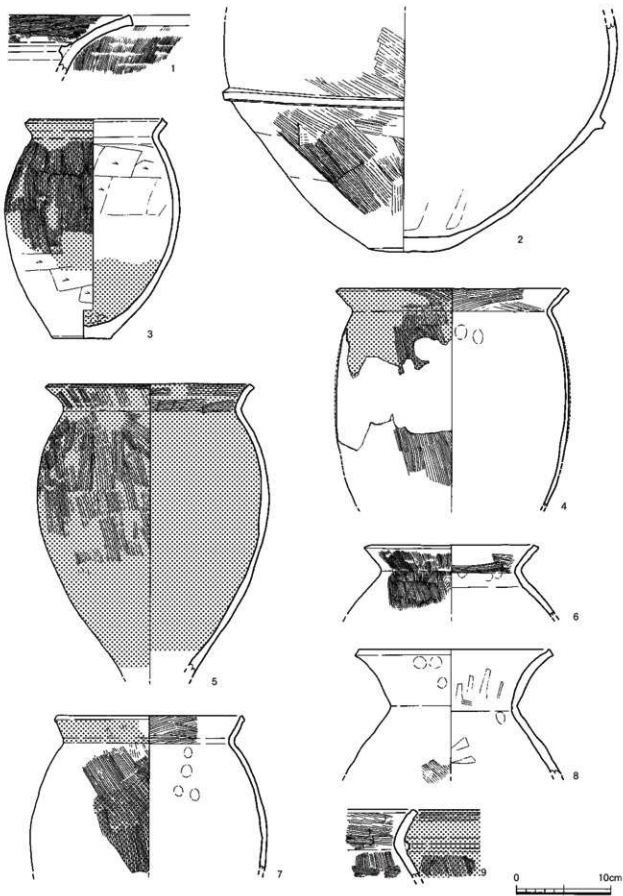
【土器】

1は中形壺の口縁部片で、口縁内側に1条の台形状突帯を付す。口縁外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整で、弥生時代終末である。2は中型壺の胴下部分のみである。1条の台形状突帯が、胴部最大径よりも下位にあり、レンズ状丸底であることから、弥生時代後期後半～終末である。外面は粗い刷毛目調整であるが、内面に刷毛目調整が見られない。3は、くの字口縁甕で、平底である。外面はススが附着し、内面の底にコゲが確認でき、火にかけられた使用痕が明瞭な甕である。4は、くの字甕で、胴部外面は、ススのほか、被熱による破裂痕が著しく、使用痕がある。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁内面は横方向の刷毛目調整で、胴部はナデである。5は、くの字口縁甕で、胴部最大径が上位にあり、平底であろう。外面はススが附着し、内面全体にコゲがある。弥生時代後期前半。6は、くの字口縁甕の口縁部片で、外面は縦方向の刷毛目調整、口縁内面は横方向の刷毛目調整、胴部はナデである。7の甕は、くの字口縁をもち、外面

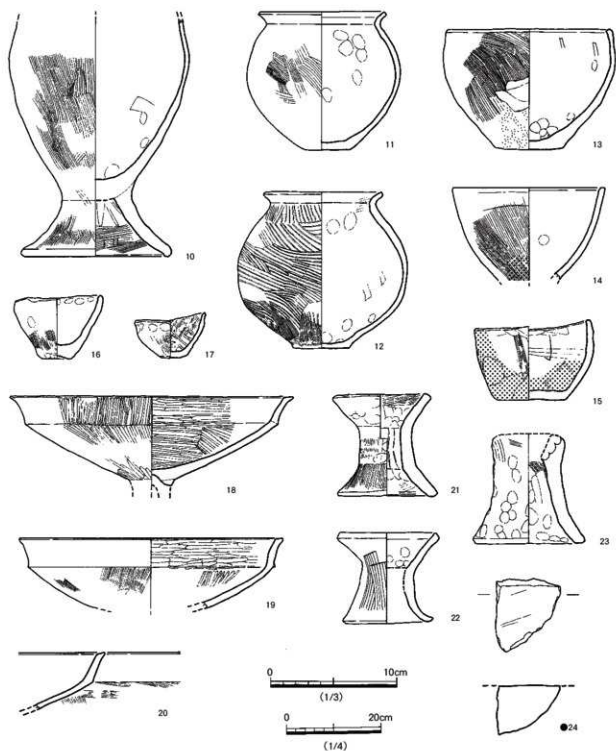


第57図 2号土坑平断面実測図(1/40)

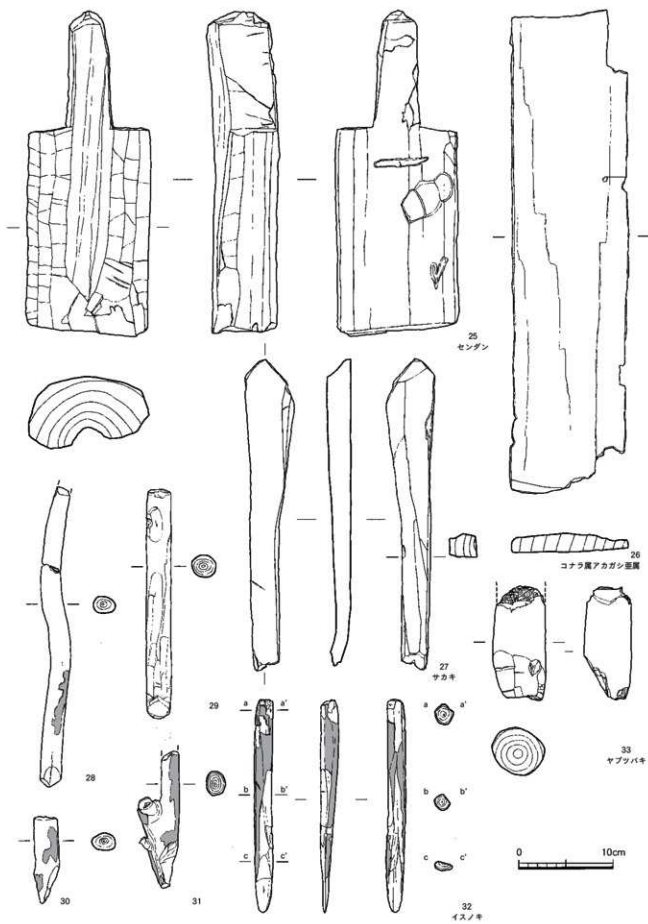
にはススが付着する。8は外方に開く口縁をもつ甕で、古墳時代か。9は、くの字口縁をもつ中形甕で、頭部に三角突帯を1条巡らす。内外面刷毛目調整で、外面にススが付着する。10は糸島特有の脚付き甕で、口縁部を欠損する。底部と脚部の接合痕が明瞭で、外面は縦方向の刷毛目調整で、胴部内面は板ナデである。11は短頸壺で、くの字に開く口縁で平底である。12は、11よりも胴部最大径が下位にある短頸壺で、外面は粗い刷毛目調整である。13は、口縁が内傾する鉢で、外面胴下位に二次焼成痕がある。底部はレンズ底を呈する。14の鉢は、底部が欠損する。外面は、縦方向の刷毛目調整である。15は手づくねの鉢で、外面は、指オサエと刷毛目、内面は板ナデ、ナデ調整で成形する。16、17は手づくね土器で、16の底部に布目が確認できる。18は高坏で、脚部を欠損する。口縁端部をつまみ出し、内外面共に丁寧なミガキ調整で、精製品。弥生時代後期後半である。19は高坏で、脚部を欠損する。口縁端部をつまみ出し、精製品であるが、



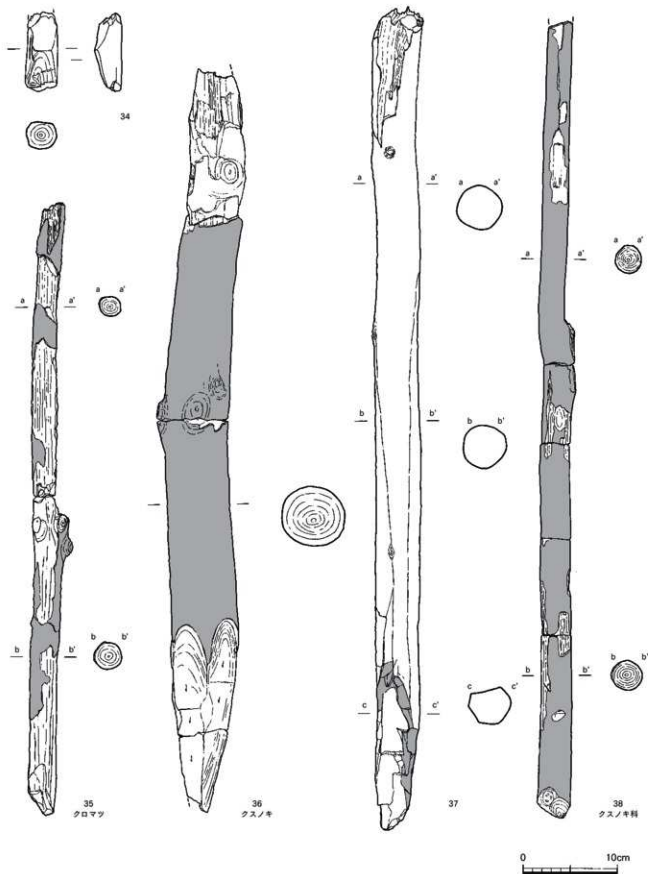
第58图 2号土坑出土遗物实测图①(1/4)



第59図 2号土坑出土遺物実測図②(1/4、●は1/3)



第60図 2号土坑出土遺物実測図③(1/4)



第61図 2号土坑出土遺物実測図④(1/4)

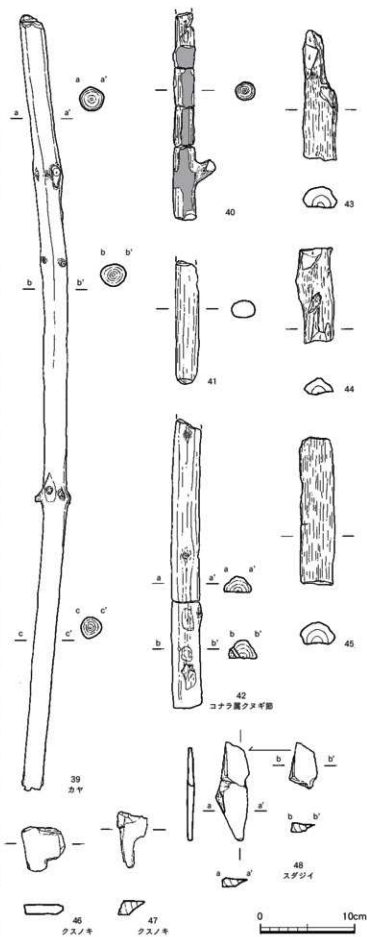
外面刷毛目で、内面ミガキ調整である。20は高環の坏部片で、全体的に風化しているが、口縁端部をつまみ出す。21・22は器台で、21は上部の歪みが大きい。脚裾を刷毛目調整、上位をナデで成形する。23は、上部が円孔となる支脚で、指オサエで成形する。二次焼成など使用痕は確認できない。

【石器】

24は花崗岩製の砥石とみられる。ただ表面のみが残存し、それ以外の面が欠損しているため、別器種の可能性がある。

【木器】

25は把手付容器の未成品で、半裁材から下面を削り、把手を作り出す。上面を掘り込み始めの状態である。長さ34.3cm、幅12.6cm、厚さ7.5cmを測る。26は板材で、上小口面は調整、下小口面は施溝分割が残る。上面は割裂面を若干調整、下面ケズリである。長さ50.7cm、幅12.3cm、厚さ2.0cmを測る。上面には、方形孔と割付線が確認できる。27は斧柄の未成品か。全体にケズリ出し、基部が屈曲する。上・下面調整から施溝分割、割り先端ケズリである。下端は折損。長さ33cm、幅5.0cm、厚さ2.4cmを測る。28～31は樹枝の先端を加工して、杭としたもの。一部に樹皮が残る。32は樹枝の先端を加工したへら状木製品。樹皮が一部残り、長さ22.4cm、幅2.0cm、厚さ1.9cmを測る。33は短い杭で、上端は斜めに切断加工して折り取っている。長さ12.0cm、直径5.4cmを測る。34も短い杭で、上面の上・下に斜めの加工痕があることから、杭の長さ調整後の残欠か。長さ8.2cm、直径3.2cmを測る。35～38は、樹枝の先端を斜めに加工して、杭としたもの。樹皮を一部残し、必要最低限の



第62図 2号土坑出土遺物実測図⑤(1/4)

加工である。39～45は杭を製作する際に生じた残欠か。42～45は樹枝を半裁している。46～48は木屑で、樹種は46、47がクスノキで、48はスダジイであるが、その樹種の未成品は出土していない。46は断面長方形で、長さ4.7cm、幅4.3cm、厚さ1.0cmを測る。47は断面平行四辺形で、長さ5.9cm、幅3.1cm、厚さ1.5cmを測る。48は断面三角形で、長さ10.3cm、幅3.3cm、厚さ1.0cmを測る。

3号土坑（第63図）

調査区中央付近で検出された楕円に近い不整形土坑で、断面は台形状を呈する。長軸4.05m、短軸2.76m、深さ0.46mを測り、土坑内の土器のうち、上層の土器は、周囲からの流れ込みの様相を呈している。木甲の未製品は、土坑内の南側に集中し、中層から出土している。最も加工が進んでいる後胴（第65図11）は、土坑内西側、長さ約1.64mの木材（第68図16）の下から出土し、後胴の表を上にする。その後胴に近い半裁材（第67図15）は、半裁面を下にし、前胴未製品（第66図12、13、第67図14）3点は、壁際に斜めに据え置かれている。これらは、木甲の製作工程における各段階の未製品であり、木屑が出土していることから、木工を含めた木製品の生産に係わる土坑と考えられる。出土土器から、弥生時代後期前半と考えられる。

出土遺物（第64～69図）

【土器】

1は、袋状口縁壺の口縁～頸部にかけての破片で、頸部に三角突帯を1条付す。丹塗り磨研は、外面及び内面頸部上位までで、調整はミガキである。頸部の絞り込みが甘く、幅広であることから、弥生時代後期に入る。2は、口縁が複合化した壺で、ミガキがわずかに残る。丹塗りは口縁外面及び内面に一部飛沫している。3は、袋状もしくは複合口縁壺の底部で、平底を呈する。底部付近は強い横ナデを行い、内面は板ナデである。内面は暗赤褐色の丹塗りである。4は甕で、胴下位を欠損する。外面にススの痕跡がある。5は短頸壺で、内外面共に丹塗りであるが、ミガキ調整ではなく、板ナデもしくはナデ調整である。6は逆L字口縁の破片で、短頸壺の破片と考えられる。7は小形鉢で、平底である。外面刷毛目調整。8はコップ形の土器で、比較的厚手に作り、底部に向かって厚みを増す。丹塗りは、外面底および内面底は丹塗りではなく、その他は丹塗りとなる。調整は、体部外面が、縦方向のミガキ調整で、体部内面は横方向の板ナデ、口縁付近は指オサエが残る。色調は暗赤褐色で、外面底部の一部が黒色化するが、原因は不明である。在地形土器には見られない器種である。

【石器】

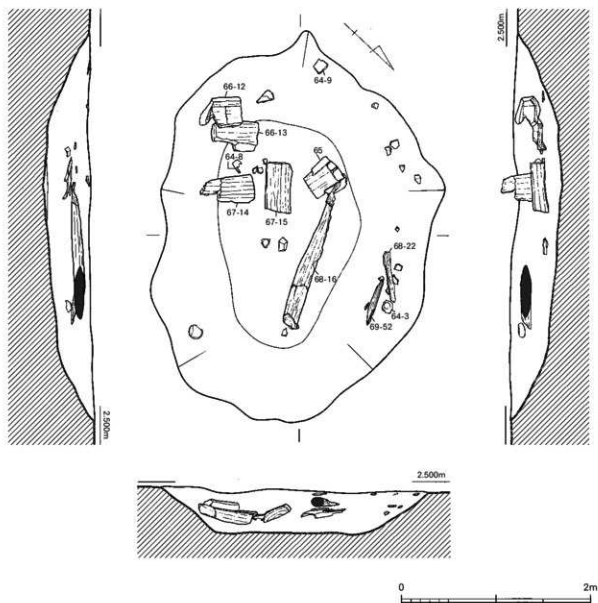
9は片麻岩製の砥石とみられる。河原石の下・右・左側面は加工して整形する。表面の自然面の中央部が砥石面として利用される。長さ13.35cm、幅11.65cm、厚さ6.12cm、重さ1,611.40gを測る。10は花崗岩製の凹石である。表裏の中央にそれぞれ、凹みがあり左側面に敲打痕が残る。残存長9.0cm、幅10.3cm、厚さ6.4cm、重さ936.73gを測る。

【木器】

11は木甲の後胴で、材質はカキノキ属である。後胴は細かく割れており、中心部を一部欠損するが、全体の形状が分かる好資料である。一木造りであり、半裁材を削り抜いて製作、全体が曲面をなす。肩部には、屈曲する羽根を造り出すが、左羽根は腐食のため欠損する。羽根は直線

的な段によって、胴中位付近まで表現しているが、羽自体に装飾は施していない。一方、肩部を中心に装飾があり、コの字形の文様を2か所陽刻表現し、コの字文の下端を直線で繋げている。また、コの字文と羽根との間には、細長い三角状文を施す。内面は、肩当てを作り出し、両端側縁部を片刃状に削ぎ落とす。側面には前胴と繋ぐための孔が開けられていない。分量は、中心で長さ38.0cm、幅34.6cm、厚さ1.8~5.0cmで、羽を含めた長さ39.8cmである。漆の塗布はなく、装飾途中の未成品の可能性がある。羽根付の朝拔式後胴は、伊場遺跡例（静岡県浜松市）が有名であるが、当遺跡出土後胴の羽形状は、伊場例と比べて装飾がなく直線的である。

12は、11と同じカキノキ属を使用した木甲前胴の未成品で、左上部を欠損する。左前胴の製作途中と考えられ、胴正面側の右側縁部をL字に切り落とす。外面整形は鉄製工具による粗いケズリ、内面は屈曲部に粗いケズリが明瞭に残る。両端は斜めの切断加工を残し、全体的に角が目立つことから、13よりも前工程の段階と判断した。前胴の製作工程が良く分かる資料であり、分量は、中心で長さ47.5cm、幅28.0cm、最大厚6.6cmである。



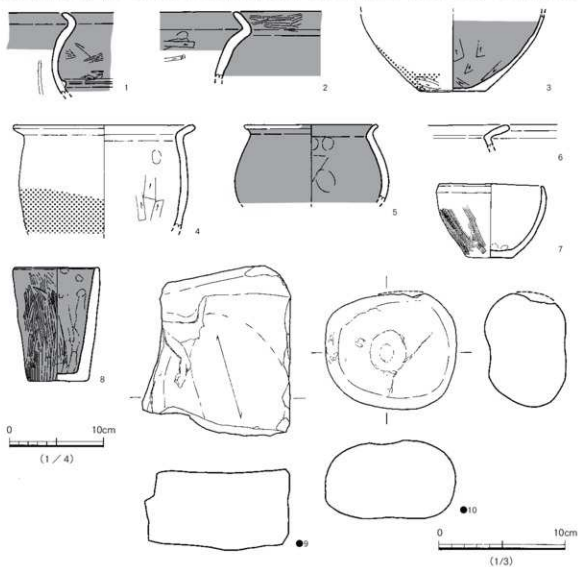
第63図 3号土坑平面実測図(1/40)

13は、右前胴の未成品で、カキノキ属である。胴上部を残しながら、内面を削り抜き、左側縁部を片刃状に切り落としている。端部は平坦に加工し、両小口面のケズリ痕跡や内外面のケズリ痕跡が明瞭である。歪みを防止するため上部を10cm程度厚く残しながら、加工している。12と比べて、外面の削りが進行し、曲面が滑らかである。法量は、中心で長さ46.5cm、幅27.7cm、厚さ5.5～10.5cmである。

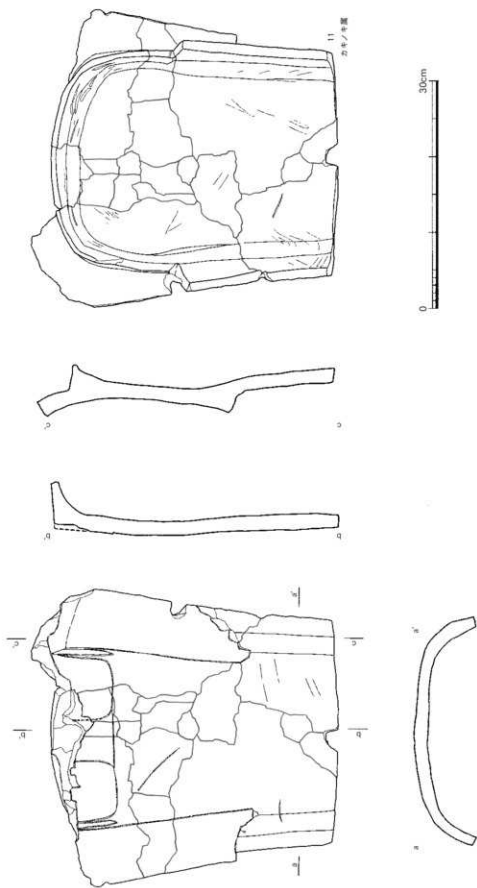
14、15は、木甲と同じカキノキ属であり、原木の直径も同程度と推測されることから、木甲製作に係る半裁材と考えられる。

14は半裁材で、上部は腐食による欠損が著しい。検出時には、上面全体に樹皮が良く残っていたが、水漬保管中に樹皮が剥がれてしまった。法量は長さ43.4cm、幅30.6cm、厚さ12.4cmを測り、下小口面は鉄製工具による調整である。下面は、割裂面未調整で、節のある右側面に楔痕跡とみられるコの字状の段がある。また、右側面は、横方向に削り始めており、平面の右側が斜方向の湾曲を造り出す。

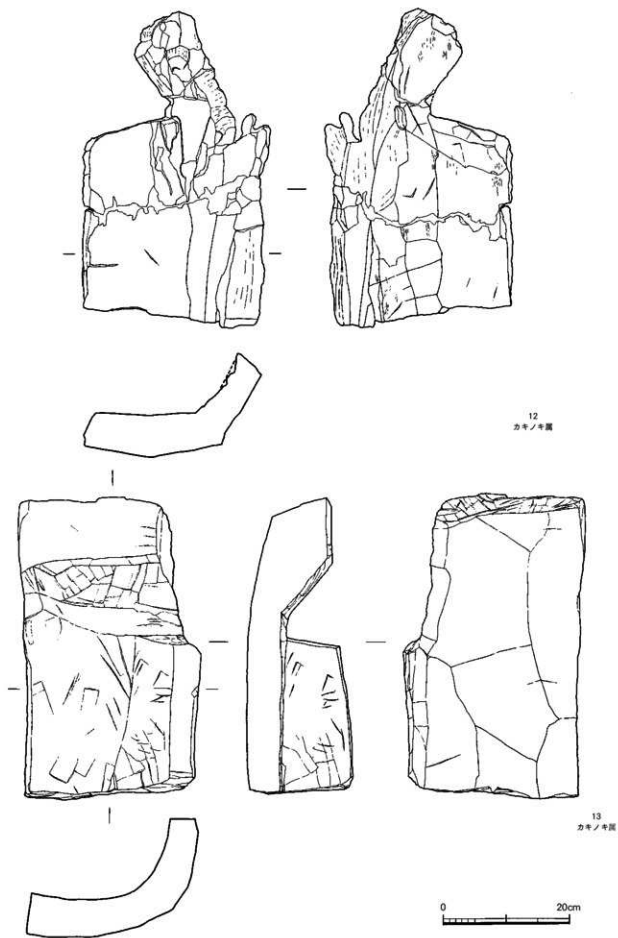
15は半裁材で、14と同様、検出時は全面に炭化した樹皮をよく残していたが、水漬保管中に樹皮が剥落した。両小口面共に平坦調整で、鉄製工具による削りが明瞭である。小口面調整後



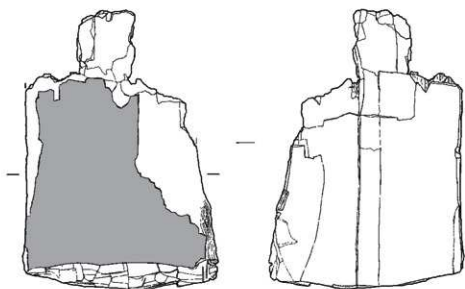
第64図 3号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)



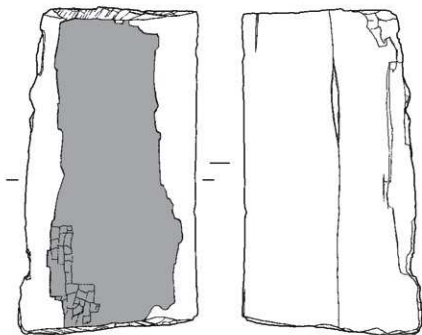
第65图 3号土坑出土文物实测图②(1/5)



第66図 3号土坑出土遺物実測図③(1/6)



14
カキノ半圓



15
カキノ半圓



第67図 3号土坑出土遺物実測図④(1/6)

の分割であり、法量は長さ52.0cm、幅28.7cm、厚さ13.7cmを測り、右側面の上下に楔痕跡がある。下面は割裂面を残すが、14のような側面の加工は行われていない。

16は3号土坑の北側で、木甲の上位から検出された材で、下面は割裂面を残し、上面は腐食により見えにくい、加工痕跡がある。右側面の平坦加工に対し、左側面は樹皮を剥がした後、わずかな加工痕にとどまる。下小口面は施溝分割、上小口面は風化による割れで、上面に抉り状の加工がある。上位のホゾ穴は貫通していない。先端部の風化が著しく、取り上げに耐えられなかったため、全長は短くなっている。法量は長さ90.2cm、幅17.6cm、厚さ10.4cmを測る。

17は把手で、半分が欠損する。把手上・下面・側面は平坦に加工されているが、内側面に横方向のケズリを残す。製作途中で破損したものか。法量は長さ9.0cm、幅9.5cm、厚さ3.6cmを測る。

18はへら状の木製品である。下面は割れ面であることから、細長い板片を上面ケズリによってへら状にしている。法量は長さ26.1cm、幅1.9cm、厚さ1.2cmを測る。19は、柁目取りの板材で、上・下小口を切断する。上面は割れ面で、下面は割裂面を残し、分割を多用することで板材を作り出す。上端に段を付けることから、案の部材のような差し込み材か。法量は長さ18.7cm、幅5.2cm、厚さ0.95cmを測る。20も柁目取りの板材で、左上面に2孔を穿つ。19と同じホミ属であるが、接合しない。法量は長さ18.1cm、幅5.1cm、厚さ0.9cmを測る。

21～38は木屑である。21～23は、長さ18cm、幅3cm程度の木屑で、断面が三角形で角をもつ。上面には平坦加工の痕跡があり、鉄製工具をフリウチした際に生じた木屑と考えられる。各法量は、21が長さ18.9cm、幅3.2cm、厚さ1.2cm、22が長さ18.1cm、幅3.25cm、厚さ1.5cm、23が長さ16.9cm、幅1.8cm、厚さ1.7cmを測る。

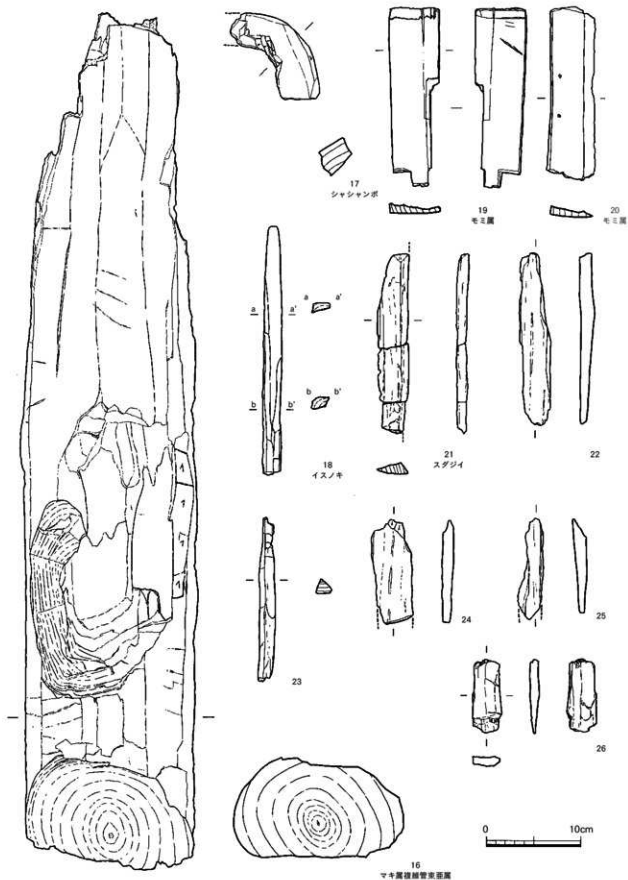
24～30は、長さ7～12cm、幅2～4cm程度の木屑で、鉄製工具による細かな調整により生じたもの。下面は割裂面を残す。縦断面のうち、細い方が打ち込み側で、厚い方の小口面は折れである。各法量は、24が長さ11.0cm、幅4.0cm、厚さ1.3cm、25が長さ10.65cm、幅2.4cm、厚さ1.4cm、26が長さ7.7cm、幅3.1cm、厚さ1.1cm、27が長さ12.0cm、幅4.2cm、厚さ0.9cm、28が長さ9.0cm、幅3.6cm、厚さ1.5cm、29が長さ8.6cm、幅2.8cm、厚さ0.9cm、30が長さ9.0cm、幅2.5cm、厚さ0.9cmを測る。

31、32は、より細かな調整により生ずる木屑である。31は長さ9.8cm、幅2.1cm、厚さ0.7cmを測る。上面はケズリまたは割裂面で、どちらかの小口面が折れとなる。32が長さ7.1cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。

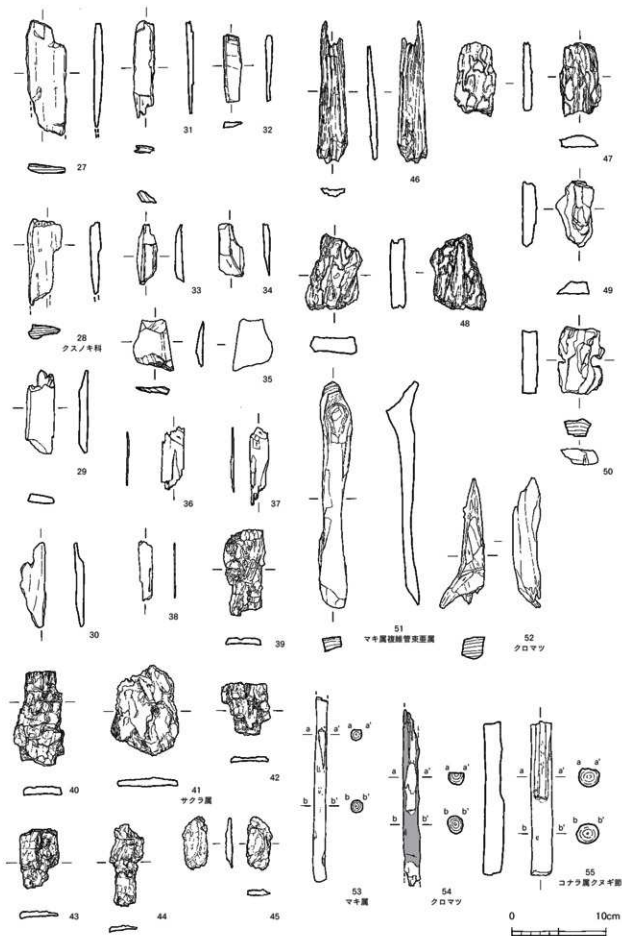
33～35は、長さ5～6cm、幅2～4cm、厚さ0.6～1.0cm程度の木屑で、上面はケズリもしくは割裂面である。各法量は、33が長さ6.2cm、幅2.0cm、厚さ1.15cm、34が長さ5.3cm、幅2.55cm、厚さ0.6cm、35が長さ5.4cm、幅4.1cm、厚さ0.8cmを測る。

36～38は手斧による調整により生ずる木屑で、厚さが0.3mm以下と薄いもの。上面はケズリで、割れ面を残すものはない。各法量は、36が長さ6.0cm、幅2.3cm、厚さ0.25cm、37が長さ8.3cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、38が長さ6.2cm、幅1.4cm、厚さ0.1cmを測る。

39～50は樹皮。39～46が厚さ0.6～1.0mmの薄い樹皮、47～50が厚さ1.3～1.8mmの厚い樹皮である。各法量は、39が長さ9.0cm、幅4.4cm、厚さ0.7cm、40が長さ10.0cm、幅5.5cm、厚さ0.8cm、41が長さ9.5cm、幅7.0cm、厚さ1.03cm、42が長さ5.5cm、幅5.0cm、厚さ0.6cm、43が長さ6.0cm、幅4.0cm、厚さ0.7cm、44が長さ8.8cm、幅3.5cm、厚さ0.7cm、45が長さ5.5cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm、46が長さ15.0cm、幅3.2cm、厚さ1.02cm、47が長さ7.7cm、幅4.3cm、厚さ1.4cm、48が長さ8.0cm、幅



第68図 3号土坑出土遺物実測図⑤(1/4)

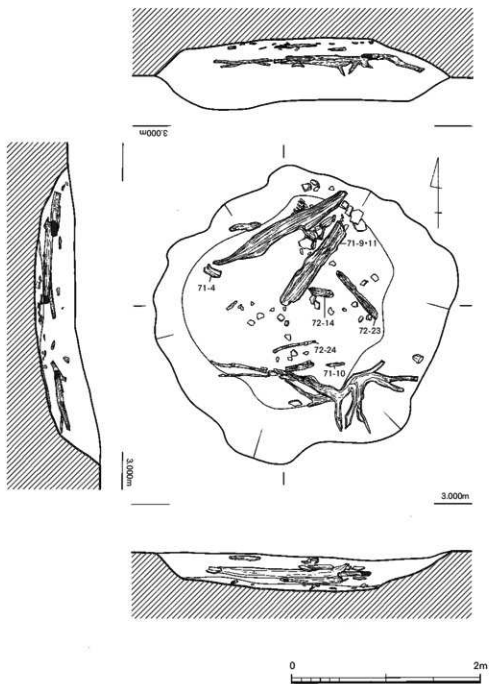


第69図 3号土坑出土遺物実測図⑥(1/4)

5.5cm、厚さ1.8cm、49が長さ6.9cm、幅3.6cm、厚さ1.3cm、50が長さ6.8cm、幅4.5cm、厚さ1.8cmを測る。51の木屑は枝打ちしたフシをもつ樹皮で、下面は割裂している。樹皮をもつ材に対して、鉄製工具によるフリウチで、樹皮を剥がしたものである。法量は長さ23.7cm、幅3.2cm、厚さ2.1cmを測る。52は調整により生じた木屑の上面を削り使用したもの。上端に焼痕がある。長さ13.6cm、幅4.75cm。53～55は樹枝で、外面のケズリは、枝打ちの際に生じたものであろう。53、55は下小口面が切断、上小口面が折れである。

4号土坑（第70図）

調査区南側で検出された不整形土坑で、断面は台形状を呈する。長軸3.13m、短軸3.12m、深



第70図 4号土坑平面断面実測図(1/40)

さ0.35mを測り、3号土坑よりも浅いが、土坑底面の標高は同じで、湧水する。土坑内の土器は破片が多く、流れ込みの状況を呈しており、弥生時代後期前半を中心に後期中頃～後半の土器も含まれている。石器は石包丁の未成品が、土坑内北西側から出土し、土器と同じく流れ込みである。木器は、南北に自然木が出土しており、他の土坑と比べてその多さが目立つ。土坑内からは、半裁材のほかに、木屑や樹枝が多く出土している。残念ながら木製品もしくはその未成品の出土はないが、3号土坑と同じ木器製作が行われた一連の土坑と考えられる。

出土遺物（第71、72図）

【土器】

1は、袋状口縁壺の口縁～頸部にかけての破片である。内外面共に丹塗り磨研である。2は短頸壺で、口縁は、くの字化する。内外面共に横方向のミガキ調整である。3も短頸壺で、口縁に円孔が2か所ある。口縁は逆L字の名残を残し、外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。4はレンズ底の甕で、外面は棒状工具によるナデ調整。5は、くの字口縁をもつ甕で、外面にススが残る。調整は縦方向の刷毛目調整で、内面は板ナデである。6は、短いくの字口縁で、摩滅が著しく調整不明瞭。

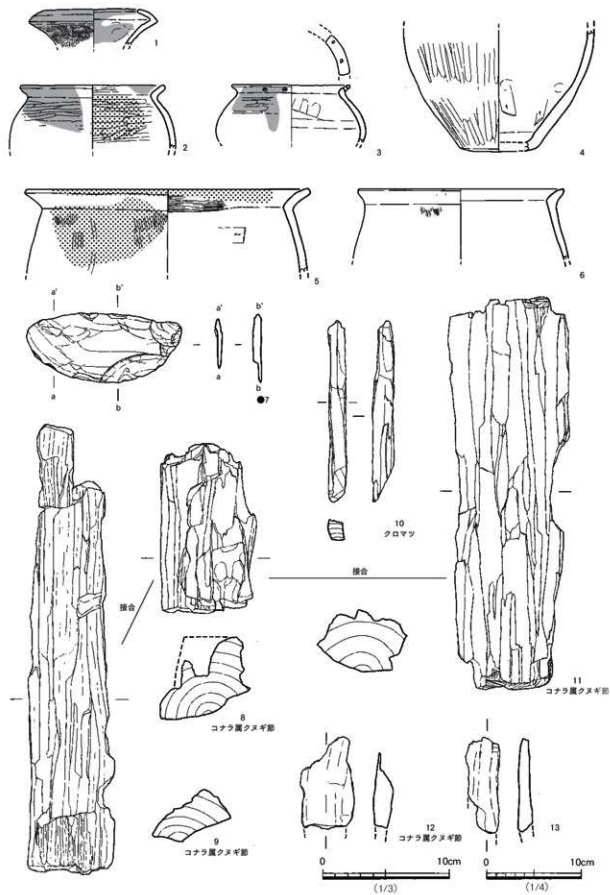
【石器】

7は、片岩製の石包丁未成品である。裏面は平坦で主要剥離面とみられ、表裏ともに打裂時の加工痕が残る。平面形態は上下側縁ともに外湾する杏仁形を呈し、剥離整形段階で廃棄されている。著しい風化により器面は粗い。全長12.15cm、幅は3.38cm、厚さ0.75cm、重さ68.06g。

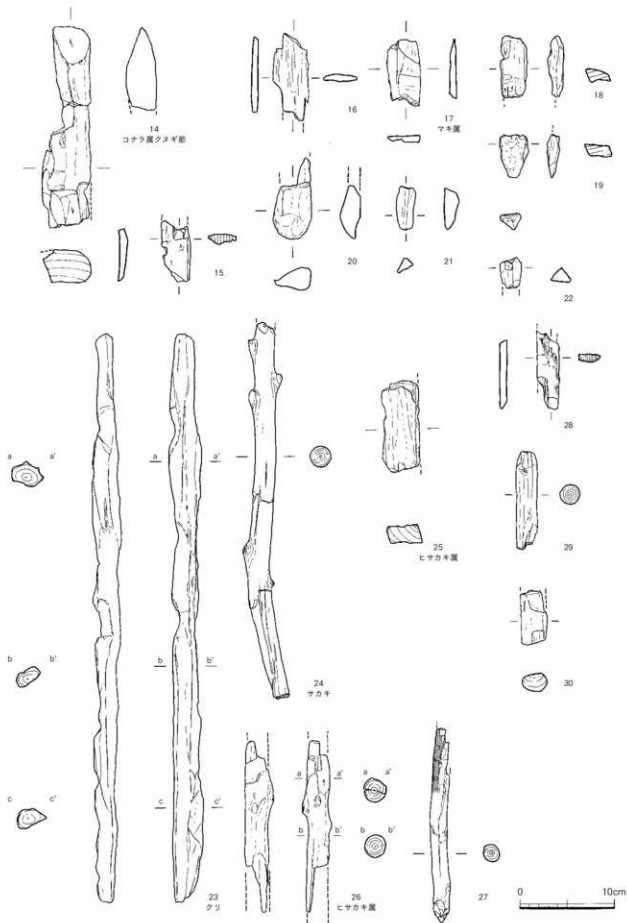
【木器】

8・9・11は、同じクヌギ材であり、接合したため、同一部材となった。8は半裁材で、梯子のように見えるが、右側面は割れ面であり、上面は風化による剥離により段ができていただけであり、半裁材と判断した。長さ18.0cm、幅10.0cm、厚さ8.7cmを測る。上小口面は風化による折れである。9は、長さ48.5cm、幅8.9cm、厚さ5.5cmの半裁材で、下面は割裂面、上面は樹皮を剥いだ面が残る、上面の一部は、風化による剥離が著しい。10は、全面が割裂面で、先端を斜めに加工する。上部は炭化しており、棒状木製品である。11は半裁材で、長さ41.4cm、幅12.6cm、厚さ6.5cmを測る。12は、外皮を削る際に生ずる木屑で、上位が打ち込み面と考えられ、膨らむ部分が割れ、下小口面も折れである。打ち込みから割る形で加工していることが分かる。13は木屑で、下小口面が折れ、上面が外皮、下面が割裂面である。14は端材で、上部は風化により折れている。下小口面は斜めに切断されており、表面の調整は少ない。法量は長さ14.0cm、幅7.7cm、厚さ3.5cmを測る。

15～28は木屑である。15は長さ6.5cm、幅3.0cm、厚さ1.1cmを測る木屑で、上面はケズリ、下面は割裂面である。16は上小口面が斜めに加工されており、材の端を削った際に生じた木屑である。下小口面は折れである。法量は長さ9.2cm、幅3.7cm、厚さ0.8cmを測る。17は上面を鉄製工具で削り、下小口面が折れとなる木屑。法量は長さ7.1cm、幅3.4cm、厚さ0.8cmを測る。18の木屑は、上面をケズリ、下面は割裂面を残す。法量は長さ6.45cm、幅2.8cm、厚さ1.5cmを測る。19は平面が台形状、断面が平行四辺形となる木屑で、上面はケズリが見られる。法量は長さ4.65cm、幅2.9cm、厚さ1.45cmを測る。20は厚みのある木屑で、元材の丸みがある。法量は長さ8.5cm、幅4.0cm、厚さ2.4cmを測る。21は断面が三角形の木屑で、角を落としたもの。法量は長さ4.6cm、幅2.0cm、



第71図 4号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)



第72図 4号土坑出土遺物実測図②(1/4)

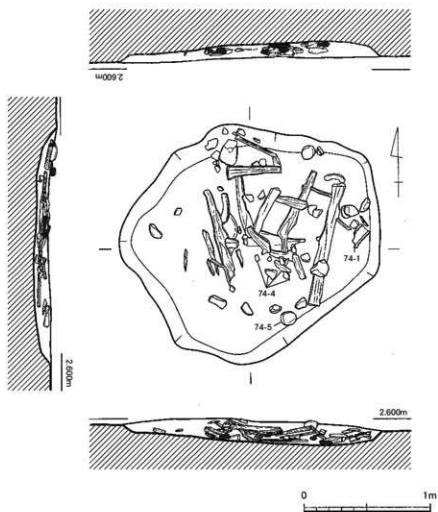
厚さ1.6cmを測る。22も断面が三角形となる木屑で、21と同様である。23は樹枝で、長さ60.0cm、幅3.4cm、厚さ3.0cmを測る。全体的に風化により木が痩せているので、調整が明瞭ではない。24は樹枝で、風化により剥落している箇所がある。25～30は樹枝で、枝打ちの際の切断痕跡が小口に残る。28は樹枝を利用した杭で、先端部は炭化する。

5号土坑（第73図）

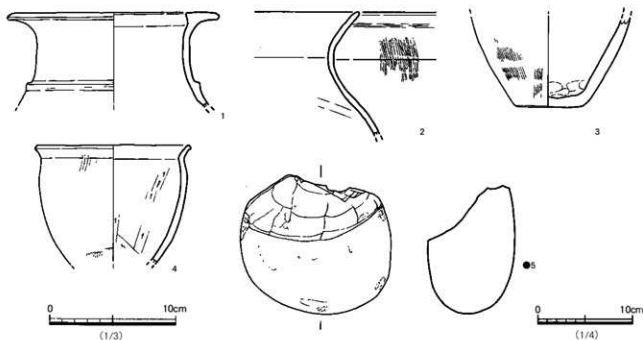
調査区南側で検出された不整形土坑で、断面は台形状を呈する。長軸2.05m、短軸1.87m、深さ0.11mを測り、4号土坑よりもさらに浅くなる。自然地形が北に向かって上がっているため、削平が著しいものになっており、このことにより、自然木を含めた多くの木器が、検出時点で炭化し、取り上げが困難なほどに劣化していた。当土坑は、出土位置から一連の木器製作に係る土坑と推測されるが、木器の保存状態が良くなかったことは残念である。

出土遺物（第74図）

1は鋤先口縁壺で、口縁～頸部まで残存する。水平な鋤先口縁に、頸部に1条の三角突帯を1条付す。摩滅が著しく、流れ込みと考える。2は壺で、如意形で器厚が薄い。外面にミガキの痕跡がわずかに確認できるが、全体的に風化が著しい。3は甕の底部片で、平底である。外面は縦方



第73図 5号土坑平面実測図(1/30)



第74図 5号土坑出土遺物実測図(1/4、●は1/3)

向の刷毛目調整の後に横ナデである。4は鉢で、くの字口縁をもつ。全体的に風化が著しいが、わずかに刷毛目調整が残る。

【石器】

5は花崗岩製の敲石で、上端が潰れ、下・右・左側面に敲打痕が残る。

6号土坑（第75図）

調査区中央で検出された楕円の不整形土坑で、断面は逆台形状を呈する。長軸2.28m、短軸1.94m、深さ0.40mを測り、木器や土器は、土坑内西側に集中しており、床面から横杓子と桜皮が出土した。このほか、板材や端材が出土しており、木器製作に関わる土坑である。土層は細かな砂層の自然堆積であり、花粉分析の結果を末尾に記載している。土器は甕・短頸壺・鉢が出土し、弥生時代後期前半と考えられる。

出土遺物（第76、77図）

【土器】

1は口縁が大きく開く甕で、外面は縦方向の刷毛目調整である。2は短頸壺で、鋤先口縁が内傾化している。外面は粗い刷毛目調整で、内面は刷毛目調整の後、ナデ調整である。3は、くの字口縁をもつ短頸壺で、外面は斜方向の刷毛目調整。4は甕の底部片で、薄い底部である。外面は縦方向の刷毛目調整。内面は棒状工具によるナデ調整である。5は鉢で、胴下位を欠損する。口縁は、くの字に開き、外面にはわずかに刷毛目調整が残る。6は素口縁の鉢で、底部を欠損する。

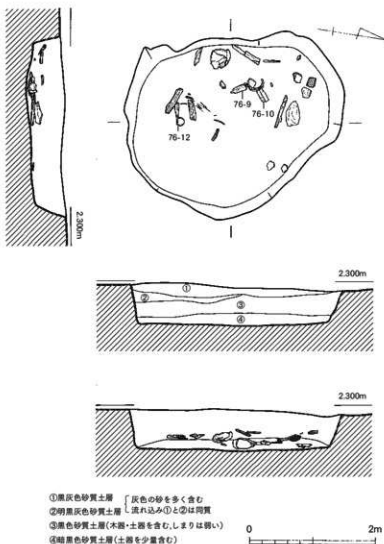
【石器】

7は泥岩製の砥石である。砥面は表・右側面の2面で、表面が平滑でよく使用されている。残存長7.01cm、幅3.67cm、残存厚3.73cm、重さ115.34gを測る。8は砂岩製の砥石で、砥面は1面で磨滅

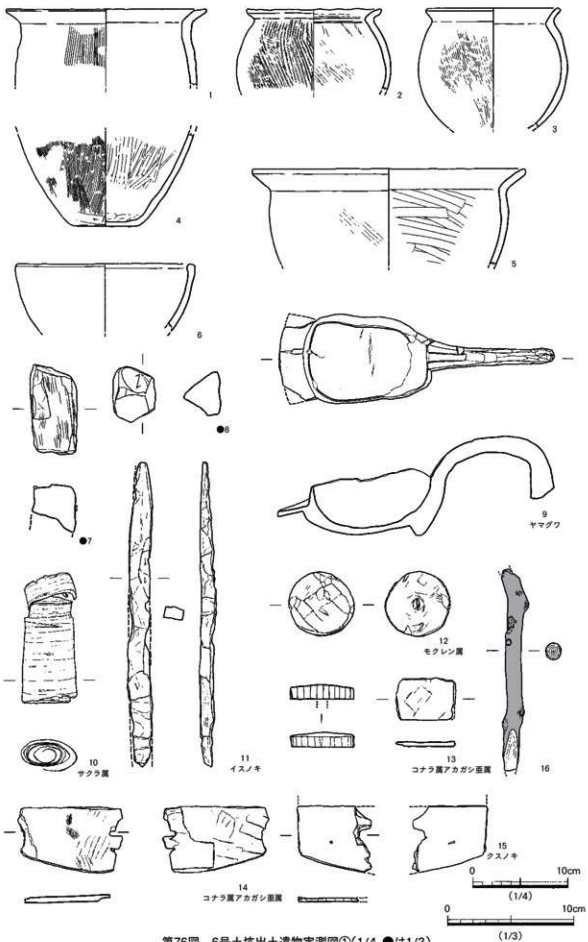
が弱く使用頻度が低い。長さ4.26cm、幅3.32cm、厚さ3.45cm、重さ47.82gを測る。

【木器】

9は横杓子で、一木から削り出したものである。法量は長さ28.9cm、幅9.4cmを測る。楕円の椀形を呈する杓部と杓部先端に鱗部を作る。鱗部は、ばち形に開き、先端は山形を呈する。柄は大きく弧を描き、柄頭を斜めに切り落とす。柄は杓部に近いところで、台形状に削り出し、他は幅が狭い横長のケズリが並ぶ。鱗付き横杓子の類例としては、比恵遺跡群第58次調査6号井戸出土例があり、こちらは杓部の平面が円形で、弥生時代後期後半である。10は樹皮で、樹種はサクラ属である。長さ13.7cm、幅5.9cm、厚さ3.4cmを測り、桜の原木から、樹皮を剥ぎ巻き取った状態で、断面では6重となっている。上部は幅2.2cmの樹皮が、本体から外れてかかっており、樹皮使用時の幅であることから、樹皮利用を考える上で重要な資料である。11は棒状木製品であるが、先端を斜めに削りヘラ状となる。断面四角形に全体を削るが、風化による剥離も多い。法量は長



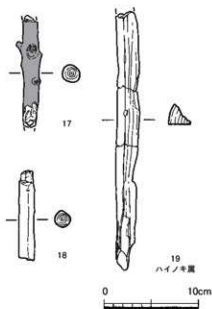
第75図 6号土坑平面断面実測図(1/30)



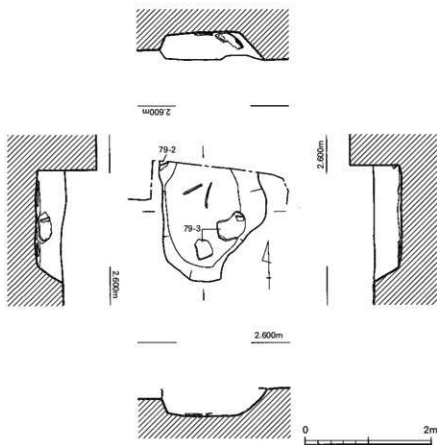
第76図 6号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)

さ27.1cm、幅2.3cm、厚さ1.5cmを測る。12は円板で、直径6.8cm、厚さ1.6cmを測る。下面中央には、本来柄があった痕跡があり、用途は不明である。上面はケズリ、側面は縦方向のケズリで作ります。13・14・15は、当初、同一のものと考えていたが、13・14がアカガシ、15がクスノキで別材である。全体に薄い作りで、いずれも上・下面共に丁寧なケズリ。下部が湾曲する形で、刃を作り出さないことから、蓋であろうか。16は杭で、樹枝の先端を斜めに加工して製作する。法量は長さ21.1cm、直径2.1cmを測る。

17は樹枝の先端を斜めに加工しているが、先端が欠損しているほか、フシが残る状態であるため、杭として使用されたかは定かではない。法量は長さ11.6cm、直径1.8cmを測る。18は樹枝で、下小口面は切断、上小口面は切断途中で折っている。法量は長さ9.4cm、直径1.7cmを測る。19は樹枝を利用して断面三角形に加工している。長さ27.2cm、幅2.4cm、厚さ2.1cmを測る。下先端部を斜めに加工する。



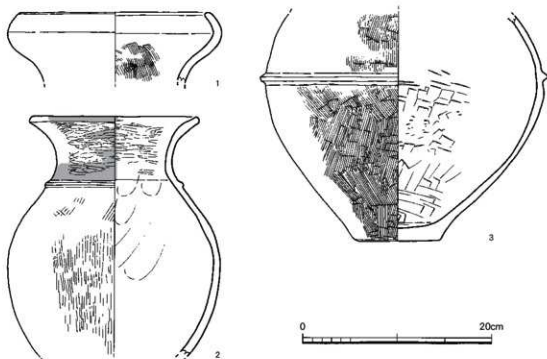
第77図 6号土坑出土遺物実測図② (1/4)



第78図 7号土坑平断面実測図(1/30)

7号土坑（第78図）

調査区中央からやや東よりで検出された土坑で、平面が不整形形で、断面は逆台形状を呈する。調査区外へと続いたため、全体は不明であるが、現状で、長軸0.92+αm、短軸0.97m、深さ0.23mを測る。6号土坑に近いが、自然木のみ出土であった。土器は、底面で壺が出土しており、弥生時代後期初頭～前半と考えられる。

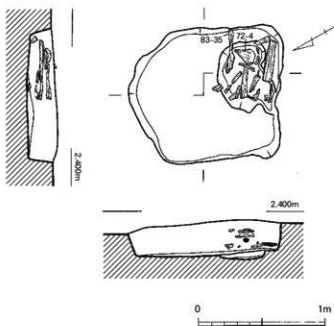


第79図 7号土坑出土遺物実測図(1/4)

出土遺物（第79図）

【土器】

1は袋状口縁壺の口縁部片で、内面頸部に縦方向の刷毛目調整が残る。2は素口縁壺で、底部を欠損し、頸部と胴部との境に1条の突帯を巡らす。外面は、口縁～頸部の部分のみ丹塗りで、横ミガキを施す。胴部は縦方向の刷毛目調整、頸部内面は横ミガキ調整。3は壺で、胴上位が欠損し、平底である。胴上位に胴部最大径があり、そこに1条の突帯を巡らす。



第80図 8号土坑断面実測図(1/30)

8号土坑（第80図）

調査区中央で検出された土坑で、平面

が不整形な正方形であり、北東側が膨らむ。断面は逆台形で、長軸1.18m、短軸1.06m、深さ0.30mである。南西角が、円形に一段下がり、出土遺物は、その上層に集中しているが、検出段階や掘削段階で、掘り込み等が確認できなかったため、8号土坑に伴うものと判断した。

湧水が多く、横杓子の未成品のほか、木屑や樹枝が大量に出土したため、木器製作に関わる土坑と考えられる。時期は弥生時代後期前半か。

出土遺物（第81～83図）

【土器】

1は甕の口縁部片で、くの字形を呈する。外面に縦方向の刷毛目調整が残る。2は甕の底部片で、底部からの立ち上がりが外湾気味である。外面にススが付着し、内面底部にコゲと考えられる炭化付着物がある。

【石器】

3は花崗岩製の磨石で、下端部が使用される。長さ11.6cm、幅8.74cm、厚さ3.81cm、重さ532.49gを測る。

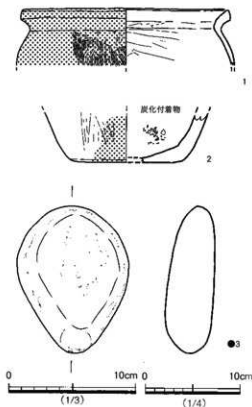
【木器】

4は横杓子もしくは容器の未成品で、風化による剥離が著しく、平面は、横幅のある楕円形であろう。法量は長さ19.7cm、幅13.3cm、厚さ5.7cmで、内面に一部削り抜きの痕跡がある。5は、柁目材で、左側面に樹皮が残る。柁目材の上面加工、下小口の施溝切断、上小口面調整、右側面切断、調整後に分割している。残材とするかは判断が難しい。6は、細長い長方形の材で、上面はフシが残るが、全体的に加工や調整で整えられており、下小口面は切断、上小口面は折れてある。長さ10.1cm、幅2.1cm、厚さ1.1cmを測る。

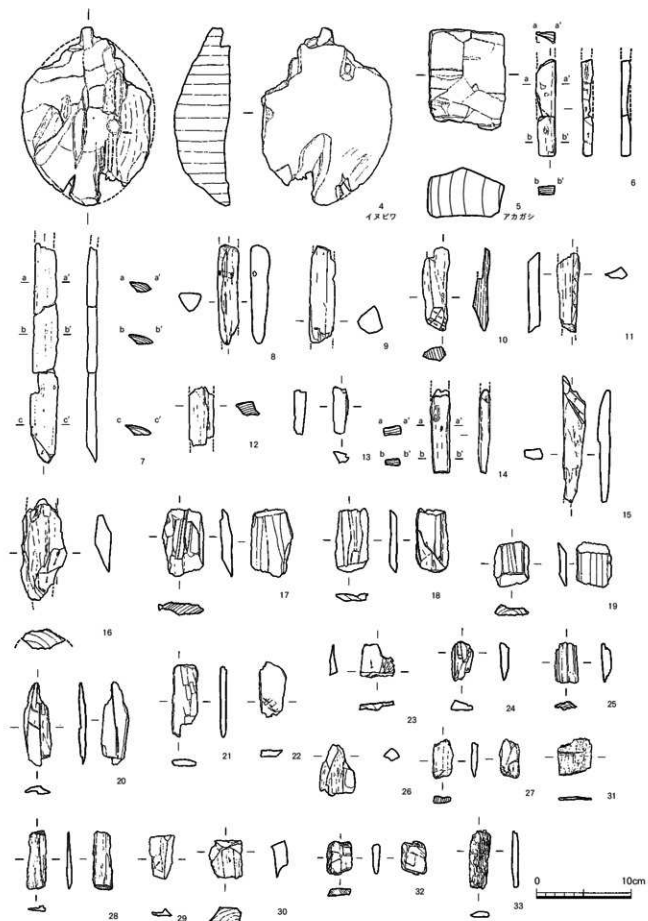
7～31は木屑である。7の木屑は、断面が三角形を呈する。上面が外皮であり、不要部分を除去したもの。長さ23.1cm、幅2.7cm、厚さ1.1cmを測る。8は断面三角形の木屑で、長さ10.4cm、幅2.0cm、厚さ2.0cmを測る。9も8と同様の木屑で、両小口共に折れである。長さ10.2cm、幅2.5cm、厚さ2.9cm。10の木屑も8・9と同様。下部の切断痕は元材にあったものと考えられる。長さ8.7cm、幅1.27cm、厚さ1.5cm。11は断面三角形となる木屑で、右側面は元材のケズリがよく残る。長さ8.3cm、幅2.3cm、厚さ1.2cmを測る。

12は断面が平行四辺形状となる木屑で、外皮部分が含まれる。長さ6.1cm、幅2.1cm、厚さ1.5cmである。13も12と同様の外皮を含む木屑で、長さ4.8cm、幅1.5cm、厚さ1.2cmを測る。14の木屑は、上面が外皮部分で、フシを残す。長さ10.8cm、幅2.1cm、厚さ1.2cmを測る。15は上端に加工痕が見られる木屑で、断面が四角形である。16の木屑は、上面右側にケズリの痕跡があり、左側は割裂面を残す。厚みがあり、柁目木屑。長さ8.8cm、幅4.6cm、厚さ2.1cm。

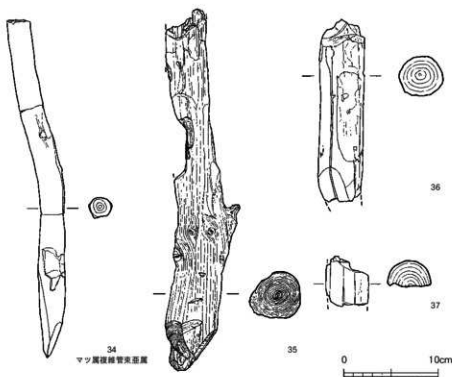
17～19は幅広い長方形となる木屑で、上面はケズリであるので、加工が進んだ段階の木屑。縦断面が平行四辺形になる特徴がある。17は上面ケズリ、下面が割裂面。長さ7.3cm、幅4.4cm、



第81図 8号土坑出土遺物実測図①(1/4、●は1/3)



第82図 8号土坑出土遺物実測図②(1/4)



第83図 8号土坑出土遺物実測図③(1/4)

厚さ1.4cmを測る。18は上面に粗い削りがあり、下面は割裂面を残す。長さ6.8cm、幅3.4cm、厚さ0.8cmを測る。19は16～18と比べて一回り小さく、板目木屑。長さ4.8cm、幅3.7cm、厚さ1.1cmを測る。

20～22は縦長の木屑で、厚さが薄い。20は上面が細かなケズリ、下面は割れ。長さ8.6cm、幅2.7cm、厚さ0.8cm。21は20よりも薄い、上面は割裂面を残す。長さ7.7cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmを測る。22は長方形に近い木屑で、上面は細かなケズリがある。長さ5.9cm、幅2.7cm、厚さ0.7cm。23は上面ケズリで、長さ3.4cm、幅3.5cm、厚さ0.7cm。

24～26は、長さ4～6cm、幅2～4cm程度の小さな木屑で、縦断面が三角形となることが多い。24は、上面が細かなケズリ、下面は割裂面を残す。長さ4.1cm、幅2.3cm、厚さ1.0cmを測る。25は上面がケズリ、長さ4.3cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm。26は上面のケズリが粗く、加工初期段階の木屑の可能性がある。長さ5.3cm、幅3.8cm、厚さ1.3cm。27は厚さのある木屑で、一部に樹皮面が残る。長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ1.7cm。28は上面だけではなく、両側面にケズリがある木屑。また、下端は斜めの切断痕がある。法量は長さ6.2cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。29は木屑で、上面に加工痕がある。長さ4.6cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測る。30は上面にケズリのある木屑で、下面は割裂面である。下小口面が折れてあり、打ち込みは上側となる。長さ4.0cm、幅3.5cm、厚さ0.26cmを測る。31は上面及び側面にケズリがあり、下面は割裂面である。長さ3.7cm、幅3.5cm、厚さ0.26cmを測る。

32～33は樹皮が剥がれたもの。32は長さ3.5cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmの樹皮。33は、長さ6.7cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmの樹皮。

34～36は杭。34は樹枝の先端を斜めに加工して杭としている。上小口面は折れで、長さ35.7cm、直径2.5cm。35は太い樹枝の先端を斜めに加工して杭とする。長さ38.1cm、直径5.5cm。36は先端を欠損する杭で、上小口面は4回ほど刃を入れたのちに折り取っている。長さ19.1cm、直径4.7cm。37は端材。樹枝の表面を削り、半裁、必要な部分を切り取った後に残った材である。長さ5.3cm、幅4.5cm、厚さ3.2cmを測る。

9号土坑（第84図）

調査区東端で検出された土坑で、調査区外へ続くため、全体は不明である。テラスのある2段掘りとなる。断面は逆台形で、長軸1.19m、短軸1.62m、深さ0.15mを測る。出土遺物は多くはないが、壺、甕のほか、棒状の木製品が出土する。弥生時代後期の可能性が高い。

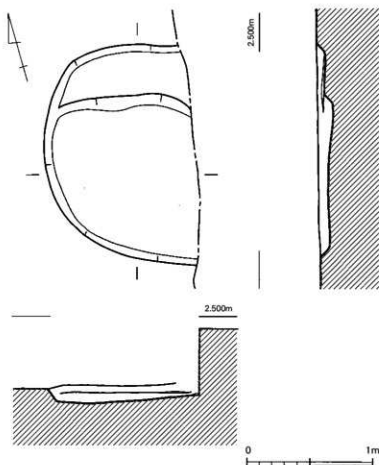
出土遺物（第85図）

【土器】

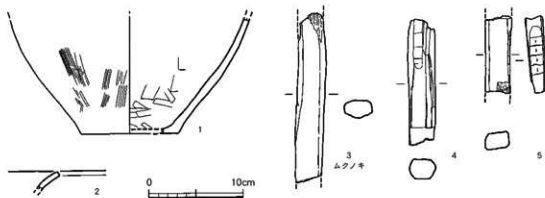
1は壺の底部片で、平底を呈する。外面に縦方向の刷毛目調整、内面は板ナデ調整である。2は、甕の口縁部片で、ナデ調整である。

【木器】

3～5は樹枝を利用した棒状木製品で、接合しない。樹種はムクノキ。ケズリや割れなどの



第84図 9号土坑平面断面実測図(1/30)



第85図 9号土坑出土遺物実測図(1/4)

加工痕跡がある。

3は上面をケズリ、下面は割れ面を残す。下小口面は折れである。長さ17.8cm、幅3.0cm、厚さ3.0cmを測る。4の上面は、ケズリの後、割れで、下面はケズリ、両小口共に折れである。長さ13.2cm、幅2.8cm、厚さ2.0cmを測る。5は上面を細かくケズリ、下面は割れ面を残す両小口共に折れで、長さ8.1cm、幅2.6cm、厚さ1.6cmを測る。

(4) 小穴・柱穴・その他土坑 (第4、5、第86～98図)

ここで報告する遺構は、性格が明らかでないものを一括して、P-○として報告する。柱穴は西側砂丘上を中心に多く点在するが、調査範囲の影響で、柱穴と認識できても、掘立柱建物として並ばないものや土坑と称すべき大きさの遺構も含めている。

P-7

調査区北側で検出された柱穴で、平面は不整な円形、断面は逆台形。東西0.63m、南北0.62m、深さ0.21mを測る。

出土遺物

1は甕の口縁部片で、強い横ナデで作られる。弥生時代後期であろう。

P-9

調査区北側で検出された円形ピットで、断面は緩やかな逆台形を呈する。東西0.60m、南北0.64m、深さ0.18mを測る。

出土遺物

2は高環の口縁部片で、内外ともに横ナデ調整が主体で、杯部外面は横方向の刷毛目調整である。弥生時代後期後半。

P-10

調査区北側の調査区端で検出された楕円形ピット。断面は、深さのある緩やかな逆台形を呈する。東西0.74m、南北0.46m、深さ0.25mを測る。

出土遺物

3は、くの字状口縁甕の口縁部片で、内外共に刷毛目調整である。弥生時代後期。

P-12

調査区北側に位置する楕円形のピットで、現P-5に切られる。東西0.34m、南北0.50m、深さ0.12mを測る。出土土器は1点のみである。

出土遺物

4は、甕の台形状突帯部分である。内面は剥離を起こし、突帯の接合痕跡が明瞭である。弥生時代後期。

P-14

調査区北側に位置する土坑で、P-13に切られ、P-15を切っている。断面形が緩やかなU字形で、東西0.77m、南北0.93m、深さ0.22mを測る。

出土遺物

5は、甕の口縁部片で、くの字状口縁である。口縁内面の調整は、横方向の刷毛目調整である。6は、甕の底部付近の破片で、縦方向の刷毛目を施す。

P-15

調査区北側で検出したP-14に切られるピット。P-14よりも浅く、断面は逆台形である。東西0.60m、南北0.47m、深さ0.08mを測る。

出土遺物

7は高環の脚部片で、脚端部を横ナデできれいに仕上げる。全体的にナデ調整である。

P-16

調査区北側で検出した円形ピット、深さが浅く残りがよくない。東西0.39m、南北0.43m、深さ0.05mを測る。

出土遺物

8は高環の脚部片で、内外共に粗い刷毛目調整を施す。弥生時代後期後半と考えられる。

P-18

調査区北側に位置する土坑で、現代ピットやP-19に切られる。平面は、横長の不整形ピットで、断面は逆台形を呈する。東西0.71m、南北0.72m、深さ0.18mを測る。

出土遺物

9は甕の底部片で、外湾気味の立ち上がりである。弥生時代後期後半に近い時期か。

P-21

断面U字形を呈し、横長の不整形ピットで、調査区北側に位置する。東西0.42m、南北0.32m、深さ0.08mを測る。

出土遺物

10は壺の底部片で、底部を強調するように内湾する。内外共に刷毛目調整で、外面は丹塗りである。

P-23

調査区北側で検出した土坑で、断面逆台形で深さがある。出土土器は少なく、図示できたのは1点のみである。東西0.77m、南北0.77m、深さ0.26mを測る。弥生時代後期後半～終末。

出土遺物

11は、くの字状口縁が直線的に立ち上がり、内外面は粗い刷毛目調整。12は壺の胴上部片で、外面刷毛目調整。

P-25

調査区北側で検出した円形の柱穴で、断面逆台形で深さがある。出土土器は少なく、図示できたのは1点のみである。東西0.53m、南北0.55m、深さ0.27mを測る。弥生時代後期後半～終末。

出土遺物

13は、器台の脚部片で、内外面共に刷毛目調整。脚部はナデで仕上げる。

P-26

調査区北側で検出した不整形土坑で、削平を受けて浅くなっている。東西0.67m、南北0.64m、深さ0.11mを測る。

出土遺物

14は、高環の脚部片で、内外面丹塗りで、外面はミガキを施す。

P-27

調査区北側で検出した不整形土坑で、断面逆台形である。東西0.69m、南北0.86m、深さ0.21mを測る。出土土器のうち、図示に耐えられたのは2点のみである。

出土遺物

15は、小形甕で胴下位を欠損する。外面調整は、風化により不明瞭であるが、内面は板状工具によるナデである。16は小形甕の底部片。外面にススが附着する。

P-29

調査区北側に位置する不整形土坑で、調査区外へと続く。土坑はテラスのある2段掘りとなり、東西1.42m、南北0.64m、深さ0.21mを測る。弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物

17は甕で、くの字状口縁～胴上位まで残存する。外面は刷毛目調整、内面ナデ調整。弥生時代後期残半。18は高環の脚部片で、内外面共に刷毛目調整。弥生時代後期後半。

P-32

調査区北側に位置する楕円形の土坑で、断面逆台形を呈する。東西0.87m、南北1.24m、深さ0.31mを測る。土坑内からは、器台が出土しており、弥生時代後期後半～終末に属する。

出土遺物

19は器台の脚部片で、外面に暗赤褐色の丹が附着する。外面は縦・斜方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整である。

P-34

調査区北側に位置する隅丸方形の土坑で、断面は逆台形を呈し、東西0.73m、南北0.76m、深さ0.25mを測る。土坑内から出土した土器は少ない。

出土遺物

20は甕の口縁部片で、くの字状口縁である。外面にススが附着していることから、煮炊きに使用されている。

P-35

調査区北側に位置する柱穴で、調査区外へと続いている。断面は逆台形を呈し、東西0.54m、南北0.55m、深さ0.13mを測る。弥生時代後期前半に属する。

出土遺物

21は甕の底部片で、底部からの立ち上がりは外湾気味である。外面は丹塗りである。

P-37

調査区北側に位置する柱穴である。断面は逆台形を呈し、東西0.44m、南北0.46m、深さ0.18mを測る。

出土遺物

22は甕の口縁部片で、全体的にナデ調整である。口縁端部をナデで平坦に仕上げる。

P-40

調査区北側に位置する不整形土坑で、隅丸三角形に近い形状である。深さは比較的浅く、東西0.71m、南北0.84m、深さ0.07mを測る。

出土遺物

23は器台の脚部で、外面に強い二次焼成を強く受け、赤橙色となっている。外面は板ナデ調整、

内面はナデ調整である。

P-43

調査区北側で検出された円形に近い不整形土坑である。深さは浅く、後世の削平を受けている。断面は逆台形で、東西0.97m、南北0.96m、深さ0.13mを測る。

出土遺物

24は器台で、全体を強いナデで仕上げることから、器台の脚部と判断した。

P-44

調査区北側で検出された不整形土坑で、断面はU字形を呈し、深さがある。東西0.57m、南北0.71m、深さ0.17mを測る。

出土遺物

25は甕の胴部片で、外面は縦方向の刷毛目調整。外面のスの付着が濃く、煮炊きに使用されたもの。

P-45

調査区北側で検出された円形土坑で、断面は逆台形を呈する。東西0.77m、南北0.84m、深さ0.19mを測る。出土遺物は少ないが、2点を図示している。弥生時代後期初頭に属する。

出土遺物

26は、甕の口縁部片で、丸みのある「くの字状」口縁である。内外面共にナデ調整で、外面はスが付着する。27は甕の底部片で、外面底部に指頭圧痕とその際に付いた爪痕がある。

P-47

P-51と切りあい関係にある横長の不整形土坑で、調査区北側で検出した。削平を受けているせいか、深さが0.07mと浅い。東西0.85m、南北1.61mを測る。

出土遺物

28は甕の底部片で、平底であるが、作りは雑である。外面は横ナデ調整、内面底部はナデ調整。

P-53

調査区北側に位置する柱穴で、後世の削平を受けており、比較的浅い。東西0.38m、南北0.42m、深さ0.75mを測る。1号溝を切っているが、1号溝と時期差はあまりない。

出土遺物

29は中形甕の口縁部片で、くの字状口縁である。口縁下に1条の三角突帯を巡らす。外面に部分的なスの付着が見られる。

P-54

調査区北側に位置する土坑で、床面が東に向かって傾斜する。P-55と切りあい関係にあり、P-54がP-55を切る形である。東西0.67m、南北0.59m、深さ0.20mを測り、土坑内からは、白磁片と土師皿片が出土しており、中世に属するが、細片のため、細かな時期比定が難しい。

出土遺物

30は白磁椀の底部付近の破片。内外面共に無文で、乳白色である。31は土師皿片で、高台部分である。高台が欠損している上、風化により、底面の切り離しも不明である。

P-56

調査区北側に位置する土坑で、平面は隅丸方形を呈している。P-57ほか現代の小穴にも切られ

ている。東西1.19m、南北1.35m、深さ0.12mを測り、土器の細片が多く出土したが、流れ込みであり、土器片の摩耗が著しい。図示に耐えうるのは2点のみである。

出土遺物

32は鉢で、底部を欠損する。全体に摩耗が進んでおり、調整不明瞭。33は甕の口縁部片で、外面ススが付着、内面は横方向の刷毛目調整である。

P-60

調査区北側に位置する土坑で、平面は円形を呈している。調査区外へと続くため、全体は不明であるが、現状で、東西0.30m、南北0.56m、深さ0.06mを測る。

出土遺物

34は壺の胴部片で、外面に縦方向の刷毛目調整を施す。

P-66

調査区北側に位置する土坑で、平面は円形を呈している。土坑としては大きく、東西1.95m、南北1.8m、深さ0.34mを測る。P-56と同じく、流れ込みと見られる土器の細片が多く出土し、土器片の摩耗が著しい。底面は湧水層に達しているため、常に水が湧いている状況であったが、木器は出土していない。出土遺物より、時期は戦国期である。

出土遺物

35は鉢で、底部を欠損する。36は播鉢片で、内面に8条1単位の条線を施す。37は土鍋で、外面はススで覆われている。

P-69

調査区北側に位置する土坑で、平面は不整形である。P-66と同じく土坑としては大きい。流れ込みと見られる土器の出土は少ない。東西1.38m、南北1.39m、深さ0.22mを測る。断面は東側が緩やかに下がり、湧水する。

出土遺物

38は甕の口縁部片で、外面にススの付着がある。外面頸部に縦方向の刷毛目を残す。

P-70

調査区北側に位置する土坑で、P-71を切る形で検出された。平面は楕円形を呈し、東西0.63m、南北0.60m、深さ0.02mを測る。断面は逆台形である。時期は弥生時代中期末。

出土遺物

39は、鋤先口縁がくの字化する直前の型式で、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。40は壺もしくは甕の底部片で、外面は刷毛目の後ナデ調整である。

P-77

調査区北側に位置する円形土坑で、断面逆台形を呈する。東西0.58m、南北0.65m、深さ0.12mを測る。時期は、弥生時代後期後半である。

出土遺物

41は甕の胴部片で、底部付近の破片であるが、43とは接合しない。内外面共に縦方向の刷毛目調整である。42は甕の底部片で、レンズ底である。外面は縦方向の刷毛目調整であるが、不明瞭である。

P-78

調査区北側で検出した円形土坑で、断面は逆台形となる。東西0.78m、南北0.85m、深さ0.18mを測り、出土した土器は少ない。

出土遺物

43は甕の底部片で、平底を呈する。底部近くは、縦方向の刷毛目を横ナデで消している。44は小形鉢で、口径7.8cm、器高5.7cm、底径2.1cmを測る。内外面共にナデで成形している。

P-80

調査区北側で検出された土坑で、調査区外へ続く。現状で、東西0.23m、南北0.62m、深さ0.06mを測る。時期は弥生時代後期前半。

出土遺物

45は甕の口縁部片で、くの字状口縁である。外面にはススが付着する。

P-81

調査区北側で検出された柱穴で、不整形である。直径0.31m、深さ0.12mを測る。時期は弥生時代後期前半。

出土遺物

46は甕の口縁部片で、くの字状口縁である。外面は縦方向の刷毛目調整。時期は、弥生時代後期前半である。

P-82

調査区北側で検出された土坑で、横長の楕円形である。東西0.78m、南北0.75m、深さ0.12mを測る。断面は逆台形で、少量の土器と紡錘車が出土している。時期は弥生時代終末期。

出土遺物

47は器台の口縁部片で、外面に刷毛目が残り、内面はシボリ痕跡がある。48は滑石製の紡錘車未成品である。表裏両面は研磨により平滑で、側面は横研磨が施される。残存状況から穿孔時欠損し、その後左側面を磨いて半月形に再加工している。そのため、別の用途に転用した石製造物の可能性が残る。復元直径は4.2cm、残存長3.97cm、残存幅1.59cm、厚さ0.37cm、重さ4.55gを測り、IIa類（平尾2008）で弥生時代から古墳時代前期で多く認められる。

P-86

調査区北側で、P-88に切られる形で検出された土坑で、横長の楕円形である。東西0.55m、南北0.40m、深さ0.13mを測る。底面は西側に傾斜する。時期は弥生時代後期前半。

出土遺物

49は中形甕の口縁部片で、頸部には三角突帯を1条付す。外面胴部および口縁内面に刷毛目調整が残る。

P-91

調査区北側で検出された不整形土坑で、P-92を切る。東西0.68m、南北0.65m、深さ0.16mを測る。底面は西側に若干傾斜する。弥生時代後期後半～終末期の範疇か。

出土遺物

50は素口縁の鉢で、底部を欠損する。内外面共に粗い刷毛目調整であるが、内面は不明瞭。

P-92

調査区北側で検出された土坑で、P-91に切られる。東西0.49m、南北0.59m、深さ0.15mを測り、

底面は西側に若干傾斜する。弥生時代後期初頭。

出土遺物

51は袋状口縁壺の口縁部片で、袋部が開き気味である。外面～頸部内面まで丹塗りである。52は壺の底部片で、内面丹塗りである。53は椀状に近い鉢で、外面は縦方向の刷毛目調整である。

P-93

調査区北側で検出された柱穴で、柱が検出されたが、1号土坑と切り合い関係にあり、底面を掘りすぎている可能性が高い。直径0.5m、深さ0.43mを測る。時期は弥生時代後期後半である。

出土遺物

54は甕の口縁部片で、くの字状口縁であるが、直立気味である。55は甕の底部片で、レンズ底である。外面は縦方向の刷毛目調整である。

P-94

2号溝を切る形で検出された土坑で、底面が西に傾斜する。東西0.61m、南北0.51m、深さ0.17mを測る。

出土遺物

56は、くの字状口縁をもつ甕で、口縁部片である。

P-95

調査区北側で検出された土坑で、楕円気味の不整形土坑である。東西0.72m、南北0.65m、深さ0.35mを測り、深さのある土坑である。出土遺物はない。

P-97

調査区北側に位置し、P-98を切る柱穴で、直径0.40m、深さ0.11mを測る。断面は逆台形を呈する。

出土遺物

57は、くの字状口縁をもつ甕で、口縁部片である。

P-99

調査区北側に位置し、直径0.39m、深さ0.13mを測る柱穴である。断面は逆台形で、比較的浅い。

出土遺物

58は、くの字状口縁をもつ甕で、口縁部片である。弥生時代後期前半か。

P-100

調査区北側に位置し、直径0.38m、深さ0.07mを測る柱穴である。P-101と切りあい関係にあり、断面は逆台形で、比較的浅い。弥生時代後期初頭～前半。

出土遺物

59は、逆L字形に近い甕で、胴中位以下を欠損する。外面はススが濃く付着し、煮炊きの使用が想定される。

P-101

調査区北側に位置し、直径0.48m、深さ0.08mを測る柱穴である。P-100と切りあい関係にあるが、出土遺物による時期差はあまりなく、P-100が抜き取り痕の可能性がある。

出土遺物

60は、小形壺の底部片で、平底。外面は多々方向の刷毛目調整である。弥生時代後期初頭か。

P-103

調査区北側に位置し、東西0.80m、南北0.92m、深さ0.20mを測る。円形土坑で、南側が膨らむ形である。土器の出土が多く、時期は弥生時代後期後半である。

出土遺物

61は、直立気味の「くの字状」口縁をもつ甕で、内外面共に縦方向の粗い刷毛目調整を施す。胴部内面下位にコゲがある。底部はレンズ状で、弥生時代後期後半。62は、くの字状口縁をもつ口縁部片で、外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整を施す。63は中形甕で口縁下に1条の三角突帯を付す。口縁内面は、横方向の刷毛目調整である。64は鉢で、底部を欠損する。素口縁で、外面は刷毛目調整、内面は板ナデで仕上げる。

P-105

調査区北側に位置し、平面は隅丸方形の土坑である。東西0.65m、南北0.62m、深さ0.17mを測る。出土土器に時期幅があるが、弥生時代後期前半と考えられる。

出土遺物

65は、鋤先口縁甕の口縁部片で、内杯面共にナデ調整。66は、短頸壺で胴下位を欠損する。外面は刷毛目調整。67は、くの字状口縁甕の口縁部片で、直立気味。外面はススが濃く付着する。

P-106

調査区北側に位置する土坑で、東側が膨らむ形状である。東西0.60m、南北0.57m、深さ0.15mを測る。弥生時代中期後半か。

出土遺物

68は鋤先口縁をもつ高坏で、口縁部のみ残存。外面は丹塗りである。

P-109

調査区北側に位置する土坑で、P-108を切る。東西0.45m、南北0.56m、深さ0.17mを測り、断面は逆台形。弥生時代後期前半。

出土遺物

69は甕の底部片で、底部に刷毛目調整が残る。平底である。70は逆L字形に近い口縁をもつ甕で、外面および口縁内面～胴上位に縦方向の刷毛目調整を施す。

P-110

調査区北側に位置する土坑で、東西0.60m、南北0.61m、深さ0.18mを測る。断面は逆台形。弥生時代後期中頃～後半。

出土遺物

71は、高坏の口縁部片で、調整はミガキではなく、内外面共に刷毛目調整である。

P-111

調査区北側に位置する土坑で、調査区外へと続くため、全体は不明であるが、現状で東西0.24m、南北0.57m、深さ0.20mを測る。

出土遺物

72は、甕の口縁部片で、口縁形状は、くの字状口縁である。

P-112

調査区北側に位置する隅丸方形の土坑で、調査区外へと続く。現状で東西0.53m、南北0.69m、

深さ0.17mを測る。

出土遺物

73は、鋤先口縁壺の口縁部片で、口縁が内傾斜する。外面に5条の暗文風ミガキが残るが、丹塗りではない。74は、甕の口縁部片で、口縁形状は、くの字状口縁である。口縁内面は、横方向の刷毛目調整、外面は縦方向の刷毛目調整を施す。

P-113

調査区北側で検出された柱穴で、東西0.41m、南北0.46m、深さ0.08mを測る。弥生時代後期後半。

出土遺物

75は、高坏の口縁部で、外面に波状文の暗文風ミガキが残る。

P-114

調査区北側で検出された土坑で、調査区外へと続いたため、全体は不明である。現状で、東西0.88m、南北0.88m、深さ0.23mを測る。弥生時代後期後半。

出土遺物

76は、大形甕の胴部片で、台形状突帯を1条付す。内外面共に粗い刷毛目調整である。

P-115

調査区中央部で検出された不整形土坑で、南側が膨らむ形状。東西0.84m、南北0.75m、深さ0.29mを測る。土坑内からは複合口縁壺の破片が出土しており、弥生時代後期後半。

出土遺物

77は複合口縁壺の口縁部片で、口縁上位が開き気味である。内外面共にナデ調整。78は、くの字状口縁甕で、外面にスガが付着する。外面および口縁内面に刷毛目調整を施す。79は甕の底部片。底部からの立ち上がりがあり、外湾気味となる。

P-116

調査区中央部に位置する大形の方形土坑で、東西1.18m、南北1.22m、深さ0.31mを測る。断面は逆台形を呈し、土器は多く出土した。弥生時代後期前半と考えられる。

出土遺物

80は、口縁が逆L字形から上方に立ち上がる壺で、口縁部のみの出土である。外面は縦方向のミガキが、わずかに残り、内面はナデ調整である。81は、口縁が外方に膨らむ甕の口縁部片で、外面黒塗りの痕跡がある。口縁下に突帯が1条付す。器形に違和感があり、鋤先口縁の内側の張り出し部が外れたものか。82は、くの字状口縁を持つ甕で、胴上位に最大径がくる。底部はレンズ底のような丸みがある。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整である。83は、くの字状口縁をもつ甕で、胴中位に欠損する。外面及び口縁内面は、刷毛目調整である。84も「くの字状口縁」を持つ甕で、口縁～胴上位にかけて残存する。調整は83と同様である。85は甕の底部片で、平底。

P-117

調査区中央部に位置する方形土坑で、南側が膨らむ形状である。東西0.97m、南北0.96m、深さ0.42mを測る。土坑内からは複合口縁壺の破片が出土しており、弥生時代後期前半。

出土遺物

86は、くの字口縁甕の口縁部片である。外面及び口縁内面は、粗い刷毛目調整を施す。87は、

甕の底部片で、底部からの立ち上がり方は、82と同様である。

P-119

調査区中央部に位置する土坑で、調査区外へと続く。東西0.49m、南北0.97m、深さ0.27mを測る。土坑内からは2点の袋状口縁壺の破片が出土しているが、接合しない。時期は弥生時代後期前半。

出土遺物

88は袋状口縁壺の口縁部片で、袋部は若干丸みのある屈曲である。外面は丹塗りで、内面は一部丹塗りが付着する。外面の調整は、刷毛目調整が残る。89は袋状口縁壺の胴部片で、M字突帯を1条付す。外面は丹塗りで、横ミガキがわずかに残る。

P-133

調査区南西側に位置する不整形土坑で、東西1.09m、南北1.07m、深さ0.27mを測る。断面は逆台形であるが、浅い。

出土遺物

90は甕の底部片で、底部からの立ち上がりは直線的である。91は器台で、直前的な脚部である。外面調整は刷毛目、内面は強いナデ調整である。

P-134

調査区南西側に位置する楕円形状の土坑で、東西0.47m、南北0.50m、深さ0.12mを測る。

出土遺物

92は鉢で、底部付近の胴部片。外面タタキで、内面は刷毛目調整。弥生時代後期後半か。

P-138

調査区南西側に位置する円形土坑で、東西0.62m、南北0.64m、深さ0.15mを測る。弥生時代後期後半。

出土遺物

93は、甕の底部片で、レンズ状底を呈する。風化のため調整不明瞭。

P-142

調査区南西側に位置する隅丸方形の土坑で、東西0.55m、南北0.59m、深さ0.11mを測る。P-143と切りあい関係にあり、P-142が切る形である。弥生時代後期後半。

出土遺物

94は壺の頸部片で、三角突帯を1条付す。内外面共にナデ調整であるが、全体に摩耗している。

P-144

調査区南西側に位置する不整形の土坑で、東西1.28m、南北1.10m、深さ0.24mを測る。1段のテラスに、円形状の柱穴が北東側に作られる。出土土器は少なく、甕の底部片のみ出土した。

出土遺物

95は甕の底部片で外面刷毛目調整。弥生時代中期後半か。

P-145

調査区南西側に位置する不整形の土坑で、調査区外に延びる。東西1.78m、南北1.08m、深さ0.18mを測り、底面は自然地形に沿って東に傾斜する。湧水があったが、木器の出土はない。

出土遺物

96は鋤先口縁甕の口縁部片で、口縁が短い。内外面共にナデ調整。

P-147

調査区南西側に位置する楕円形状の土坑で、P-148と切りあい関係にあり、P-148は現代攪乱であり、切られる。土坑は2段掘りで、1段目テラスは、北に向かって傾斜する。東西0.88m、南北1.79m、深さ0.23mを測る。時期は弥生時代中期後半と考えられる。

出土遺物

97は鋤先口縁甕の口縁部片で、全体ナデ調整である。98は甕の底部片で、外面の刷毛目調整を施す。99は鋤先口縁甕の口縁部片で、口縁端部にススが付着する。

P-150

調査区南西側に位置する土坑で、調査区外に延びる。東西1.22m、南北0.43m、深さ0.13mを測る。出土土器が少なく、壺の胴部片のみ出土。

出土遺物

100は、壺の胴部片で、外面は丹塗りで、ミガキを施すが、刷毛目調整が残る。

P-151

調査区南西側に位置する横長の不整形土坑で、東西1.37m、南北1.55m、深さ0.14mを測る。削平を受け、全体的に浅いものの、容器未成品や板材などの木製品が出土する。

出土遺物

【土器】

101は甕の底部片で、外面にススが付着する。内面は丹塗りであるが、明橙色で、内面朱付着土器のような明赤色ではない。

【木器】

1は柾目の板材で、上・下面共に割裂面である。小口面は、平坦に調整される。法量は長さ20.0cm、幅14.1cm、厚さ4.0cmを測る。2は容器の未成品か。下面は鉄製工具による平滑加工、上面は掘り込みを行う。法量は長さ24.7cm、幅13.3cm、厚さ2.9cmを測る。3は割れにより生じた端材か。下面は割裂面で、上面はケズリ。法量は長さ32.9cm、幅6.9cm、厚さ1.5cmを測る。

P-152

調査区南西側に位置する土坑で、東西0.59m、南北0.65m、深さ0.19mを測る。断面は逆台形である。

出土遺物

102は、器台の脚部片で、上位が剥離している。強いナデによる成形である。

P-153

調査区南西側に位置する土坑で、長軸が調査区外へと続く。東西0.62m、南北1.07m、深さ0.10mを測り、断面は逆台形である。

出土遺物

103は甕の底部片で、外面は縦方向の刷毛目の後、ナデ調整。

P-154

調査区南西側に位置する土坑で、東西0.67m、南北0.72m、深さ0.20mを測る。断面は逆台形である。

出土遺物

104は袋状口縁壺の口縁部片で、内外面共に丹塗りで、横方向のミガキ調整である。105は高杯の口縁部片で、鋤先口縁である。外面丹塗りで、ナデ調整。

P-155

調査区南西側に位置する土坑で、東西0.60m、南北0.60m、深さ0.30mを測る。断面は逆台形である。弥生時代中期後半。

出土遺物

106は鉢の口縁部片で、素口縁である。内外面共に丹塗りで、ナデ調整である。107は壺の底部片で、外面に丹がわずかに付着する。底部を強調するような形態で、弥生時代中期後半である。

P-156

調査区南西側に位置する柱穴で、P-157に切られている。直径0.31m、深さ0.15mを測る。弥生時代後期前半か。

出土遺物

108は甕の口縁部片で、くの字状口縁をもつ。外面は二次焼成を受け、器壁が剥離する。外面刷毛目調整である。

P-157

調査区南西側に位置する土坑で、P-156を切っている。東西0.64m、南北1.02m、深さ0.19mを測る。弥生時代後期前半。

出土遺物

109は鋤先口縁壺の口縁部片で、調整は内外面共にナデ調整。弥生時代中期後半。110は、くの字状口縁をもつ甕で、内外面共にナデ調整。111は、弥生時代後期初頭に糸島で見られる甕で、口縁のみ残存する。口縁は短く直立気味に立ち上がる。

P-159

調査区南西側に位置する土坑である。東西0.75m、南北0.48m、深さ0.12mを測る。弥生時代中期末と考えられる。

出土遺物

112は鋤先口縁をもつ高杯で、風化により調整不明瞭である。

P-162

調査区南西側に位置する土坑で、P-161と切りあい関係にある。P-161を切っており、東西0.53m、南北0.25m、深さ0.80mを測る。

出土遺物

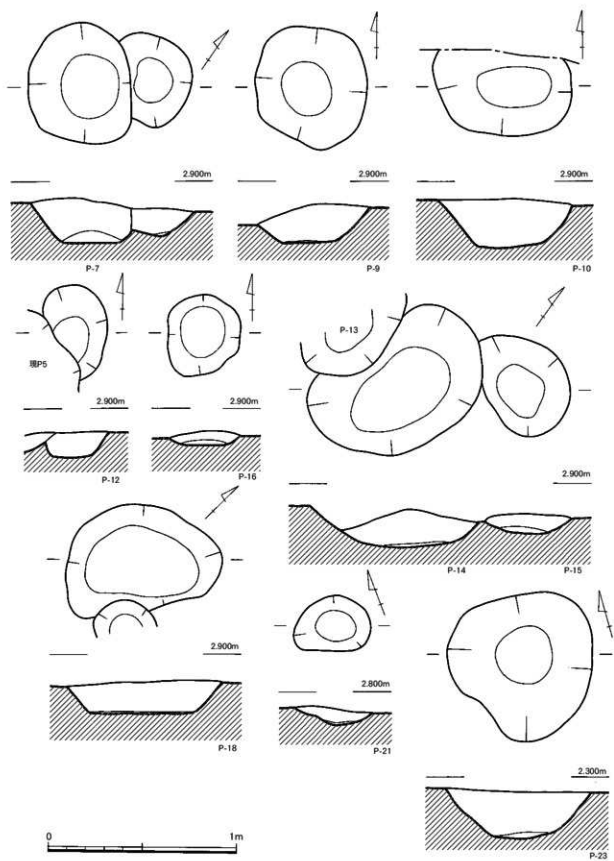
113は甕の底部片で、外面刷毛目調整。

P-163

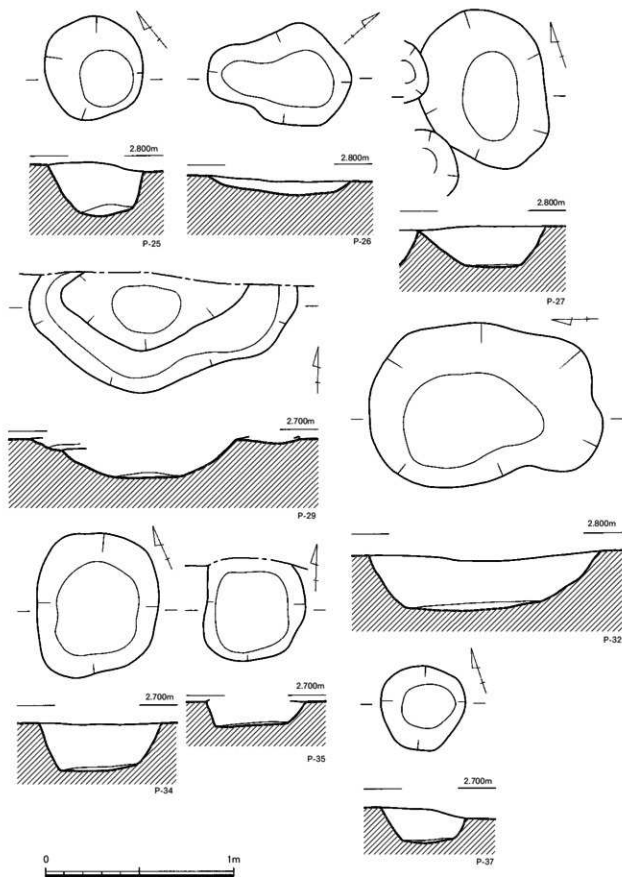
調査区南西側に位置する土坑で、P-164、166と切りあい関係にある。P-164、166を切っており、東西0.56m、南北0.47m、深さ0.28mを測る。弥生時代後期前半と考えられる。

出土遺物

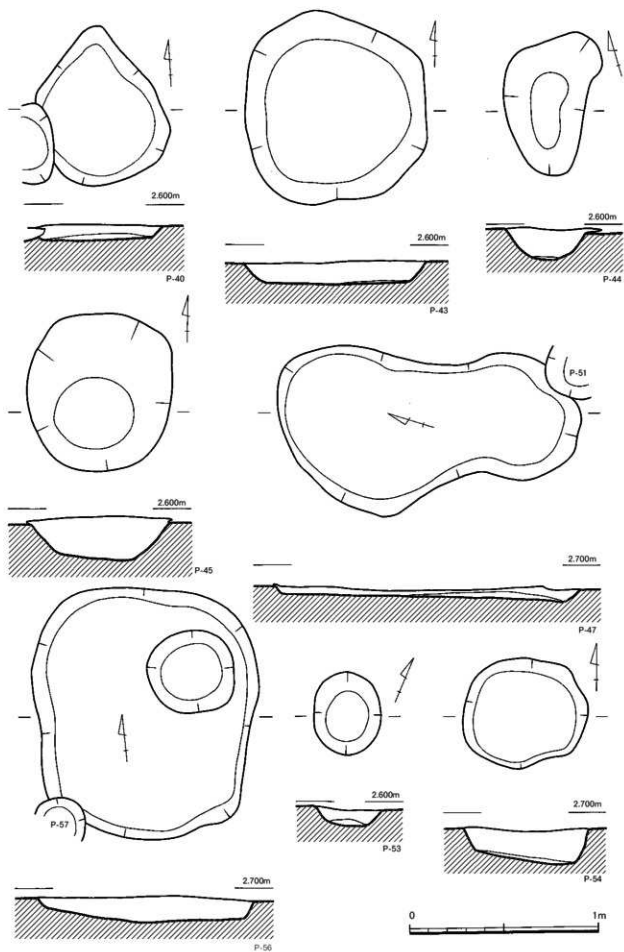
114は、くの字状口縁をもつ甕で、口縁～胴上位のみ残存。115は、内傾する鋤先口縁をもつ甕で、口縁～胴上位のみ残存。



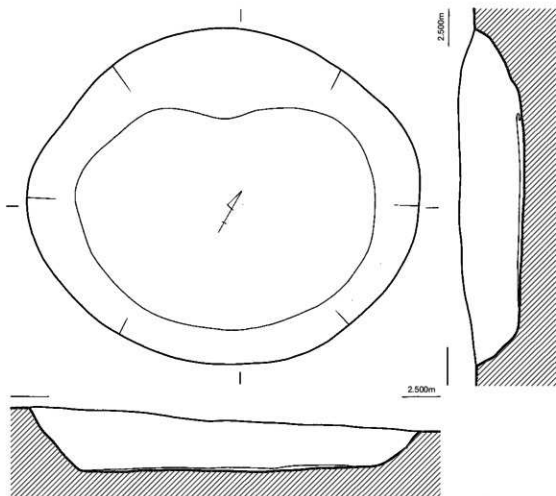
第86图 P-7,9,10,12,14,15,16,18,21,23平断面实测图(1/20)



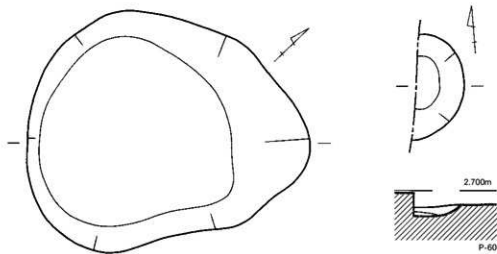
第87图 P-25,26,27,29,32,34,35,37平断面实测图(1/20)



第88图 P-40,43,44,45,47,53,54,56平断面实测图(1/20)



P-66



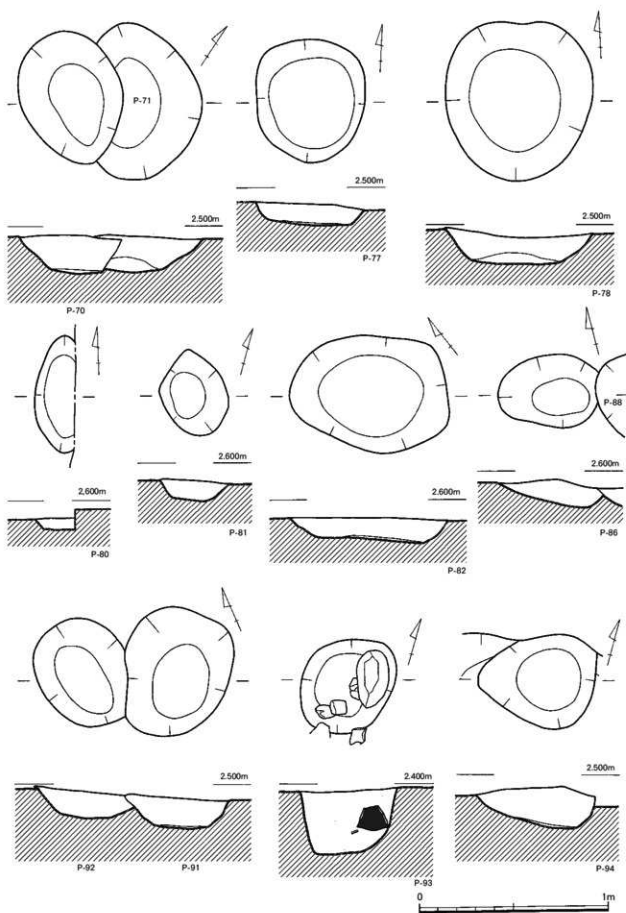
P-69



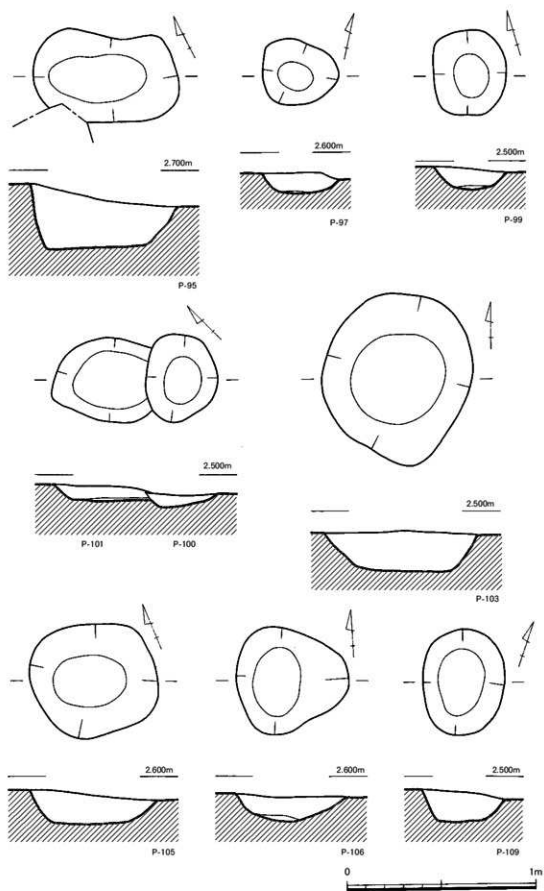
P-69



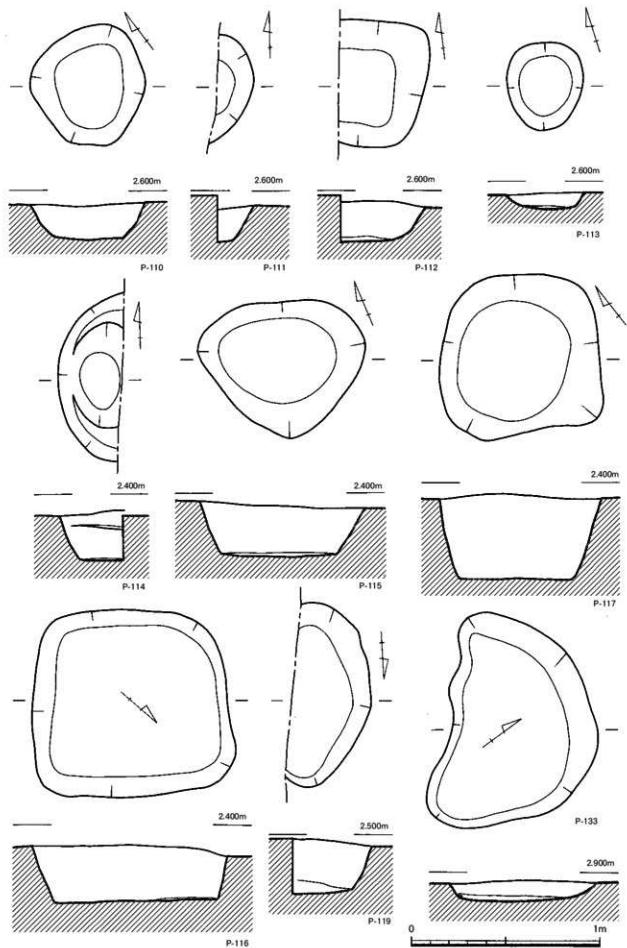
第89图 P-60,66,69平面实测图(1/20)



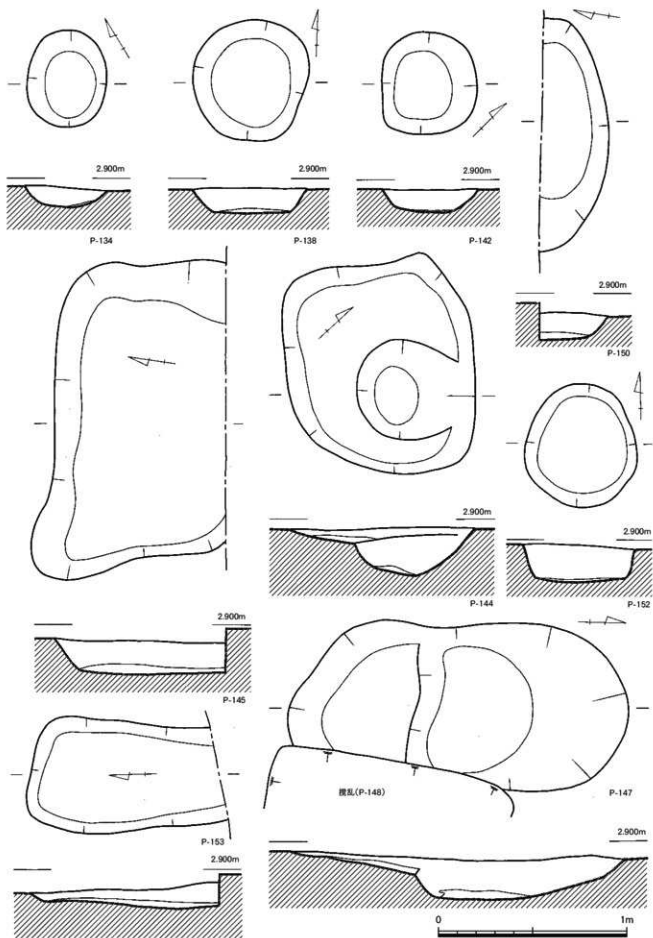
第90图 P-70,77,78,80,81,82,86,91,92,93,94平断面实测图(1/20)



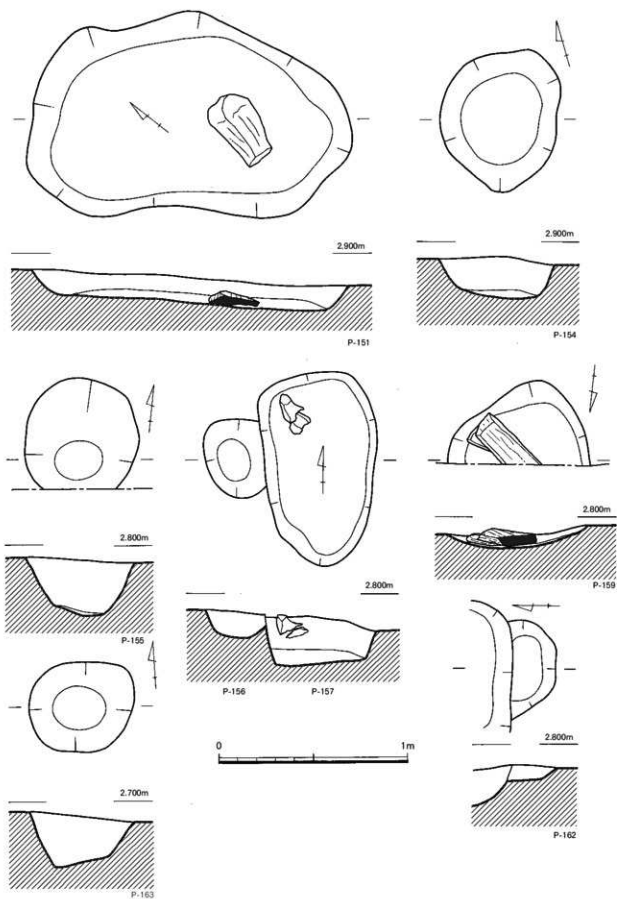
第91圖 P-95,97,99,100,101,103,105,106,109平面実測圖(1/20)



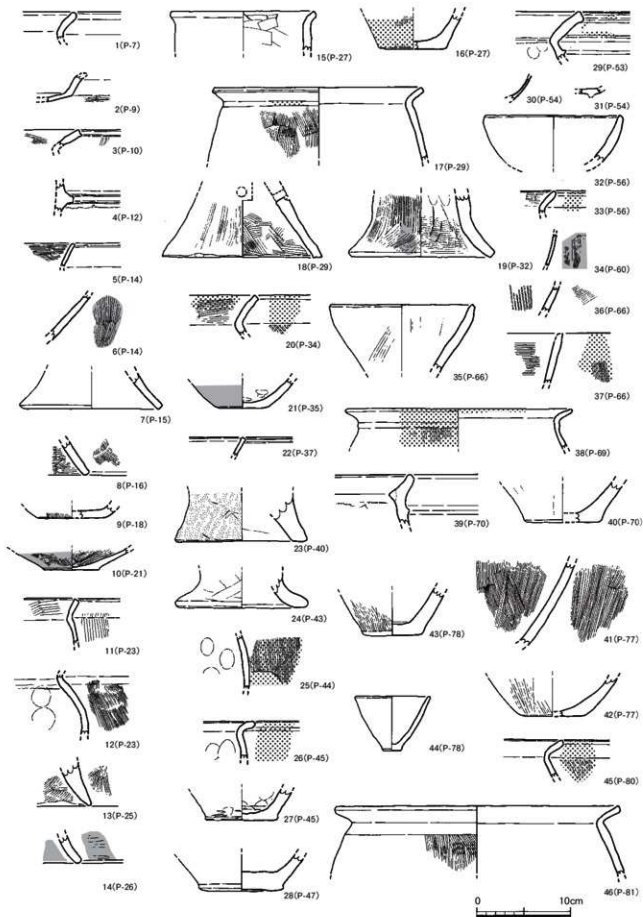
第92图 P-110,111,112,113,114,115,116,117,119,133平面实测图(1/20)



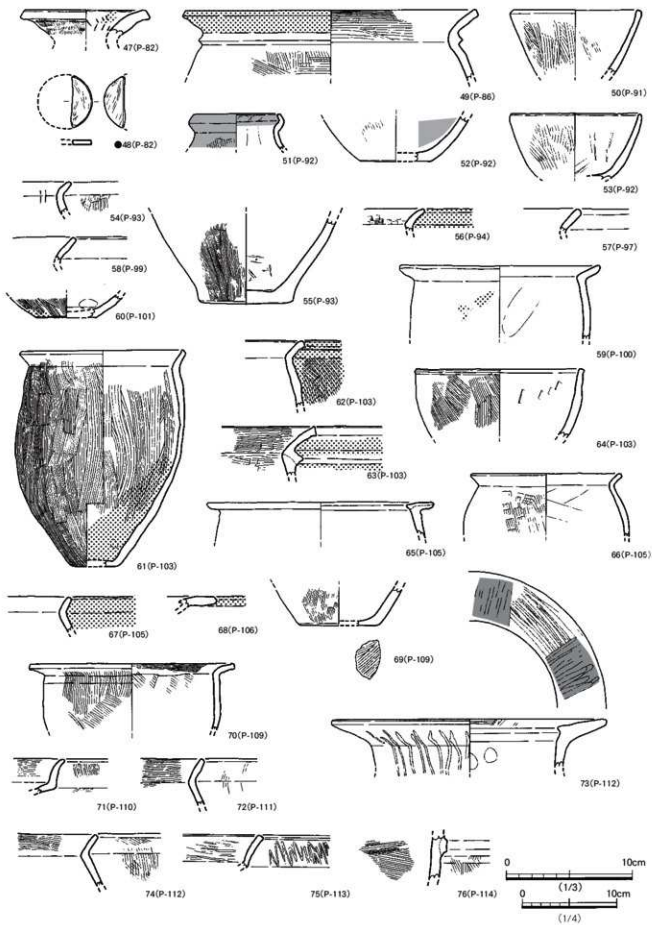
第93图 P-134,138,142,144,145,147,150,152,153平面图实测图(1/20)



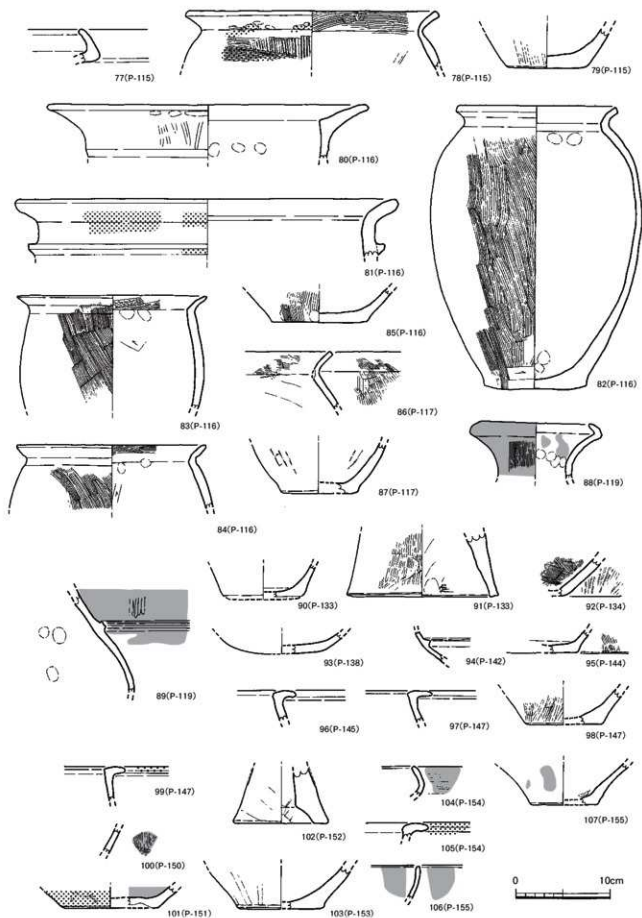
第94图 P-151,154,155,156,157,159,162,163平面实测图(1/20)



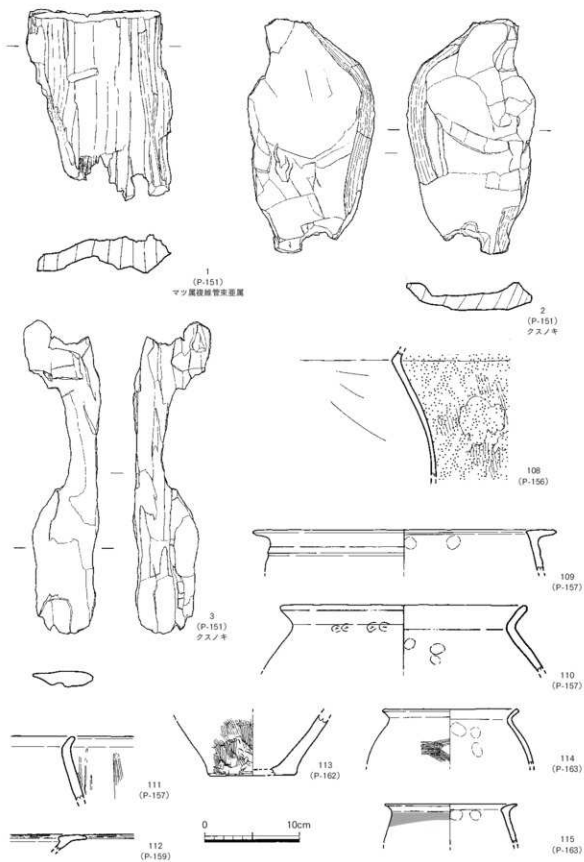
第95图 P-7~81出土物实测图(1/4)



第96図 P-82~114出土遺物実測図(1/4, ●は1/3)



第97图 P-115~155出土遺物実測図(1/4)



第98図 P-151,156~163出土遺物実測図(1/4)

IV. まとめ

(1) 深江石町遺跡における遺構の変遷について

本遺跡は、古砂丘上に展開する深江遺跡群の縁辺部にあたり、砂丘上の掘立柱建物群と区画溝および谷部の土坑群で構成される集落域である。谷部は漸移的な土器の堆積があり、時期は、弥生時代後期初頭～終末期で、土坑群の機能が停止した後、順次堆積したものと考える。

【弥生時代中期後半】

弥生時代中期後半では、調査区北側で、3号掘立柱建物、5号掘立柱建物、調査区南側で柱穴もしくは土坑が集中する（P-144、145、147、153、155、159）。調査区南側の柱穴は、将来的に掘立柱建物となる可能性がある。また、P-151は、砂丘上に位置し、他の土坑と立地が異なる。土坑内からは割裂面未調整の板材が出土しており、木器生産が砂丘上でも行っている可能性を示唆している。

【弥生時代後期前半】

弥生時代後期前半は、当遺跡の中心時期となる。調査区北側では、1号掘立柱建物、4号掘立柱建物、7号掘立柱建物、調査区南側で8号掘立柱建物があり、7号掘立柱建物は1号溝埋没後に建てられている。

区画溝（1、2号溝）は、自然地形を意識した掘削で、掘削時期は、弥生時代中期末頃、最終埋没は弥生時代後期前半と考えられ、包含層と接する最上層に弥生時代後期後半の土器が混入する。

谷部の土坑群は、分散的に9基確認され、木器製作に関連する土坑と考えられるが、3～5号土坑、6～8号土坑が近接してまとまりを見せている。1号土坑は、素材流出を防ぐためか、スタジイ材の分割材は杭で固定され、その近辺で板材が出土する。農具製作に使用されるクヌギ材、アカガシ材が出土し、大型台石や砥石、敲石、磨石も木器製作に関連する石器と考えられる。2～8号土坑のうち、2号土坑は、把手付容器、斧柄の未成品や板材、杭が出土し、樹種は多様である反面、3号土坑でカキノキを使用した短甲製作、4号土坑は建築材に使用されるクヌギの分割材を中心に出土しており、深江城崎遺跡と同様、樹種と土坑の密接な関係が想定される。

【弥生時代後期後半～終末期】

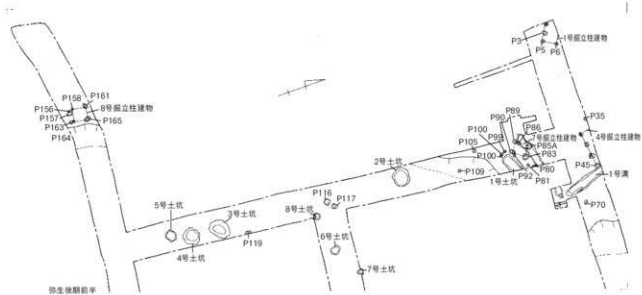
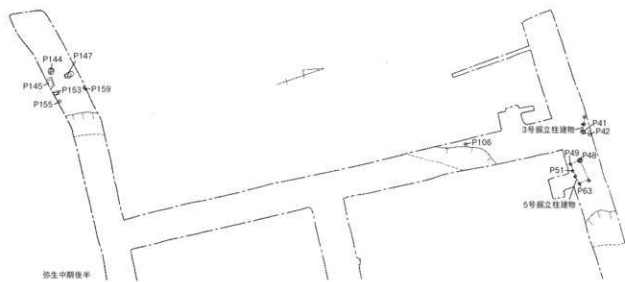
調査区北側で、6号掘立柱建物を検出したが、調査区南北で建物として認識できなかった柱穴が多数検出された。本遺跡では、この時期でも集落が継続していることは、谷部に堆積する土器から伺うことができるが、谷部を利用している痕跡はない。深江城崎遺跡でも谷部から楽浪系土器や内面朱付着土器を含む大量の土器や木器が出土しており、木器製作は別場所へ移動して継続していたと考えられる。

以上の成果から、深江遺跡群の集落は、弥生時代中期後半～終末期まで継続して営まれ、外来・国内交易や木器生産の実態が明らかになりつつある。

(2) 絵画土器について

P-112から出土した鋤先口縁壺（第96図-73）は、報告書作成の終盤で、絵画であることに気づき、また、谷部包含層から出土した鋤先口縁壺（第8図4）と接合することが判明したため、改めて第100図に示している。

絵画は、口縁上面に描かれており、右に魚？と考えられる楕円状の文様2つと左に縦・横・三角に描く直線群で構成される。その線には、先端鋭利な工具による線と先端丸みのある工具によ



第99圖 深江石町遺跡遺構變遷圖(1/700)

る線があり、上の魚は前者、下の魚は後者である。

また、口縁上面は、暗文風の縦ミガキが5cm程度の間隔で施され、その間は横ナデであるが、絵が描かれている部分については、横ミガキの後、暗文風の縦ミガキを施し、キャンパスを整えたうえで、絵を描いている。時期は弥生時代後期前半であり、深江城崎遺跡の絵画土器（クジラ）と同時期である。魚や鯨など海の生物を題材としており、海と共生する深江遺跡群の特徴を裏付ける資料として重要である。

(3) 削貫式木甲について

深江石町遺跡3号土坑から出土した削貫式木甲は、後胴1点、前胴未成品2点、分割材2点で、いずれもカキノキ材である。巨木を削り抜いて形成する

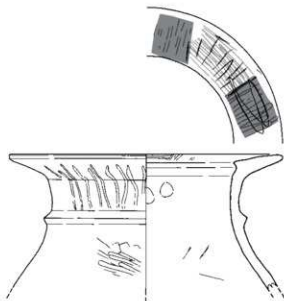
削貫式木甲で、分割材から推定される直径30～31cmの原材を3分割して、縦木取りで前胴2点、後胴1点を製作している。前胴も右、左各1点ずつ出土しており、製作工程がうかがえる貴重な資料である。最も製作が進んでいる後胴は、羽根付の削貫式木甲で、白木で、加飾が少ないものの、木器生産に係る土坑から出土していることを考慮すると、加飾途中の未成品の可能性もある。

弥生時代の木甲は、管見の限り、17遺跡、その内訳は、組合式が9遺跡、削貫式が8遺跡で確認されており、その分類や分布、背景などを検討した神谷正弘氏や橋本達也氏の一連の研究がある（神谷1990, 2001, 2003, 橋本2001, 2003）。

橋本氏は、木甲を組合式木甲、加飾削貫式木甲、無飾削貫式木甲に分類し、組合式は弥生時代中期初頭までには出現し、弥生時代中期中葉に盛行すること、削貫式は弥生時代中期前半までには出現し、弥生時代後期以降に普及、弥生時代終末～古墳時代前期に鉄製襷付短甲の祖型があることを指摘している（橋本2003）。また、神谷氏は、橋本の組合式木甲を規格や使用目的を考慮して、さらに3型式に分類している（神谷2013）。

組合式木甲は、弥生時代中期初頭前後の細形銅剣文化における波及と展開の脈絡で考えられており（橋本2001）、茶戸里遺跡2号墳墓出土木甲からも朝鮮半島南部からの流入が想定される（神谷2013）。また、これと同時期の惣利遺跡（福岡県筑前町）や南方遺跡（岡山県）の削貫式木甲も同じ脈絡でもたらされた可能性があるが、弥生時代後期に盛行する削貫式木甲とは、時期的な飛躍があり、資料的な少なさや個々の形態差が大きいこともあり、継続的な系譜には慎重にならざるをえない。

一方、弥生時代の木甲は、美しい彫刻や漆塗りなど祭祀的色彩をもつものがあり、威嚇や権力の誇示という側面から、階層的上位の使用者が想定されている（橋本1996、岩本1999）。中でも



第100図 P-112出土絵画土器実測図(1/4)

伊場遺跡出土の羽根付朝貫式木甲は、統率者（首長層）が着用した木甲であると同時に、祭祀に伴う鳥装にも用いられ、使用者が司祭的な役割を兼ねるとの解釈や祭儀における模擬戦での使用なども想定され、祖霊・穀霊祭祀との関連が考えられている（春成1989）。このことから、本遺跡の羽根付朝貫式木甲は、武器的側面と祭祀的側面を併せもつ統率者を想定しておきたい。

弥生時代後期前半は、北部九州の殺傷人骨や土地開発の様相から、より広域の地域間争いが拡大し、それに伴い首長権の維持・強化がなされたこととされ、武器型青銅器の祭祀化や重層的な鏡序列の形成に至ると考えられている（橋口2007、福永2001）。この時期の「伊都国」では、三雲・井原遺跡を中核として、東西の玄関口である今宿五郎江遺跡と深江遺跡群が存在し、「三雲＝原の辻貿易」による外来系土器や鉄素材がもたらされ、国内交流では瀬戸内系土器が出土する時期である。朝貫式木甲は、「伊都国」の港湾集落である今宿五郎江遺跡と深江遺跡群で出土しているが、外圧との緊張関係による首長権の強化と共同体祭祀の発展がもたらした産物と言えるのかもしれない。

（4）深江石町遺跡出土石器について

溝・土坑・ピットの遺構で出土する石器の器種組成は、砥石が多くを占め、次いで敲石・磨石・台石・凹石の礫石器が出土するほか、未成品の石包丁や紡錘車が若干含まれ、完成品の石器が出土していない。対して、遺構面上層の谷部包含層出土の石器は、石包丁・紡錘車の完成品と未成品、石錘が一定数出土するが、砥石の占める割合が遺構内出土石器と同様に高い。砥石の中には仕上げ砥石が含まれるため、鉄器の研磨に使用されたものと考えられる。遺構と黒色包含層で木器と共存して砥石が一定数出土する状況から、伐採後に製材を行う木工加工場が想定される。

石錘に着目すると本遺跡では、九州型石錘の博多湾型と打欠石錘が少量出土しているが、南側に隣接する深江城崎遺跡では九州型石錘でも糸島型のものが多くを占め、打欠石錘や大形有孔石錘も出土しており、若干の種類差があるほか、碇石や木器では漁労具や舟の二次転用品が出土している（江崎編2023）。そのため、本遺跡と深江城崎遺跡周辺に漁労を生業としていた人たちの存在が想定されることと、遺跡間で捕獲対象の違いがある可能性が考えられる。近年、九州型石錘の博多湾型や糸島型など（大庭2023分類：九州型石錘Ⅰ類）は、佐渡式イカ釣具のヤマデと同様のイカ釣具として用いられた可能性が高いと評価されている（大庭2023）。一方で、打欠石錘についてみると、出土しているものは長軸が10cm超えの楕円状の形状で、重量は500g以上と大形品で、御床松原遺跡（井上編1983）の弥生時代の堅穴建物跡から出土した打欠石錘の大形品と形状や重量が酷似しているほか、御床松原遺跡からはスズキ、クロダイ、マダイ、フグ、サバ、マグロ、カツオなどの動物遺存体が出土している点から、本遺跡の打欠石錘は中型・大型魚を捕まえるのに使用された可能性が考えられる。

（5）まとめ

本遺跡は、深江遺跡群縁辺部の調査でありながら、弥生時代中期後半～終末期の掘立柱建物群を中心とした時期的変遷や弥生時代後期前半を中心として木器生産という低地利用の様相の一端が明らかになったことは重要である。特に羽根付朝貫式木甲の出土は、「倭国大乱」前夜の軍事的側面や共同体における祭祀的側面を考える上で貴重な遺物と考える。また、近年では、深江遺跡群の港湾集落として交流や交易の側面のみならず、朱の精製や木器生産など新たな拠点集落像が明らかになってきており、今後の調査成果を期待したい。

なお、本遺跡の土坑群については、調査過程で破棄されやすい樹枝・木屑・樹皮片を極力取上げた。特に、木屑は木器加工段階で排出される製作残滓であり、当該期の木工活動を明らかにしえる資料と考えるが、時間的・紙面的な都合上、全て実測することは不可能であり、特徴的な木屑を図化・掲載し、図化できない木屑は写真のみを掲載した。その分析については改めて検討し、別稿に記したい。

【参考文献】

- 井上裕弘編1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会
- 江崎靖隆編2023『深江地区遺跡群 深江城崎遺跡』糸島市文化財調査報告書 糸島市
- 大庭孝夫2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』平成30年度～令和4年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書 九州歴史資料館
- 神谷正弘1990『日本出土の木製短甲』『考古学論集』第3集 歴史堂書房
- 神谷正弘2013『武具-弥生時代木製短甲・組み合わせ木甲について-』『柳田康雄古希記念論集 弥生時代政治社会構造論』雄山閣
- 神谷正弘2010『日本出土の木製短甲・組み合わせ短甲・襦褌木甲について』『古文化談叢』第54集 九州古文化研究会
- 下條信行1984『弥生・古墳時代の九州型石鍾について』『九州文化史研究所紀要』29
- 橋本達也2003『有機質甲冑・盾・鞞・胡籥・弓』『考古資料大観』第7巻 小学館
- 橋本達也2001『弥生から古墳時代の甲冑系譜と形式論』『古代武器研究』2 古代武器研究会
- 平尾和久2008『紡錘車の編年とその画期』『伊都国歴史博物館』3
- 森貴教2018『石器の生産・消費からみた弥生社会』九州大学人文学叢書13

